

第1章 序論

1. 1 問題提起と研究目的

私たちは日常会話において、お互いの利益に関わらない情報のやりとりをする場合もあれば、何らかの形で相手に負担をかけたり、相手の心情を害したりしてしまう可能性のある会話をしなくてはならない場合もある。その際、対人関係の上での支障が生じないように配慮して、様々な言語行動を講ずることになる。しかし同時に、そうした言語行動の在り方が、聞き手にもある種の解釈を要求する点で、誤解を招くこともあり、また違った意味でのコミュニケーション上の支障になることも考えられる。特に異文化間コミュニケーションにおいては、話者が互いの母語文化において行われている言語行動のパターンを無意識に遂行するため、両者の間で誤解が起きることがある。そのような誤解を防ぐためには、様々な場面においてある文化の成員がいかにコミュニケーションをするのかを探ることが必要である。

本研究では、日本語母語話者と台湾華語母語話者¹⁾によるある特定の場面での言語使用の共通点と相違点を探るため、「断り」場面を取り上げ、特に依頼に対する「断り」に焦点を当て、分析する。「断り」という言語行動は、相手の依頼などに対して「その意に沿えない」という気持ちを相手に理解してもらおう行動であり、その行動自体が相手の心情を害し、人間関係を損なってしまう危険性を伴うものである。したがって、「断り」を行う際、話し手は、「断り」を達成するほかに、相手との人間関係を維持するため、相手に不快な思いをさせない配慮が必要であると言われてきた。このような相手のフェイスを脅かす行為²⁾である「断り」に対して、両言語話者はいかに反応しながら会話を進めているのかに注目する。

藤森 (1994) は、『断り』発話行為は、対人関係において、『不快状況』の生起をもたらす。また、相手の意向に沿えないことを前提としており、日本語の『相手に合わせる』と

¹⁾ 台湾で使われている中国語は「國語」か「華語」と一般に呼ばれている。「國語」では「国の言語」と認識されやすいため、本研究では、台湾で使用されているマンダリン・チャイニーズのことを「台湾華語」と呼ぶことにする。また、台湾の人を「台湾華語母語話者」とする。

²⁾ Brown&Levinson (1987) は、人間がもつ基本的な欲求として、フェイスの概念を提示している。フェイスには、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがある。これらのフェイスを脅かす行為をFTA (Face Threatening Acts) と呼ぶ。「断り」は依頼者の欲求に否定的に答えることであり、依頼者のポジティブ・フェイスを脅かすことになりうるため、FTA の一種であると言われている。

いう原則に反する行為である。そのため、日本語では断り発話行為を行った場合には、対人関係修復行為をとることが一般的である」と述べているが、対人関係修復行為をとることに関しては、おそらくほかの言語においても同様であろう。

日本語母語話者及び中国語母語話者における「断り」について馬場・禹（1994）は、親しい間柄の場合、日本語母語話者は相手に察してもらおうとすることに重点が置かれる傾向があるのに対して、中国語母語話者は相手に共感を示しつつ積極的に働きかけるという熱意を示すことに重点が置かれていると述べている。一方、親しくない場合、日本語母語話者は言葉遣いに気を配り、丁寧表現を多く用いているのに対し、中国語母語話者はそのような配慮が見られず、比較的気軽に断っていると指摘している。

これまでの日本語における「断り」について、主に調査紙を用いた談話完成テスト（Discourse Completion Test；以下、DCT）³やロールプレイなどといった方法で調査がなされてきた。そして、中国語の調査でも同様の方法が用いられていた。

しかしこれらの研究は、依頼を断る側の一発話ずつのやりとりを分析対象としているものが多く、談話レベルでの「断り」という言語行動には焦点を当てていない。例えば、「言語調査の実験に協力してくれない？」と依頼されたら、「ごめん、用事があるんだ」という一言で済ませず、「断り」が成立した後にも、相手との人間関係を維持するため、「なんか、メーリングリストに回そうか」と代案提示をしたり、「ほんとにごめんね」「なんか、あまり力になれなくて」と回を重ねて謝ったりすることがありうると考えられる。

それゆえ、本研究では、DCTの結果からだけでは明らかにできない実際の相互作用におけるダイナミックな言語行為を捉えるため、「談話の定量的分析方法」と「質的分析方法」の両方を用いる。すなわち、「会話」における相互作用に焦点を当てた談話研究は、会話資料を精密に文字化、コーディングし、量的処理を行うことにより客観性を保つと同時に、質的分析も合わせて行い、多量のデータの単純な量的分析によっては見逃されやすい、発話の微細な特徴を捉えることができる。

また、中国大陸における中国語の自然会話分析もいまだ少ないが、台湾における華語を母語とする話者（以下に、「台湾華語母語話者」と称する）を対象とした研究はほとんど行われていないため、⁴台湾華語母語話者の実際の言語行動における特徴を探ることは有意義

³ 談話完成テスト（Discourse Completion Test：DCT）とは、調査協力者に予め設定された状況を与え、実際にその状況に置かれた場合、調査協力者ならどのように答えるかを、空欄に書いてもらうものである。

⁴ Liao（1994）は、中国語（Mandarin Chinese）は中国国内だけではなく、香港、シンガポール及び台湾でも一般に使われているが、地理上と政治上の違いにより、これらの四つの地域は、ポライトネスの社会

な試みであると考えられる。

そして、本研究では依頼に対する「断り」のストラテジーの選択に影響を与えると考えられる聞き手の話し手に対する「相対的力 (Power)」⁵の差（ここでは「学年の差」）についても分析する。

従って、本研究では、日本語母語話者同士と台湾における華語母語話者同士の実際の会話における依頼に対する「断り」を談話レベルから分析し、日本語と台湾華語の両言語話者がどのように断りをしているのかを探り、その共通点と相違点を明らかにする。

1. 2 本論文の構成

本研究の構成は次の通りである。

第2章では、「待遇コミュニケーション」と先行研究の概観、具体的な目的、研究課題を提示する。

第3章では、本研究で用いられた会話資料の収集方法について述べる。

第4章では、会話資料の文字化方法及び分析方法を記す。

第5章では、会話資料から得られた依頼に対する断り談話を、各構成要素の出現順序、使用頻度、具体的な内容という三つの観点から分析し、その結果を示し、考察を行う。

第6章では、会話資料から得られた依頼に対する断りを談話レベルから分析し、日台それぞれの断り行動の展開パターンを明らかにし、さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているかを考察する。

第7章では、会話資料から得られた依頼とそれに対する断りとを含む実際の電話会話を資料に、依頼側と被依頼側とのやりとりを相互関係と捉え、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかにつ

語用論の面では独立して発達してきたと指摘している。

⁵ Brown&Levinson (1987) によると、特定の行為が相手のフェイスを脅かす度合いは、聞き手の話し手に対する「相対的力 (P)」、話し手と聞き手の「社会的距離 (D)」、当該の行為がその文化においてどの程度相手に負担をかけるものであるとみなされているかという「負担の度合い (Rx)」の三つの要素によって決まるとされている。また、この「相対的力 (P)」は、「権力」「勢力」などのような社会学的に規定される概念ではないという。ここでは、これらの三つの要素のうち「相対的力 (P)」だけに変化を与え、「断り」のストラテジーの選択に影響を及ぼすかどうかを考察する。

いて検証する。

第8章では、実際の会話に見られたやりとりの特徴をどのように教室活動に取り入れ
かについて、日本語教育への提案を述べる。

第9章では、結論と今後の課題を述べる。

第2章 研究の背景

2. 1 「依頼」と「断り」について

本研究では、高木（2003）を参考に「依頼」と「断り」を以下のように規定する。

「依頼」は、自分から自覚的な意図を持って相手の行動展開を促す「行動展開表現」行為の一種であり、自分の利益になることを相手の行動によって実現する行為である。

「断り」は、例えば「依頼」に対する断り、「勧誘」に対する断り、「申し出」に対する断りなどのように、何か「断り」に先行する行動展開表現行為があつて、その先行する行為に誘発されるものである。本研究では、「断り」は、「依頼」の働きかけを受けた被依頼側が、その働きかけを理解してはじめてその表現意図を持ち、依頼側から働きかけられた行動を実行しないことを自ら決定し、それにより相手の受けるはずであった利益を失わせる行為であると定義する。

また、ここでは、「依頼・断り」のコミュニケーションを、依頼側と被依頼側がそれぞれ、相手の表現意図を把握したり、自分の表現意図を相手や状況への配慮を示しながら表明したりする相互行為であると捉える。

2. 2 「待遇コミュニケーション」について

2. 2. 1 「待遇コミュニケーション」とは

蒲谷（2003a）（2003b）では、「待遇コミュニケーション」とは何か、その研究や教育、教育研究とは何かについて、以下のように述べられている。

「待遇コミュニケーション」というのは、従来の「敬語」「敬語表現」「敬意表現」「待遇表現」「待遇行動」「ポライトネス」等々の概念を含み、さらに「待遇理解」、そして「コミュニケーション」という観点を包括的に捉えようとするものである。したがって、研究対象の範囲は、例えば、「語」のレベルの「敬語」から、相手を貶めるような「コミュニケーション行動」まで、非常に幅広いものとなる。その意味では、「これが待遇コミュニケーションだ」というような規定ではなく、「これも待遇コミュニケーションだ」と捉えられるよ

うな規定の方向を探るほうがよいと考えられる。

しかし、「待遇コミュニケーション」という捉え方の鍵となる重要な観点があることは言うまでもない。

一つ目は、「待遇コミュニケーション」は「主体」の「行為」として成立する、ということである。まずは、「個」の行為として成立する「待遇コミュニケーション」が、そして、その上で「待遇コミュニケーション」における共通性や普遍性というものが、重要なものとなる。ここでの「主体」には、従来の「表現主体」「理解主体」を統合した「コミュニケーション主体」というものを考えておく必要がある。「コミュニケーション主体」は、「表現行為」においては「表現主体」となり、「理解行為」においては「理解主体」となって、「コミュニケーション」を展開させていくことになる。

二つ目は、「待遇コミュニケーション」における「コミュニケーション主体」が、「人間関係」や「場」—それらを総合して「場面」と呼ぶと、「場面」というものをどう認識しているのか、その認識に基づいてどのような「コミュニケーション」が展開し、成立するのか、ということである。「主体」と「場面」、これが「待遇コミュニケーション」において最も重要な観点になる。

もちろん、「人間関係」や「場」の認識は、個別的なものであって、極めて相対的、動態的なものである。「上下親疎」や「改まり—くだけ」といった認識だけではなく、抽象的に言えば、常に動く「主体」の時間的・空間的な位置に対する認識が問題となるのであり、「個」の時間的、文脈的、状況的、心理的な位置づけとして捉えられるものである。そうした意味での「場面」というものを捉え、考えていくことが重要な点になる。

三つ目は、「待遇コミュニケーション」は、基本的に「表現行為」「理解行為」の「やりとり」と「くりかえし」によって展開、成立することを考えると、常に、「文章・談話」の単位—これを総称して「文話」と呼んでいるが、「文話」で捉えていく必要があるということである。「文話」単位で考えようとするのは、「語」や「文」の単位では考えにくい、「語」や「文」の単位では見えてこない「待遇コミュニケーション」というものの本質を明らかにしていこうとするためである。

四つ目は、「コミュニケーション主体」の「意図」を重視するということである。

基本的には、「主体」は、何らかの「意図」を持ち、その意図することを叶えるためにコミュニケーションをするのだと考えられる。「意図」自体は、見えないものである。そのため、「意図」の重要性は理解されつつも、非常に扱いにくいものであったと言えるだろう。

「待遇コミュニケーション」における「意図」をどう明らかにしていくのかは、大きな課題となる。

これらのほかにも、「コミュニケーション」の「題材」や「内容」、「言材」、「媒材化」など「待遇コミュニケーション」を考えるための重要な観点がある。

要するに、「待遇コミュニケーション」の基本的な規定としては、ある「意図」を持った「コミュニケーション主体」が、ある「場面」において、「文話」単位で行う、「表現」「理解」の「行為」、ということになる。

「待遇コミュニケーション」の研究は、こうした「コミュニケーション行為」の全体を対象とするものだけではなく、例えば「敬語」や「相手を貶めるしぐさ」など、その部分的、要素的なものを対象とした研究を含むが、それらも、ある「場面」における「コミュニケーション主体」の「行為」としての「待遇コミュニケーション」全体にどう関わっているのか、どう位置づけられるのか、という点が明確になっていることが必要だろうという。

また、「待遇コミュニケーション」の教育／学習を考えていく際にも、上に述べた点は、極めて重要な観点になる。

「待遇コミュニケーション」は「主体の行為」として成り立つものである以上、その教育／学習においても、「コミュニケーション主体」となる個々の学習者の「行為」として考え、扱っていく必要がある。基本的には、「コミュニケーション主体」である学習者自身の、「意図」を持った「表現行為」「理解行為」の「やりとり」「くりかえし」においてのみ成り立つ、といった捉え方が前提になる。

「主体」となる個々の学習者は、自らの母語による「待遇コミュニケーション」をどう捉えるのか、外国語あるいは第二言語などによる「待遇コミュニケーション」をどう捉えるのか、その上で、実際にどのような「待遇コミュニケーション」を行っていくのか、という極めて能動的で動的な能力を身に付け、高めていくことになるわけである。

教師は、学習者がそうした「待遇コミュニケーション」の能力を身に付け、高めていくためにどうすればよいのか、何ができるのかを考え、実践し、そして、そうした考えや実践を捉え直していくという行為が必要になる。基本的には、「待遇コミュニケーション行為」の全体を対象とするものだけではなく、その部分的、要素的なものを対象とした研究を含むが、それらも、学習者の「行為」としての「待遇コミュニケーション」全体にどう関わっているのか、どう位置づけられるのか、という点が明確になっていることが必要だろう

という。

2. 2. 3 「待遇コミュニケーション」と本研究の関連性

B&L のポライトネス理論によると、「断り」という発話行為は依頼側の依頼を受け入れてほしいという欲求に否定的に答えることであり、依頼側のポジティブ・フェイスを脅かすことになりうる。そのため、「断り」という行為には、依頼側との人間関係を損ねることなく、同時に自分の依頼を断りたい意志を伝えるためのストラテジーを工夫することが必要となる。そこで、人間関係に支障をきたさないように、ポライトネスという手段が必要不可欠になってくる。つまり、「断り」という行為は聞き手に対する「配慮」という点で、ポライトネスと深く関わっていると言える。

このように、人々は他人からの依頼に対して、いかなる言語表現で断り、相手との会話を進めていくのかに注目する。日本語母語話者と台湾華語母語話者の「断り」をポライトネスと関連付け、いかなる点が共通しており、いかなる点が相違しているかを明らかにする。例えば、代案や条件を提示するということは、聞き手の要求を理解し、関心を持っていることを示すポジティブ・ポライトネスの表しであると考えられる。また、依頼内容について自分の否定的な判断を述べることは、間接的に依頼の協力に否定的な気持ちを表している。すなわち、依頼内容に対する否定的な見解の表明により、一般的な規則として FTA を述べる（話し手は聞き手の領域を侵害したくないが、周囲の状況によってやむを得ず FTA を行うのだと説明する）というネガティブ・ポライトネスを優先する依頼に対する断りだと考えられる。

それゆえ、本研究は聞き手の邪魔されたくない欲求に反する行為である依頼に対して、日本語母語話者と台湾華語母語話者がいかなるポライトネスを優先・配慮しつつ、「断り」の意志を表明し、相手と円滑な会話を進めていくのかに焦点を当て、考察する。

2. 3 先行研究

2. 3. 1 「断り」に関する研究

1) アメリカ人英語母語話者・日本人英語学習者を対象とした「断り」の研究

第二言語習得研究における発話行為としての「断り」研究は様々な側面から行われてきた。中でも、最も大きな影響を与えたのが、Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990) である。Beebe 他 (1990) は、日本語母語話者、アメリカ人英語母語話者、日本人英語学習者、それぞれ20人を対象に、DCTを用いて、調査を行った。そして、被験者の「断り」を「意味公式 (Semantic Formula)」という単位に分類し、それらを発現順序・発現頻度・内容の三つの観点から分析した。そこで、日本人英語学習者の英語における「断り」をアメリカ人と日本人それぞれの母語による「断り」と比較し、日本人英語学習者が第二言語である英語で断る際、使われている語彙や文型は英語であっても使われる意味公式の種類や頻度及びその順序は日本語母語話者のそれに近いことを見つけ、これをプラグマティック・トランスファー (Pragmatic Transfer: 語用論的転移) の証拠としている。

彼らの調査によると、アメリカ人による断りの意味公式の順序は相手の地位にかかわらず、①積極的な気持ちの表現、②遺憾、③言い訳であり、日本人の英語による断りの意味公式の順序は、地位の高い人に対しては、①謝罪・遺憾、②言い訳であり、地位の低い人に対しては、①積極的な気持ちの表現・共感、②言い訳であった。ここで「言い訳」についての内容から分析すると、アメリカ人が具体的な言い訳をしているのに対し、日本人はかなりあいまいな言い訳をしていることが浮き彫りになった。Beebe 他 (1990) はこのことは、日本の社会的文化規範によるとしている。

Beebe 他 (1990) はまた、断りの場面での謝罪について述べている。彼らの調査によれば、日本人は相手の地位が自分より高い場合に謝罪をし、自分より低い場合には謝罪をしないという傾向があった。一方、アメリカ人にはこの傾向は見られなかったという。

2) 日本語母語話者・日本語学習者を対象とした「断り」の研究

日本語における「断り」という発話行為に関する先行研究として、森山（1990）、生駒・志村（1992）、熊井（1993）、藤森（1994）、ラオハブラナキット（1995）、山口（1996）などがある。そのうち、森山（1990）とラオハブラナキット（1995）は、日本語母語話者の「断り」のストラテジーに限って研究した。他の先行研究は中間言語の語用論的研究の視点から、日本語母語話者と日本語学習者との比較研究である。研究方法としては、調査紙を用いた談話完成テスト（DCT）またはロールプレイ（例えば、熊井 1993）、実際の会話を録音したテープ（例えば、ラオハブラナキット 1995）をデータとして用い、「断り」を意味公式によって分析するというのが一般的である。

「断り」行為としてどのような行動を選択するかは、「断る」に先行する行為、コンテキストと無関係ではない。先行研究の場合は、「誘い」に対する断りを観察した藤森（1994）を除いて、「依頼」あるいは「要請」に対して断るという場面設定である。

生駒・志村（1993）は、上記の Beebe 他（1990）による日本人英語学習者の「断り」に関する研究をアメリカ人日本語学習者に置き換えた場合、Beebe 他（1990）が報告したプラグマティック・トランスファーがアメリカ人日本語学習者が日本語を使う際にも起こるかどうかを調べたものである。彼らは、DCTを用い、日本語母語話者、英語母語話者、及びアメリカ人日本語学習者それぞれ 10 人を対象に、実験を行った。そして、収集したデータを、Beebe 他（1990）が使った分析方法に従い、意味公式の発現順序、発現回数、そして意味公式の内容という三つの観点から分析した結果、意味公式の発現回数や内容にプラグマティック・トランスファーが観察されたが、意味公式の発現順序にはプラグマティック・トランスファーが見られなかったと報告している。

先行研究の分析から、日本語母語話者の「断り」発話行為の特徴をまとめると次のようである。

(1) 「断り」の発話行為に影響を与える要因としては、断りの内容だけでなく、断る側と依頼側との社会的距離、相対的力などの社会的変数も含む。

(2) 「断り」のストラテジーを選択する際には、まず、上下関係が、次に親疎関係が判断基準となる。

(3) 日本人は直接的断りを避ける傾向がある。

(4) 意味公式の使用については、目上に対して「謝罪」及び「謝罪先行型」を多く用い

ている。同等の人には、親疎に関係なく「謝罪先行型」が多い。

(5) 親しい間柄の場合、上下関係によって選択された「断り」のストラテジーに差が見られた。目上には弁明型（嘘型）、同等・目下の人には率直型（嫌型）が多い。

3) 中国語母語話者を対象とした「断り」の研究

中国語母語話者を対象としてデータを集めている研究は、藤森（1994）、山口（1996）、劉・小野（1996）などである。これらの先行研究の分析から、中国語母語話者による「断り」の発話行為において、以下のような傾向があると指摘されている。

(1) 「断り」のストラテジーに影響を与える要因としては、親疎の変数が最も重要である。

(2) 一般的に、親しい依頼者に対しては「弁明先行型」が多く、親しくない依頼者に対しては「謝罪先行型」が多く用いられている。目上の人の依頼に対しては、親疎にかかわらず、「謝罪先行型」が特に多い。

(3) 日本語母語話者と比べて、「結論先行型」が多い。特に親しくない依頼者に対して、「結論先行型」の使用が比較的多い。

(4) 親しい同等の人に対して、完全な「弁明先行型」である。親しくない同等の人に対して、「弁明先行型」より「謝罪先行型」が多い。

また、馬場・禹（1994）は、日本語と中国語の「断り」表現について、依頼内容と親疎関係を考慮しながら、日本人学生と中国人留学生を対象としたアンケート調査に基づいて、「間接的な断り」表現の現れ方を調べた。その結果は以下のようになる。中国人留学生の場合は、親しい関係にある人に対して、主に「願望」「理由」「謝罪」「代案提示」の表現が現れやすくなっているし、相手に共感を示しつつ積極的に働きかけるという熱意を示すことに重点が置かれている。一方、親しくない相手に対して、「理由」「謝罪」の表現が最も多く現れており、次いで「代案提示」も現れやすくなっている。日本人学生のように、言葉遣いに気を配り、丁寧表現を多く用いているような配慮が見られず、比較的気軽に断っている、と述べられている。

4) 台湾における華語を母語とする話者を対象とした「断り」の研究

Liao(1994)、Lee(2005)、Chen(2006)などの第二言語習得における中間言語研究があったが、それらの研究において分析手法として取り入れられたのは、談話完成テスト、インタビューと回想法であり、実際の会話をういた分析からの結果ではなかった。しかも、華語学習者や英語学習者を研究対象とする研究がほとんどであり、現状では、談話研究における研究成果はさほど蓄積されていない上に、より実際のコミュニケーション状況に近い会話データを検証資料としたものは見当たらなかった。

2. 3. 2 「依頼」に関する研究

1) 依頼の定義とその形式について

益岡・田窪(1993)は、「依頼は人に動作をするよう頼む場合のムードであり、相手の意思を尊重する点で命令より丁寧な表現であり」、依頼には直接的にあり手に動作を依頼する「直接依頼形式」と自分の実情を述べて相手に間接的に動作の依頼をする「間接的依頼形式」があると述べている。

それに加えて、馬場・庐(1992)は依頼表現の形式について次のようにまとめている。日本語の直接依頼表現には「～て、～てくれ、～てください」のように「動詞のテ形+『くれる』の命令形」を使うもの、「～てくれるか、～てくれないか、～てもらえませんか、～てもらえるか、～てもらえますか、～てもらえませんか」のように相手に自分の頼みに応じる意思があるかどうかを尋ねるものがある。

間接依頼形式には、「～てもらいたい、～てほしいんだが」のように、相手の動作を自分が望んでいることを知らせるもの、「～てくれると助かる、～てくれるとありがたいんだけど」のように、それが自分にとって有益であることを相手に知らせることで、相手がその動作をしてくれるように仕向けるものがある。

2) 日中対照における依頼表現の先行研究

林 (1982) は「日本語は助詞、助動詞を駆使して依頼表現の丁寧度的手段を構成し得ているが、中国語は孤立語で動詞の活用もなく、敬語に専用の助動詞もないので、言語形式として丁寧度を表す手段は少なく、逆に言えばもっと微妙なことばの全体的つながりやイントネーションによって丁寧度を示さざるを得ない」と指摘している。

李萍 (1998) によると、依頼する口調を和らげるために日本語は「～てください」より「～ていただけますか／ませんか」を用いているが、中国語は副詞や動詞の重ね型形式で、要求する口調を和らげているとしている。

一方、劉敏 (1990) は依頼表現において日本人はよく間接的な表現をとり、中国人は直接的な表現をとる特色があることを仮定し、アンケート調査を通して仮説が成立することを示している。

これらの一連の先行研究では、依頼表現を単なる文法、文構造レベルで扱っており、例として出された表現がそれぞれの談話文脈から切りはなされて提示されているため、「われわれはことばのやりとり（依頼表現）を使ってなにができるか」が明確ではない。したがって、その考察過程の分類の当否についても検証することができない。

2. 3. 3 日本語教育の観点から談話分析を取り上げた研究

最近の研究では、依頼表現を談話の構造から分析しようとする傾向が見られるようになった。

日本語教育の観点から、依頼表現の談話分析を取り上げた研究として、鮫島 (1998) が挙げられる。鮫島は、「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現、文末表現の習得過程—中国語話者の『依頼』『断り』『謝罪』の場合—」で、依頼、依頼に対する断り、謝罪の3項目のコミュニケーションタスクを設定し、予め設定した発話文に対応させて反応文を記述してもらったものを資料に、中国語話者の初級後期、中級前期、中級後期の学習者のとる方略を定型表現と文末表現に焦点をあて、各学習レベルにおける特徴と傾向を調査し、日本語学習の習得過程を観察した。

また、柏崎秀子 (1993) も日本語教育における談話分析の必要性を積極的に認め、話しかけ行動の談話分析を依頼・要求表現の実際を中心に行っている。

以上の先行研究では、日本語学習者が日本語の談話の中で依頼表現をどのように使うかは調査し分析しているが、その母語である中国語の談話については触れていない。そのため、日本語学習者が不適切な表現をする理由について明らかにしていない。

その理由を明らかにするためにはまず、日本語と中国語の談話の展開と構造には、いったいどのような特徴があるかを解明する必要があると思われる。

2. 4 本研究の位置づけと研究課題

これまでの「依頼表現」「断り表現」に関する先行研究は、主に調査紙を用いた談話完成テスト（生駒・志村 1993；藤森 1995 など）やロールプレイ（横山 1993；熊井 1993 など）の方法で調査されており、実際の自然な場面で使われるものにはほとんど焦点を当てていない。しかも、従来の「依頼表現」「断り表現」の研究では、表現や表現の展開を取り上げ、その丁寧度を、依頼または断りに関わる人間関係や依頼内容によって分析し、説明するものが主であった。例えば、依頼側と被依頼側の「上下・親疎」などの人間関係や、相手に掛ける負担の大きいものか小さいものかという依頼内容が、どのように敬語表現の選択や表現の展開に影響を与えるか、という事例が考察されてきた（森山 1990；ラオハブラナキット 1995、1997 など）。現実には、依頼や断りの表現を言うだけではなく、依頼側と被依頼側が、言語・非言語行動によって自分の意図を表明していこうとするその「過程」自体が、目的の達成には必要であろう。また、それと同時に、相手が言語・非言語行動によって自分をどう待遇するかを理解することも、自分の次の行動を展開するために必要になってくるであろう。

そこで本研究では、それぞれ日本語母語話者と台湾華語母語話者による、「依頼」とそれに対する「断り」とを含む実際の会話を資料に、依頼側と被依頼側とのやりとりを相互関係と捉え、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証する。また、そこで明らかになった意図の伝達や対人配慮行動における特徴を取り立てて、会話教育に対人配慮行動という視点を取り入れることの重要性を論じ、さらに、「待遇コミュニケーション」の視点を取り入れた会話指導法を提言することを目的とする。

具体的に述べると、本研究ではまず、(1) 日本語母語話者と台湾華語母語話者による、「依頼」とそれに対する「断り」とを含む実際の会話を資料に、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証する。

そして、(2) 自然な会話資料を用いた検証によって明らかになった意図の伝達や対人配慮行動における特徴という観点から、会話教育に対人配慮行動の視点を取り入れることの重要性を論じ、さらに、(3) 「待遇コミュニケーション」の視点を取り入れた会話指導法を提言する。

以上に述べた本研究の具体的な目的に従って、以下の研究課題を示す。

1. 日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の実際の会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析した際、日本語母語話者と台湾華語母語話者はそれぞれどのように断りをしているか。そして、いかなる点が共通しており、いかなる点が異なるか。
2. 日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の電話会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析した際、日本語母語話者と台湾華語母語話者それぞれの断り行動の展開パターンはどうなっているか。さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているか。
3. 日本語母語話者と台湾華語母語話者による、「依頼」とそれに対する「断り」とを含む実際の会話を資料に、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するか。

第3章 研究方法

3. 1 調査計画

上述のように、「断り」に関するほとんどの研究は、依頼や勧誘に対する一発話の「断り」を分析対象とする DCT やロールプレイによって行われていた。

しかし、実際の会話の中では、依頼や勧誘をされたら「ちょっと無理です」あるいは「用事があるんだ」などの一言で終わらず、より複雑な意味をもつ断りの返答が現れうる。従って、本研究ではこのような実際の会話の中で現れうる言語使用の特徴を明らかにするため、自然会話に近い「断り」を含む会話を収集する。

先行研究において、依頼側との上下関係、親疎関係によって断る側のとる行動が異なり（馬場・禹 1994、ラオハブラナキット 1995, 1997、山口 1997 など）、性別によっても異なる（森山 1990 など）という結果が得られており、また、先行研究には調査協力者の属性が統一されていないという欠点があると劉・小野（1996）が指摘している。そこで、本研究における調査協力者は、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともに大学生の同性の親しい友人同士にする。性別についても、全員女性に設定する。

また、本研究では、依頼に対する「断り」という言語行動において、「相対的力 (P)」がいかに影響を及ぼすかを考察するため、依頼をしてもらう調査協力者 1 人に対して同性の「目上」「同等」「目下」（それぞれ学校の「先輩」「同級生」「後輩」）の相手を設定する。

データの収集は、まず、依頼をしてもらう 26 名（日 13 名、台 13 名）の女性調査協力者を決める。そして、その人に「目上」「同等」「目下」にあたる同性の相手を選んでもらい、それぞれ一回ずつ電話で会話をして録音してもらう。この際、有効データは、依頼をしてもらう調査協力者が相手に電話をかけ、言語調査に協力することを依頼し、その相手が依頼に対して断ったもののみにする。もし依頼が受け入れられた場合、相手を替えてやり直してもらう。合計 78 の電話会話を収集し、それらを分析対象とする。また、本研究の焦点は断る側のとる言語行動にあり、依頼をされる側の被験者には実験内容について前もって知らせていないため、自然に反応できると考えられる。

会話終了後、会話のデータの妥当性と会話分析の結果の信頼性を裏付けるため、二次的

データとして、フォローアップ・アンケート⁶を行う。日本語におけるフォローアップ・アンケート・シートは、依頼側の調査協力者用と被依頼側の調査協力者用の2バージョンに分けて、相手との親しさや録音されていること、与えられた依頼内容についての質問、また、調査協力者の背景に関する質問を設けたものを使う。また、台湾華語母語話者用のフォローアップ・アンケート・シートに関しては、同じ内容を筆者が華語（繁体字）に訳したものを使用する（詳しくは、付録4「フォローアップ・アンケート・シート」を参照）。

3. 2 調査協力者

日本語母語話者 52 名（依頼側の調査協力者 13 名、被依頼側の調査協力者 39 名）、台湾華語母語話者 52 名（依頼側の調査協力者 13 名、被依頼側の調査協力者 39 名）の 104 名の協力を得た。日本語母語話者の調査協力者は日本に在住して、東京都内の大学に在籍している 18-23 歳の大学生、または大学院生⁷で、台湾華語母語話者の調査協力者は台湾に在住して、台北地区の大学に在学している 19-24 歳の大学生または大学院生で、全員女性である。

3. 3 調査手順

調査者が依頼側の調査協力者に、普段気軽に頼めるようなある程度親しい関係をもつ同性友人の中から「先輩」「同級生」「後輩」を、一人ずつ選んで、それぞれの相手に携帯電話から電話をかけて、予め決めた「依頼内容」に従って依頼をしてもらった。

「依頼内容」は、友人に、明日の午前中に自分の代わりに自分の男友達と一緒に国立国語研究所⁸に行って言語調査に関する実験に参加してもらうという設定であったが、その詳細な内容や会話の順序については、依頼側の調査協力者に任せることにした（詳細は、

⁶ 会話収録後、五段階評定法や自由記述形式を用い、調査協力者に、個人の背景的情報や、会話自体に関する感想などについて記入してもらうものである。

⁷ 被依頼側の調査協力者のうち、大学院生は日本語母語話者（1 年生）と台湾華語母語話者（1 年生）がそれぞれ 1 名いた。そのほかの調査協力者は全員大学生である。

⁸ 台湾華語母語話者の場合は、「国立国語研究所」の代わりに、「国立国語研究所」と性質的に似ていて（国が設立した学術的な研究機関である）、都心から少し離れた場所にある「中央研究院」にした。

付録3「調査用インストラクション」を参照のこと)。

依頼側の調査協力者に研究および論文執筆のために会話を録音させてほしいという旨を伝えて、携帯電話による会話内容のすべてをテープレコーダー、またはボイスレコーダーで録音してもらった⁹。

また、調査終了後、研究用分析データとして使うための調査だったことを、被依頼側の調査協力者に告げ、承諾を得た上で、会話参加者双方にフォローアップ・アンケートに記入してもらい、録音をしたことによる話し方への影響などを調べた。

調査を行った期間に関しては、日本語母語話者の場合は2003年7月であり、台湾華語母語話者の場合は2003年8月である。依頼側の調査協力者に静かな場所から、できるだけ相手とゆっくり話せる時間に携帯電話で実験を行ってもらって、日本語と台湾華語両言語の会話各39例を集めた。

3. 4 検証資料の内容

予め決めた依頼内容は「用件レベル・+2」に近いものであり、調査協力者である依頼側と被依頼側の人間関係は「相手レベル・-1~-2」という設定だった。

検証資料の詳細は以下の表39の通りである。

⁹ 携帯電話とテープレコーダー（またはボイスレコーダー）を接続し録音するためのアダプターを通して、話し手・聞き手双方の会話内容を録音できるように工夫をした。

表 1 検証資料

日本語母語話者同士による電話会話 (No. 1-39)					
No.	依頼側-被依頼側	学校での関係	No.	依頼側-被依頼側	学校での関係
1	JB101-J0K01	後輩-先輩	21	JB107-JYK07	先輩-後輩
2	JB101-JSK01	同期	22	JB108-J0K08	後輩-先輩
3	JB101-JYK01	先輩-後輩	23	JB108-J0K13	後輩-先輩
4	JB102-J0K02	後輩-先輩	24	JB108-JSK08	同期
5	JB102-JSK02	同期	25	JB108-JYK08	先輩-後輩
6	JB102-JYK02	先輩-後輩	26	JB109-J0K09	後輩-先輩
7	JB103-J0K03	後輩-先輩	27	JB109-JSK09	同期
8	JB103-JSK03	同期	28	JB109-JYK09	先輩-後輩
9	JB103-JYK03	先輩-後輩	29	JB110-J0K10	後輩-先輩
10	JB104-J0K04	後輩-先輩	30	JB110-JSK10	同期
11	JB104-JSK04	同期	31	JB110-JYK10	先輩-後輩
12	JB104-JYK04	先輩-後輩	32	JB111-J0K11	後輩-先輩
13	JB105-J0K05	後輩-先輩	33	JB111-JSK11	同期
14	JB105-JSK05	同期	34	JB111-JYK11	先輩-後輩
15	JB105-JYK05	先輩-後輩	35	JB112-J0K12	後輩-先輩
16	JB106-J0K06	後輩-先輩	36	JB112-JSK12	同期
17	JB106-JSK06	同期	37	JB112-JYK12	先輩-後輩
18	JB106-JYK06	先輩-後輩	38	JB113-JSK13	同期
19	JB107-J0K07	後輩-先輩	39	JB113-JYK13	先輩-後輩
20	JB107-JSK07	同期			

台湾華語母語話者同士による電話会話 (No. 40-78)					
No.	依頼側-被依頼側	学校での関係	No.	依頼側-被依頼側	学校での関係
40	TBI01-TOK01	後輩-先輩	60	TBI08-TOK08	後輩-先輩
41	TBI01-TSK01	同期	61	TBI08-TSK08	同期
42	TBI01-TYK01	先輩-後輩	62	TBI08-TYK08	先輩-後輩
43	TBI02-TOK02	後輩-先輩	63	TBI09-TOK09	後輩-先輩
44	TBI02-TSK02	同期	64	TBI09-TSK09	同期
45	TBI02-TYK02	先輩-後輩	65	TBI09-TYK09	先輩-後輩
46	TBI03-TOK03	後輩-先輩	66	TBI10-TOK10	後輩-先輩
47	TBI03-TSK03	同期	67	TBI10-TSK10	同期
48	TBI03-TYK03	先輩-後輩	68	TBI10-TYK10	先輩-後輩
49	TBI04-TOK04	後輩-先輩	69	TBI11-TOK11	後輩-先輩
50	TBI04-TSK04	同期	70	TBI11-TSK11	同期
51	TBI04-TYK04	先輩-後輩	71	TBI11-TYK11	先輩-後輩
52	TBI05-TOK05	後輩-先輩	72	TBI12-TOK12	同期
53	TBI05-TSK05	同期	73	TBI12-TSK12	同期
54	TBI05-TYK05	先輩-後輩	74	TBI12-TYK12	先輩-後輩
55	TBI06-TOK06	後輩-先輩	75	TBI13-TSK13	同期
56	TBI06-TSK06	同期	76	TBI13-TYK13	先輩-後輩
57	TBI06-TYK06	先輩-後輩	77	TBI14-TOK14	後輩-先輩
58	TBI07-TOK07	後輩-先輩	78	TBI14-TSK14	同期
59	TBI07-TYK07	先輩-後輩			

第4章 分析方法

録音した計 170 分程度の会話資料を宇佐美 (2003a) の「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従い、電話会話ごとに文字化する。

また、文字化した発話を数量化し、定量的分析ができるように、電話会話から「断り談話」を認定し、「断り談話」の構成要素を分類項目別にコーディング (記号化) する。

コーディングの信頼性は、第一認定者 (筆者) と第二認定者 (セカンド・コーダー) の間の判定の一致率にて判断する。また、コーディングだけでは見逃しやすい発話の特徴は、文字化したデータと二次的データであるフォローアップ・アンケートから確認・検討し、分析結果に用いる。

4. 1 会話の文字化の方法

本研究における文字化の方法は基本的に宇佐美 (2003a) に従い、日本語母語話者同士の会話と台湾華語母語話者同士の会話の一次文字化は筆者によるものであり、台湾華語会話の日本語訳は、台湾出身で日本語を専攻している博士後期課程の大学院生の協力を得たものである。

台湾華語会話の日本語訳に関しては、できるだけ直訳を行ったが、直訳では意味が伝わらない場合、意識を行った。

本研究で使用した具体的な会話の文字化の方法および記号を、以下のようにまとめる。

1) 発話文の定義

BTSJ では、「発話された文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位とする。「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。基本的には、「文」をなしていると捉えられるものを「1 発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1 語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切らない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。また、相づちや笑いでも、それが相手に対する共感や応答などの機能を担っていると考えられるものは 1 発話文として扱う。さらに、途中で相手の発話が入って話者が一旦交替したため改行さ

れ、複数のラインに渡っている発話も、同一話者によって発せられた「文」をなしている
と捉えられるものは、複数のラインにまたがる発話をまとめて「1 発話文」とする。

2) 改行の原則

基本的には、話者が交替するたびに改行する。しかし、話者が交替しなくとも、同一話者が複数の「発話文」を続けて発するときには、「発話文」ごとに改行する。また、相手の発話に重なる短い小声のあいづち(ふーん等)や笑いは、それが相互作用において、相手の話を聞いているということを示す以上の積極的な機能を持たない限り、()に入れて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。

3) 発話文終了に関する記号

1 発話文が終了したところには、その最後に必ず句点「。」をつける。その発話文が叙述なら句点「。」のみをつける。質問、確認等なら、「?」とそれに続けて句点「。」をつけ、「?。」という形にする。また、相互作用において実質的機能を果たしていると判断された笑いのための発話文は、その音声を記し、「〈笑い〉」の後に句点「。」をつけ、1 発話文であることが分かるようにしておく。なお、発話文末が言い淀んでいると判断される場合は、「…」とそれに続けて句点「。」をつけ、「…。」という形にする。

1 発話文の途中で相手の発話が入った場合には、その途中の句末に英語式コンマ2つ「,,」をつけ、その発話文が終わっていないことをマークし、改行して相手の発話を記入する。その相手の発話の後に、改行して後に続く発話を記入し、発話文が終了したところに「。」か「?。」か「…。」をつける。つまり、1 ラインの終わりには、必ず、句点(「。」、「?。」、「…。」の3 パターン)か、英語式コンマ2つ「,,」のどちらかの記号がつくことになる。

4) 記号凡例

BTSJ で用いられる記号を以下にまとめる。但し書きのあるもの以外は、「半角」で統一することを原則とする。

。 [全角] 一つの1 発話文の終わりにつける。

- ,, 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、 [全角] ①一つの1発話文および一つの1ラインの中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ‘ ’ ①複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で‘ ’に入れて示す。
- ②通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’の中に正式な表記をする。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?、」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いる。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- /沈黙 秒数/ 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短い、まったくないことを示すためにつける。これは、二つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
- < >{ } 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発

- 〈 〉{ } 話には、〈 〉の後に、{ }をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、〈 〉の後に、{ }をつける。
- 【 】【 】[全角] 第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【 】【 】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【 】【 】をつけ、第2話者の発話文の冒頭には【 】【 】をつける。
- [] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- 〈 〉 笑いながら発話したものや笑い等は、〈 〉の中に、〈笑いながら〉、〈2人で笑い〉などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。
- (〈 〉) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(〈笑い〉)とする。
- ” ” 発話中に、話者以外の人の発話が直接引用された場合、その引用された部分を” ”でくくる。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、漢字の読み方を説明する部分、本の題名等や、話者自身の発話を引用した場合などは、その部分を『 』でくくる。
- ### 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
- 「 」 トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

上述したもの以外に、本研究では台湾華語の文字化のために以下の記号を設けた。

- ・ [全角]1 発話文および1ライン中で、中国語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ・ [全角]1 発話文および1ライン中で、並列の関係を表す短い語句の間に、短い間を示すため、頓号をつける。
- ！ [全角]発話者の驚きや感嘆などの気持ちを表す場合につける。
- …… 文中、文末に関係なく、音声的に言い淀んだように聞こえるところにつける。

また、本研究では、依頼側と被依頼側の間のやりとりだけではなく、両コミュニケーション主体それぞれの行動展開も見やすくするために、コミュニケーション主体ごとに発話内容を発話時間順に沿って縦に並べて文字化している。以下に一例を示す。

表2 文字化した会話資料の一例（資料26：[JBI09-JOK09]）

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JOK09
	1	もしもし。
もしもし。	2	
	3	<はい>{<}
<「JOK09 名」さん?>{>}。	4	
	5	うん。
んっと「JBI09 姓」ですけど。	6	
	7	はい。
えっとー、明日ちょっとお願いがあつてー。	8	
なんか明日って空いてますか?。	9	
	10	はあー、あ、ちょっとえっと、明日はバイトが、
ああ、はあ、<あ、なんか>{<},,	11	
	12	<入っちゃってるんだよね>{>}。
明日、あの、言語調査の実験に参加する予定だったんだけど、行けなくなったんですよ。	13	
	14	あー。
それで、うん、「JOK09 名」さんなんか、うん、行ってもらえるかなーと思ったんですけど。	15	
うん、<でもバイトだったら>{<}。	16	
	17	<あー、ごめんね>{>}、<明日ねー>{<},,
<ううん>{>}。	18	
	19	そう、午前中バイトが入っててー。

頼発話」までの依頼側の会話展開に関わる項目¹¹や「依頼発話」のうちのどれかが現れた場合、その最初に現れたものを「依頼に関する最初の発話」とする。そして、その「依頼に関する最初の発話」を、『断り談話』のはじめとなる発話」とする。

「断り談話」のおわりとなる発話：

依頼についての話題が終わった直後に、他の話題に転換して話す場合もあり、直接に電話の終了部¹²に入る場合もある。ここでは、依頼についての話題が終わっていれば、「断り談話」も終わっていることとする。つまり、今回の依頼用件と何の関わりもない会話、または電話会話特有の会話のやりとり（例えば「じゃ、またね」「じゃ、失礼します」など）を、「断り談話」から除外することとする。しかし、電話の終わりで再び「依頼」に言及することがあり、これは南（1981）が「回帰」と呼んでいるものであるが、ここでは、その部分も「断り談話」の一部として考察する。

上述したように電話会話から「断り談話」を認定し、さらに、断りが成立するまでの流れと、断りが成立した後の流れを分けて分析するために、ひとつの「断り談話」をふたつの段階に分ける。一つ目は、「最初の依頼に関する発話」が現れたときから、最初の「断りへの了解を示す」発話が発せられたところまでの流れであり、二つ目は、最初の「断りへの了解を示す」発話が現れた直後から、「断り談話」が終わるまでの流れである。そこで、「断り談話」での最初の「断りへの了解を示す」発話の位置を確認する必要がある。以下では、「断りへの了解を示す」発話とは何かを定義しておく。

「断りへの了解を示す」発話：

国立国語研究所（1994）では、「相手が表明した断りの意思を受け入れること」を、「断りへの了解」とする。本研究は、基本的にはこの定義に従い、「断りへの了解を示す」発話を、相手の断りたい意志を認め、もうこれ以上ねばったりせめたりしないことを伝える発

¹¹ 謝（2001）は、「依頼発話」には「依頼」行為の遂行動詞（「貸す」、「借りる」）が伴う使用とそうでない使用があるため、対話者の発話を考慮に入れて「依頼発話」の認定を行っている。また、受信を促すものである「注意喚起」、会話の大まかな目的を伝えるものである「前置き」、「依頼」の続行の見込みや支障の有無を確認するものである「見込みの確認」と、聞き手へかける負担を実質的または心理的に軽減するための使用である「先行する補助使用」の四つを、「依頼発話」までの依頼側の会話展開に関わる項目として挙げている。

¹² 電話の終了部には、「終了先行発話（pre-closing）」（例えば、英語の“Okay”）や、「終了発話（closing）」（例えば、英語の“Bye”）が含まれている（Schegloff and Sacks, 1973）。

話と定義する。すなわち、「断りへの了解を示す」発話が現れたら、断りが成立したことになる。

以下では、実際に、ひとつの電話会話において、「断り談話」のはじめとなる発話（A）、「断り談話」のおわりとなる発話（B）と最初の「断りへの了解を示す」発話（C）の三つがどのように認定し、コーディングされているかについて、例を示す。

表2. 「断り談話」の認定に関わるコーディングの1例

依頼側 JBI09	発話 番号	被依頼側 JOK09
	1	もしもし。
もしもし。	2	
	3	<はい>{<}
<「JOK09 名」さん?>{>}。	4	
	5	うん。
んっと「JBI09 姓」ですけど。	6	
	7	はい。
えっとー、明日ちょっとお願いがあつてー。 (A)	8	
なんか明日って空いてますか?。	9	
	10	はあー、あ、ちょっとえっと、明日はバイトが、
ああ、はあ、<あ、なんか>{<},,	11	
	12	<入っちゃってるんだよね>{>}。
明日、あの、言語調査の実験に参加する予定だったんだけど、行けなくなったんですよ。	13	
	14	あー。
それで、うん、「JOK09 名」さんなんか、うん、行ってもらえるかなーと思ったんですけど。	15	
うん、<でもバイトだったら>{<}。(C)	16	
	17	<あー、ごめんね>{>}、<明日ねー>{<},,
<ううん>{>}。	18	
	19	そう、午前中バイトが入っててー。
あんー、うん、じゃ,,	20	
	21	<なんですよ>{<}。
<うん、また>{>}ほかの人に聞いてみます。	22	
	23	あ、<はい>{<}。(B)
<うん>{>}、じゃまた<夏パで>{<}。[“夏パ”は某語科の夏パーティーのこと]	24	
	25	<おつかれ>{>}…。

/少し間/あ、〈あパーティーで〉{<}〈笑う〉。	26	
	27	〈はい〉{>}〈笑う〉。
	28	29日にね〈笑いながら〉。
うん、29日に。	29	
	30	了解<です、はい>{<}。
〈うん、うん、>{>}じゃわかりました、うん。	31	
	32	あ、はい。
はい。	33	
	34	はい、じゃまた。
あ、うん、〈はい〉{<}。	35	
	36	〈はい〉{>}。

上の例文は、一つの完結した日本語における電話会話例である。発話番号8は、電話のはじめの挨拶に次いで最初に現れた依頼に関する発話であることから、ここの「断り談話」のはじめとなる発話（便宜上、「(A)」と略して記す）にあたる。また、JOK09の断りへの事情説明（発話番号10と12）に対してJBI09は「うん、〈でもバイトだったら〉{<}。（発話文番号16）」と「断りへの了解を示す」発話（「(C)」と記す）をしている。発話番号24以降はパーティーの話題に移り、その後は電話の終わりの挨拶に入るため、発話番号24からの発話は依頼とは関係のないやりとりと判断し、発話番号23をこの「断り談話」の終わりとなる発話（「(B)」と記す）とし、この会話での「断り談話」は、発話番号8から発話番号23までのやりとりと認定する。

以上のように、本研究で収集した78の電話会話に対して、各会話の中で「断り談話」のはじめとなる発話（「(A)」）、最初の「断りへの了解を示す」発話（「(C)」）、「断り談話」の終わりとなる発話（「(B)」）の三つに該当するものを見つけ出し、コーディングを行った。

本研究で用いる「断り談話」とは、「電話会話において最初の依頼に関する発話から、依頼についての話題が終わるまでのやりとり」を言う。以下の例を示し、各「断り談話」に現れている「断り」のストラテジーの数え方を述べる。

表3 「断り」のストラテジーの数え方の一例

依頼側 JBI13	発話番号	被依頼側 JYK13
	1	もしもし。
あ、もしもし。	2	
ごめんね、(はい) 今大丈夫?。	3	
	4	はい。
うん。	5	
あのね、全然「サークル名」と関係なくてね。	6	
	7	あ、はい。
あの一、明日の午前中にね、(はい) あの一、国立国語研究所に行って言語調査に関する実験に参加できる人を探してるんだけど、	8	
	9	あ、<はい><。>
<明日><{}>って無理かな?。	10	
	11	ああ、明日ちょっと、午前中<授業なんですよ><。> (3)
<あ、うん、><{}>そっかー。	12	
	13	はい、<すいません><。> (5)
<じゃ、いやいや><{}>。	14	
うん、<ありがとう><{}>。	15	
	16	<はい><{}>。
うん、<ごめんね><{}>。	17	
	18	<はい、じゃ><{}>また明日。
はい、失礼します。	19	
	20	失礼します。

格式化: 字型: (英文)MS Mincho, (中文) MS Mincho, (中文) 日文

上の例から見ると、この会話での「断り談話」は発話番号6から17までである。また、「断り」のストラテジーの数は、依頼に対して、被依頼側が反応した、本研究で提示した各「断り」のストラテジーに該当する言語表現を数える。この談話で見られた「断り」のストラテジーは、JBI13に依頼されたあとに発した発話番号11の「事情説明」と、JBI13が断る旨を了解してくれたあとの発話番号12の「謝罪」の二つのみである。

このような数え方に基づいて、日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の全78の電話会話にある「断り談話」を分析した結果、電話会話の総発話文数、そのうちの「断り談話」の総発話文数、「断り談話」の構成要素の全体の数は以下のようなものである。

表4 電話会話の総発話数、「断り談話」の総発話数と「断り」のストラテジーの総数

データ	電話会話の 総発話数	「断り談話」の 総発話数	「断り」ストラテジー の総数
日本語 39 会話	2081	1496	159
台湾華語 39 会話	2266	1736	172

次に、一つの会話における発話数、その中の「断り談話」の発話数及び、「断り」のストラテジーの数を表10に示す。

表5 一つの会話における発話数、「断り談話」の発話数と「断り」のストラテジーの総数の平均

データ	発話数	「断り談話」の 発話数	「断り」ストラテジー の数
日本語 1 会話	53	38	4
台湾華語 1 会話	58	45	4

文字化した一会話の発話平均数は、日本語会話は53発話で、台湾華語会話は58発話であり、そのうちの「断り談話」の発話平均数は、日本語会話は38発話で、台湾華語会話は45発話であり、台湾華語会話の方に発話の数が若干多く現れた。日本語会話と台湾華語会話における一番短い「断り談話」は9発話であり、一番長いのは168発話である。また、一会話あたりの「断り」のストラテジーの使用数は、日本語会話と台湾華語会話ともに四つである。

表11に、日本語会話と台湾華語会話における、『断り談話』のはじめとなる発話」から最初の「断りへの了解を示す発話」までのいわゆる「断り目的達成までの段階」と、「断りへの了解を示す発話」から『断り談話』のおわりとなる発話」までの「断り目的達成後の段階」の二つの段階に現れた一会話あたりの「断り」のストラテジーの数を示す。

表6 一つの会話における、「断り目的達成までの段階」と「断り目的達成後の段階」に現れた「断り」のストラテジーの数

データ	断り目的達成までの段階	断り目的達成後の段階
日本語 1 会話	2	2
台湾華語 1 会話	3	1

一つの「断り談話」における、上述の二つの段階に現れた「断り」のストラテジーの使用数は、「断り目的達成までの段階」では、日本語会話には二つ、台湾華語会話には三つであり、「断り目的達成後の段階」では、日本語会話には二つ、台湾華語会話には一つである。一つの「断り談話」において日本語会話と台湾華語会話ともに四つの「断り」のストラテジーが使われているが、台湾華語母語話者は「断り目的達成までの段階」においてより多くの「断り」のストラテジーを使う傾向があることがうかがえる。

4. 2. 2 分析項目の定義

「依頼」に対する「断り」：依頼を受けたあとから、その話題が終わるまでの、断る側がとる一連の言語行動を指す。これは、「断り」を達成するために用いるストラテジーだけではなく、依頼側との人間関係を維持するためにとる様々な言語行動も含むことを意味する。

「断り談話」：電話会話の、「最初の依頼に関する発話」から、依頼についての話題が終わるまでのやりとりを、一つの「断り談話」とする。また、以下の三つは「断り談話」の認定に関わるものである。

「断り談話」のはじめとなる発話：依頼側が発した依頼に関する最初の発話。

「断り談話」のおわりとなる発話：依頼と関係のない発話が現れる直前の発話。

「断りへの了解を示す」発話：依頼側が最初に発した、相手の断りたい意志を認め、もうこれ以上ねばったりせめたりしないことを伝える発話。

「断りへの了解を示す」発話を境目とし、「断り談話」のはじめとなる発話からここまでのやりとりと、ここから「断り談話」のおわりとなる発話までのやりとりというふうに、「断り談話」を「断り目的達成まで」と「断り目的達成後」の二つの段階に分ける。

また、ここでは、「断り目的達成」を以下のように定義する。

本研究でいう「断り目的達成」とは、依頼側が被依頼側の断りたい意思を認め、もうこれ以上依頼を継続しないことを指す。すなわち依頼側の「断りへの了解を示す発話」が現れたら、その会話において断りの目的が達成されたこととする。

「断り」のストラテジー：「断り談話」を構成する主な要素。「断り談話」において断る側がとる具体的な待遇ストラテジー。

以下に4. 1「会話の文字化の方法」と4. 2「会話の分析方法」に従って完成したトランスクリプトの一例を示す。

表7 トランスクリプト例

依頼側 JBI13	発話 番号	被依頼側 JYK13
	1	もしもし。
あ、もしもし。	2	
ごめんね、（はい）今大丈夫？。	3	
	4	はい。
うん。	5	
あのね、全然「サークル名」と関係なくてね。	6	
	7	あ、はい。
あの一、明日の午前中にね、（はい）あの一、国立国語研究所に行って言語調査に関する実験に参加できる人を探してるんだけど、	8	
	9	あ、〈はい〉〈〉。
〈明日〉〈〉って無理かな？。	10	
	11	ああ、明日ちょっと、午前中〈授業なんですよ〉〈〉。
〈あ、うん、〉〈〉そっかー。	12	
	13	はい、〈すいません〉〈〉。
〈じゃ、いやいや〉〈〉。	14	
うん、〈ありがとう〉〈〉。	15	
	16	〈はい〉〈〉。
うん、〈ごめんね〉〈〉。	17	
	18	〈はい、じゃ〉〈〉また明日。
はい、失礼します。	19	
	20	失礼します。

また、以下に話者を表す記号の説明をしておく。

J B I : 日本語母語話者、依頼側

J O K : 日本語母語話者、J B I の学校の先輩、被依頼側

J S K : 日本語母語話者、J B I の学校の同級生、被依頼側

J Y K : 日本語母語話者、J B I の学校の後輩、被依頼側

T B I : 台湾華語母語話者、依頼側

T O K : 台湾華語母語話者、T B I の学校の先輩、被依頼側

T S K : 台湾華語母語話者、T B I の学校の同級生、被依頼側

T Y K : 台湾華語母語話者、T B I の学校の後輩、被依頼側

本研究では、「断り談話」における「被依頼側」の言語行動を主な分析対象とする。上述した方法で認定した各「断り談話」に対して、さらに本研究で提示した「断り」のストラテジーに該当するものをコーディングしていく。本研究では、「断り」のストラテジーについて、大まかに「単独的」なもの「複合的」なものに分けて、合計11の具体的なストラテジーを設けた(表3を参照)。以下では各ストラテジーについての定義と実例を提示する。また、提示した例文の中の下線部がそれぞれの項目にあたるものである。

表8 「断り」のストラテジー

単独的	項目名	定義
: 被依頼側の、話者 交替するまでの一 度の発話のうち、右 記のストラテジー が一つのみ含まれ ている場合	(1) 回避	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に伝える ことを避けるために「言葉を濁し」たり「冗談を 言っ」たりして断ること
	(2) 直接的な断り	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に表現す ること
	(3) 事情説明	相手の依頼に応じられない具体的な事情について 述べること

	(4)代案提示	相手の依頼を断る代わりに、または相手の依頼を断った後に、問題になっている事柄について自分なりの解決策を提示すること
	(5)謝罪や残念な気持ちの表明	相手の依頼を断ることに対して詫びること、または自分が協力できないことに対して残念な意を伝えること
	(6)否定的な見解の表明	問題になっている事柄（ここでは、依頼内容）について否定的な判断や意見を述べること
	(7)条件提示	今の条件のままだと協力できないが、自分が提示した条件に替えてくれれば承知する可能性があることを伝えること

複合的	項目名
: 被依頼側の、話者 交替するまでの一 度の発話のうち、二 つ以上の単独的ス トラテジーが含ま れている場合	謝罪＋事情説明 (または、事情説明＋謝罪)
	謝罪＋直接的な断り (または、直接的な断り＋謝罪)
	事情説明＋直接的な断り (または、直接的な断り＋事情説明)
	その他の組み合わせ

単独的

1) 回避

相手からの依頼に対して断りの意向を直接的に伝えることを避けるために使うストラテジーである。その機能から「言葉を濁す」(例1、例2)と「冗談を言う」(例3)を「回避」のカテゴリーに分類した。

例1 回避―「言葉を濁す」(【資料29】発話番号29)

依頼側 JBI10	発話番号	被依頼側 JOK10
それにもしよかったら代わりに行って きてもらえないかなと思ったんだけど。	25	
	26	あ————、そっかー。
うん…。	27	
	28	え、どこでやるの?。
	29	<u>＝うん[↑]、でもちょっと微妙かも。</u>

例2 回避―「言葉を濁す」(【資料57】発話番号63)

依頼側 TBI06	発話番号	被依頼側 TYK06
嗯，嗯，那那那那你覺得你可以嗎?。 『うーん、うーん、じゃじゃじゃじゃ、行け ると思う?。』	61	
	62	嗯… <笑>。[以傻笑來拖延時間的感覺] 『うん…<笑い>。[ばか笑いで時間を延ばして いる感じ]』
	63	<u>不知道耶<邊說邊笑>。</u> 『わからなーい<笑いながら>。』

例3 回避―「冗談を言う」(【資料27】発話番号50)

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JSK09
「JSK09 姓」さん (えっ) どうでしょう< 笑う>。	49	
	50	<u><笑う>「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」さ ん眠いです<JBI09 がずっと笑っている。の ち、2人で笑う>。</u>

2) 直接的な断り

相手からの依頼に対して断りの意向を直接に表現するものであり、「協力に否定的な気持ちの表明」(例4、例5)と「不可能/困難であることの表明」(例6、例7)の2種類が含まれている。

例 8 事情説明（【資料 3 5】発話番号 2 3）

依頼側 JBI12	発話番号	被依頼側 JOK12
	21	明日？。
はい、明日の朝 9 時からで。	22	
	23	<u>明日ね、バイトなんだ。</u>

例 9 事情説明（【資料 7 5】発話番号 1 3）

依頼側 TBI13	発話番号	被依頼側 TSK13
<p>所以一定要就是要找，就是說一定要找人幫我去，中研院那邊說，已經約好了所以不能不去。</p> <p>『だから探さなきゃだめなの、つまり誰かを探して私の代わりに行ってもらわないと、中研院の方は、もう約束したから行かなきゃだめだって。』</p>	12	
	13	<p><u>嗯…，可是我媽媽早上要健康檢查，我早上要顧店耶。</u></p> <p>『うん…、でもうちのお母さんは朝健康診断があつて、朝私が店番をやらないといけないの。』</p>

4) 代案提示

依頼を断る代わりに、あるいは依頼を断った後に、問題になっている事柄について自分なりの解決策を相手に提示すること（例 1 0、例 1 1）。

例 1 0 代案提示（【資料 1】発話番号 4 6）

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JOK01
	44	あつ、なんかさ、
うん。	45	
	46	<u>あの、「語科名」科のメーリングリストに回そうか？。[語尾は消え入りそうな声で]</u>
うわー、いいね。	47	

例 1 1 代案提示（【資料 6 3】発話番号 1 5）

依頼側 TBI09	発話番号	被依頼側 TOK09
<p>你明天早上不行喔。</p> <p>『明日の朝だめなのか。』</p>	14	

	15	還是，我幫你問看看，你要怎樣的，只要是女生就可以嗎？。 『それとも、私が代わりに聞いてみようか、どんな人が必要なの？女の子だったら大丈夫なの？。』
--	----	--

5) 謝罪や残念な気持ちの表明

相手からの依頼を断ることに対して詫びること、あるいは自分が協力できないことに対して残念な意を伝えることである（例 1 2、例 1 3）。

例 1 2 謝罪や残念な気持ちの表明（【資料 2】発話番号 3 9）

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JSK01
じゃ試験がんばって<>{<}>。	38	
	39	<すみません、あの、>{<}>お役に立てなくて。

例 1 3 謝罪や残念な気持ちの表明（【資料 4 8】発話番号 1 8）

依頼側 TBI03	発話番号	被依頼側 TYK03
OK, 好那我再找別人好了, <沒關係>{<}>。 『オッケー、いいよ、じゃまた他の人を探してみよう、<大丈夫>{<}>。』	17	
	18	<好, 不好意思>{<}>。 『<ええ、ごめんなさい>{<}>。』

6) 否定的な見解の表明

依頼の内容について否定的な判断や意見を述べること（例 1 4、例 1 5）。

例 1 4 否定的な見解の表明（【資料 7】発話番号 1 4 2）

依頼側 JBI03	発話番号	被依頼側 JOK03
なんかお礼ができないっていう…。	140	
	141	あ、いやいや別に（んー）、それは。
	142	3 時間まずちょっときつい、きついかなー。

例 15 否定的な見解の表明（【資料 53】発話番号 15）

依頼側 TBI05	発話番号	被依頼側 TSK05
	13	中研院在那兒啊?。 【中研院はどこなの?。】
eil, 在那個什麼, 南港區, 捷運, 就是。 【えーと、あの何だっけ、南港区、捷運（電車）、つまり。】	14	
	15	<u>好遠喔。</u> 【遠いよ。】

7) 条件提示

今の条件のままだと協力できないが、自分が提示した条件に替えてくれれば承知する可能性があることを提示すること。具体的な条件提示（例 16）も、将来や過去になら承知したという旨を表明するもの（例 17）もこのストラテジーに含まれている。

例 16 条件提示（【資料 17】発話番号 59、61）

依頼側 JBI06	発話番号	被依頼側 JSK06
	59	<u>もし、（うん）ほかにあたってみて、（うん）全然だめそうだったら、（うん）うん、私も考えてみるんだけど。</u>
あ、うん。	60	
	61	<u>でもさ、先に言語系の子で聞いてみてもらっても平気かな?。</u>
うん、わかった。	62	

例 17 条件提示（【資料 71】発話番号 46）

依頼側 TBI11	発話番号	被依頼側 TYK11
	44	ha2(“什麼”的意思), 早上的話我要上家教耶。 【なに?、朝だとプライベートレッスンがあるんだけど。】
ha2, 你早上要上家教是不是?。 【あ、そう?、朝プライベートレッスンなの?。】	45	
	46	<u>嗯, 我可能只有下午可以幫你。</u> 【うん、午後しか手伝えないかも。】

複合的

被依頼側の、話者交替するまでの一度の発話のうち、二つ以上の単独的ストラテジーが現われているもの。

8) 「謝罪＋事情説明」(または「事情説明＋謝罪」)

例 1 8 「謝罪＋事情説明」(【資料 8】発話番号 1 7)

依頼側 JBI03	発話番号	被依頼側 JSK03
「教官姓」ゼミの関係でね、(うん) 明日ね、国立国語研究所に行く、行くはずだったんだけど、(うん) それにね、急に行けなくなっちゃってね、(うん) それでね、もし明日、の午前中に時間があったら、行っていただけませんかという…。	16	
	17	<u>あ、ごめん、明日授業。</u>
あ、そっかー。	18	

例 1 9 「謝罪＋事情説明」(【資料 7 3】発話番号 3 3)

依頼側 TBI12	発話番号	被依頼側 TSK12
<它是>{>} 早上九點、而且不能遲到那種。【<それは>{>} 朝 9 時、しかも遅刻しちゃダメなの。】	31	
	32	/停頓 1.5 秒/那我看我可能還是不要去好了。 【/沈黙 1.5 秒/じゃ、私はやっぱりたぶん行かないほうがいい。】
	33	<u>歹勢(“不好意思”的台語)，我<怕我明天起不來>{<}。</u> 【すまない(台湾語で)、私は<明日起きられないじゃないか心配するから>{<}。】

9) 「謝罪＋直接的な断り」(または「直接的な断り＋謝罪」)

例 2 0 「謝罪＋直接的な断り」（【資料 7】発話番号 1 4 6）

依頼側 JBI03	発話番号	被依頼側 JOK03
	145	9 時じゃね、ちょっ（うんー）なんか、うん。
	146	<u>/沈黙 7 秒/うんー、ごめん、ちょっとく無理かも>{<}。</u>

1 0）「事情説明＋直接的な断り」（または「直接的な断り＋事情説明」）

例 2 1 「事情説明＋直接的な断り」（【資料 2 7】発話番号 5 9）

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JSK09
	57	明日ね、あの一、マックを買いに行くんです。
<笑いながら>マック？。	58	
	59	<u>明日パソコンを買いに<行くので、無理>{<}。</u>
<あ、あ、そうなん>{>}、パスコ、パソコン。[↑]	60	
	61	そう。

例 2 2 「事情説明＋直接的な断り」（【資料 7 8】発話番号 1 8）

依頼側 TBI14	発話番号	被依頼側 TSK14
是早上 9 點開始，然後有 3 個小時，可是沒有沒有錢。 『朝 9 時から、それから 3 時間かかって、でも出ない、お金は出ない。』	17	
	18	<u>可是我明天有事情，可能不行耶。</u> 『でも私は明日用事があってたぶんだめなのよ。』

1 1）その他の組み合わせ（例えば、「事情説明＋回避」など）

例 2 3 「事情説明+回避」(【資料 1】発話番号 18、21)

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JOK01
ちょっと急ですね。	18	
	18	<u>うん…、九時は多分遅刻するから、</u>
うん。	20	
	21	<u><微妙…>{<}<}</u> 。

例 2 4 「否定的な見解の表明+直接的な断り」(【資料 4 0】発話番号)

依頼側 TBI01	発話番号	被依頼側 TOK01
哪會很遠，在南港區耶，這麼近。 【遠くないよ、南港区でしょう[↑]、近いのに。】	52	
	53	<u>而且我還要坐捷運去那麼麻煩，我不想。</u> 【しかも電車で行かなきゃならないし、そんな面倒くさいことはしたくない。】

4. 2. 3 分析の信頼性

以上のようなコーディング項目に基づいた会話の分析、発話の分類の信頼性を確認するために、第二認定者を立てることとする。第二認定者は、日本語、台湾華語に対して、それぞれ東京共通語を使用する日本語母語話者、「普通話」¹³を使用する台湾華語母語話者にその条件を制限する。文字化したすべての会話資料の 8 分の 1 (12.5%) を、筆者と第二認定者がそれぞれ個別にコーディングを行い、その判断の一致率をCohen's Kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を用いて確認する。Cohen's Kappaは、単純一致率から起こりうる偶然の一致を差し引いて計算したものであり、Kappa=1 は 100%一致していることを示す数値である。また、発話文の分割のような機械的な作業の要素が強い分類では、Kappa=0.85 以上が一応の合格基準とされているが、コーディングのような調査者の判断による性質が強いものでは 0.7 以上であれば、その分析は一応の信頼性のあるものと判断される。以下では、本研究の「断り談話」の認定及び「断り」のストラテジーのコーディングに関する、筆者と第二認定者との一致率の結果¹⁴を示す。

¹³ 「普通話」は、中国語の共通語であり、その使用地域は、中国国内に留まらず、シンガポールなどにおいても使用されている。ただし、「普通話」は、台湾では「国語」、シンガポールなどでは「華語」と呼ばれている (張 1990)。

¹⁴ Cohen's Kappa 値の計算は、上越教育大学の高木條治氏のホームページ (<http://www.kokemusu.kokugo.juen.ac.jp>) で行ったものである。

表 9 日本語会話における「断り談話」の認定に関する一致率

	A	B	C	D	SUM
A	4	0	0	0	4
B	0	3	0	1	4
C	0	0	4	0	4
D	0	1	0	255	256
SUM	4	4	4	256	268

※A：「断り談話」のはじめとなる発話、B：「断り談話」のおわりとなる発話、
C：最初の「断りへの了解を示す」発話、D：上記以外のもの（以下同様）

$$\text{Kappa} = (\text{Po} - \text{Pc}) / (1 - \text{Pc}) = 0.914$$

Po（実際に観察された比率）：0.993

Pc（偶然による比率）：0.913

表 10 台湾華語会話における「断り談話」の認定に関する一致率

	A	B	C	D	SUM
A	5	0	0	0	5
B	0	3	0	2	5
C	0	0	4	1	5
D	0	2	1	342	345
SUM	5	5	5	345	360

Kappa：0.794

Po：0.983

Pc：0.919

表 1 1 日本語会話における「断り」のストラテジーに関する一致率

	【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	【8】	【9】	【10】	【11】	【12】	SUM
【1】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【2】	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
【3】	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
【4】	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
【5】	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	10
【6】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【7】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【8】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【9】	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
【10】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【11】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
【12】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	99	99
SUM	0	6	5	2	10	0	0	0	1	0	1	99	124

※ 【1】：回避、【2】：直接的な断り、【3】：事情説明、【4】：代案提示、【5】：謝罪・残念な気持ちの表明、
【6】：否定的な見解の表明、【7】：条件提示、【8】：謝罪＋事情説明、【9】：謝罪＋直接的な断り、
【10】：事情説明＋直接的な断り、【11】：その他の組み合わせ、【12】：上記以外のもの

Kappa : 1

Po: 1

Pc: 0.648

表 1 2 台湾華語会話における「断り」のストラテジーに関する一致率

	【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	【8】	【9】	【10】	【11】	【12】	SUM
【1】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【2】	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
【3】	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
【4】	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	2	7
【5】	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
【6】	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6
【7】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
【8】	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
【9】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【10】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【11】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
【12】	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	140	142
SUM	0	1	8	5	4	7	0	1	0	0	1	145	172

※ 【1】：回避、【2】：直接的な断り、【3】：事情説明、【4】：代案提示、【5】：謝罪・残念な気持ちの表明、

【6】：否定的な見解の表明、【7】：条件提示、【8】：謝罪＋事情説明、【9】：謝罪＋直接的な断り、

【10】：事情説明＋直接的な断り、【11】：その他の組み合わせ、【12】：上記以外のもの

Kappa : 0.864

Po: 0.959

Pc: 0.701

以上の結果から、本研究での両言語における「断り談話」の認定及び「断り」のストラ
テジーのコーディングに関しては、信頼性を保っていることがわかる。

第5章 「断りのストラテジー」の観点からの分析結果と考察

この章では、一定の基準によって選ばれた調査協力者104名（日本語母語話者と台湾華語母語話者それぞれ52名ずつ）の3通り（目上・同等・目下との会話）の日本語と台湾華語の計78の会話を録音し、それらを文字化した会話資料に基づき、日本語母語話者と台湾華語母語話者の「断り」の言語行動の特徴を考察する。分析の際に、まず、「断り談話」における被依頼側の言語行動を、4.2.2「分析項目の定義」に提示した各「断り」のストラテジーの「出現順序」・「使用頻度」・「具体的な内容」の三つの観点から分析する。この際、分析は主に、使われている「断り」のストラテジー（順序・頻度・内容）と話者同士の「力関係」（ここでは学校の先輩・同級生・後輩）という二つの軸で行われる。次に、「断り」のストラテジーが人間関係を維持するためのストラテジーとしての「待遇表現」といかに関わっているのかについて考察する。

はじめに、日本語母語話者と台湾華語母語話者の調査協力者ともに、フォローアップ・アンケートで相手との親しさについて非常に親しい、かなり親しい、まあまあ親しいのいずれかと答えていること、被依頼側はこの会話での相手の話し方について、いつも相手に対応するときの話し方と比べて自然に話していた、または特に不自然ではなかったと書いていることからデータの妥当性が保たれていると判断する。

5.1 断りのストラテジーの「出現順序」について

構成要素の出現順序に関しては、まず、各「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」と「最後に用いられる断りのストラテジー」の観点から分析を行い、次に、「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」に分けて、日本語会話と台湾華語会話における構成要素の出現順序に関する特徴を探る。

5.1.1 日本語母語話者調査協力者の場合

まず、日本語会話の「断り談話」において、表8で挙げられている11の「断り」のストラテジーのうち、どれが最初に現れるかに注目する。表12に日本語の全39の「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合を示す。

表 1 3 日本語の全 3 9 の「断り談話」における
「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	頻度	割合 (%)
回避	3	7.7
直接的な断り	5	12.8
事情説明	18	46.2
謝罪	1	2.6
否定的な見解の表明	3	7.7
謝罪＋事情説明	8	20.5
謝罪＋直接的な断り	1	2.6
合計	39	100.0

表 1 3 に示すように、日本語の「断り談話」において「最初に用いられる断りのストラテジー」は、「事情説明」が 4 6. 2 % で一番多く現れており、その次は 2 0. 5 % の「謝罪＋事情説明」と 1 2. 8 % の「直接的な断り」である。そして、数はそれほど多くないが、「回避」、「否定的な見解の表明」先行型は 3 例ずつ、「謝罪」と「謝罪＋直接的な断り」先行型は 1 例ずつ見られた。以下には、各タイプに該当する談話例を提示する。

例 2 5 「事情説明」先行型（【資料 3 5】発話番号 2 3）

依頼側 JBI12	発話番号	被依頼側 JOK12
で今代わりを探してるんですね、いっしょ、あの、実験に行ってくれる。	20	
	21	明日？。
はい、明日の朝 9 時からで。	22	
	23	<u>明日ね、バイトなんだ。</u>
あ、そうですか。	24	
	25	<うん><{}>。
<わかり><{}>ました。	26	

例 2 6 「謝罪＋事情説明」先行型（【資料 2 8】発話番号 5 5、5 6）

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JYK09
それで、なんか「JYK09 あだ名」とか興味あるかなと思ったんだけどね>{<}。	54	
	55	<u><あ、>{<}先輩ごめんなさい=。</u>
	56	<u>=明日の午前中<バイトなんですよ>{<}。</u>
<あつ、うん——>{<}。	57	
そうね、忙しいよね、ごめんね<笑い>。	58	
	59	いえいえ、<全然>{<}。

例 2 7 「直接的な断り」先行型（【資料 1 1】発話番号 1 8）

依頼側 JBI04	発話番号	被依頼側 JSK04
「JSK04 名」空いてないかなと思って。	17	
	18	<u>空いてはいるけど行きたくない<笑う>。</u>
<2 人で笑う>行ってよー<笑いながら>。	19	
行ってくれよー<笑いながら>。	20	
行ってくれないとさ<笑いながら>。	21	
	22	25 日でしょ?。
うん、金曜日。	23	
	24	あー、行きたくない<笑う>。
	25	パスポートとらせてくれ。
あ、ば、ば、パスポートを取りに行くの?。	26	
	27	うん。

例 2 8 「回避」先行型（【資料 2 5】発話番号 1 0）

依頼側 JBI08	発話番号	被依頼側 JYK08
「JYK08 あだ名」明日暇?。	7	
	8	明日ですか?。
うん。	9	
	10	<u>うんー、ちょっと微妙です。</u>
あ、微妙?。	11	
	12	はい。
午前中も空いてない?。	13	
	14	はい。
あ、そっか…。	15	

例２９ 「否定的な見解の表明」先行型（【資料３】発話番号１３）

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JYK01
〈笑い〉でもね、埼玉でね、電車賃が出なくて、９時から３時間で、しかも私のね、友達と一緒になの。	11	
急だよ。	12	
	13	<u>急ですく笑い。</u>
〈笑い〉。	14	
	15	急というよりは、
〈ちょっと無理?〉{〈〉}。	16	
	17	〈急というよりは〉{〉},,
よりは。	18	
	19	次の日の主専が危険なので。
あ、ちょっと無理ですか?。	20	
	21	やばい状況です、はい。

例３０ 「謝罪」先行型（【資料４】発話番号２３）

依頼側 JBI02	発話番号	被依頼側 JOK02
いろんな人にこうずっと今電話かけてたんですけど、（うん）どうしても行く人が見つからなくて、ついには先輩にまで、	16	
	17	〈笑い〉。
電話かける、かけてしまってるんですけど。	18	
	19	あー、そっか。
はい。	20	
	21	あ、〈うーん〉{〈〉}。
〈うーん〉{〉}。	22	
	23	<u>うん……、なんかほんとにごめんね。</u>
はい。	24	
	25	うん〈笑い〉。[すまないと思っているような感じ]
あ、はい、そんな、はい。	26	

例 3 1 「謝罪＋直接的な断り」先行型（【資料 3 7】発話番号 2 1、2 3、2 4）

依頼側 JBI12	発話番号	被依頼側 JYK12
明日朝 9 時から 3 時間くらい実験とかできそう？。	20	
	21	<u>あ、ちょっと…。</u>
きつい？。	22	
	23	<u>無理ですね…。</u>
	24	<u>ごめんなさい。</u>
ううん、いいよ、全然。	25	

さらに、話者同士の「相対的力 (P)」(相手は、それぞれ学校の先輩、同級生、後輩の場合) による日本語における「最初に用いられる断りのストラテジー」を分類してみる。その結果を以下の表 1 3 にまとめる。

表 1 4 日本語における相手との「相対的力」関係別による「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	JOK		JSK		JYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	1	7.7	1	7.7	1	7.7
直接的な断り	1	7.7	4	30.8	0	0.0
事情説明	8	61.5	4	30.8	6	46.2
謝罪	1	7.7	0	0.0	0	0.0
否定的な見解の表明	1	7.7	1	7.7	1	7.7
謝罪＋事情説明	1	7.7	3	23.1	4	30.8
謝罪＋直接的な断り	0	0.0	0	0.0	1	7.7
合計	13	100.0	13	100.0	13	100.0

※JOK：依頼側の先輩である被依頼側の日本語母語話者調査協力者；JSK：依頼側の同級生である被依頼側の日本語母語話者調査協力者；JYK：依頼側の後輩である被依頼側の日本語母語話者調査協力者
(以下同様)

表 1 4 に示すように、断る際に最初に使うストラテジーに関しては、三つのグループともに、「事情説明」が一番多く使われていることがわかった。後輩からの依頼を断る場合は、

「事情説明」は半分を超え、他のストラテジーよりかなり高い割合を占めている。同級生からの依頼を断る場合は、13談話のうち、「最初に用いられる断りのストラテジー」として「事情説明」が3分の1程度に使われているが、「直接的な断り」と「謝罪＋事情説明」のストラテジーを使用する被験者も少なくない。また、先輩からの依頼を断る場合は、一番多く使われている「事情説明」は半分程度の談話で見られており、その次は3割の「謝罪＋事情説明」（「事情説明」の直前や直後に「謝罪」が現れるもの）である。

次に、「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」について分析を行う。まず、全39の日本語による「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合を表14にまとめる。

表15 日本語の全39の「断り談話」における
「最後に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	頻度	割合(%)
回避	1	2.6
事情説明	2	5.1
代案提示	2	5.1
謝罪	31	79.5
謝罪＋事情説明	2	5.1
謝罪＋直接的な断り	1	2.6
合計	39	100.0

上の表15からわかるように、日本語の全39会話のうち、「断り談話」において「謝罪」が最後の「断り」のストラテジーとして用いられた会話は約8割を占めており、「代案提示」や「事情説明」などのストラテジーよりはるかに高い頻度で使われている。以下の例33はそれに該当する談話例である。

例 3 2 「謝罪」が最後の「断り」のストラテジーとして用いられた談話例

(【資料 3 7】発話番号 3 4)

依頼側 JBI12	発話番号	被依頼側 JYK12
	21	あ、ちょっと…,,
きつい?。	22	
	23	無理ですね…。
	24	ごめんなさい。
ううん、いいよ、全然。	25	
	26	すいません、せっかく。
<ううん>{<},,,	27	
	28	<すいません>{>}。
ううん、全然。	29	
わかった、<ありがとう>{<}。	30	
	31	<あつ、すいません>{>}。
ううん、<ごめんね>{<}。	32	
	33	<はい>{>}。
	34	<u>すいません。</u>
うん、いやいや、いいよ、そんな謝らなくて<笑い>。	35	
うん、じゃ、(はい) ありがとう。	36	

例 3 2 では、被依頼側が最後に用いた「断り」のストラテジーの発話番号 3 4 以外にも、3 回（発話番号 2 6、2 8、3 1）の「謝罪」が現れている。つまり、この談話では、断り成立後、被依頼側が回を重ねて相手の依頼を断ってしまったに対してお詫びをしている。日本語会話ではいくつかの談話においてこのような流れが見られている。

次は、日本語における「最後に用いられる断りのストラテジー」について、相手との「相対的力 (P)」関係によって三つのグループに分けてそれぞれの頻度と割合を提示する。

表 1 6 日本語における相手との「相対的力」関係別による「最後に用いられる断りのストラ
テジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	JOK		JSK		JYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	1	7.7	0	0.0	0	0.0
事情説明	0	0.0	2	15.4	0	0.0
代案提示	2	15.4	0	0.0	0	0.0
謝罪	9	69.2	11	84.6	11	84.6
謝罪＋事情説明	1	7.7	0	0.0	1	7.7
謝罪＋直接的な断り	0	0.0	0	0.0	1	7.7
合計	13	100.0	13	100.0	13	100.0

表 1 6 に示すように、どのグループにおいても、被依頼側の調査協力者が「謝罪」のストラテジーを使用して、「断り談話」を終わらせる傾向が示されている。

5. 1. 2 台湾華語母語話者である調査協力者の場合

以下では、台湾華語会話の「断り談話」における「断り」のストラテジーの出現順序について、「最初に用いられる断りのストラテジー」と「最後に用いられる断りのストラテジー」の二つの観点から分析を行う。まず、台湾華語の全 3 9 の「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合を以下の表 1 6 に示す。

表 1 7 台湾華語の全 3 9 の「断り談話」における
「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	頻度	割合 (%)
直接的な断り	5	12.8
事情説明	23	59.0
代案提示	1	2.6
否定的な見解の表明	5	12.8

事情説明＋直接的な断り	5	12.8
合計	39	100.0

表17からわかるように、台湾華語の「断り談話」では「最初に用いられる断りのストラテジー」として、「事情説明」が約6割で一番多く使われているが、「直接的な断り」、「否定的な見解の表明」と「事情説明＋直接的な断り」が5例ずつ現われており、わずかであるが、「代案提示」が1例見られた。以下では、日本語の談話にない、「代案提示」先行型と「理由＋直接的な断り」先行型を含めて、各タイプに該当する談話例を示す。

例33 「直接的な断り」先行型（【資料40】発話番号27）

依頼側 TBI01	発話番号	被依頼側 TOK01
然後可是早上9點喔，開始喔。 【それから、だけど朝9時よ、始まるのがね。 】	25	
<3 個小時>{<}。 【<3 時間>{<}。】	26	
	27	<啊啊，>{>}我不要!。 【<ああ、>{>}いやだ!。】
爲什麼?。 【どうして?。】	28	
	29	###聽起來就很無聊。 【###退屈そうもん。】
不會好不好。 【そんなことないって。】	30	

例34 「事情説明」先行型（【資料71】発話番号44）

依頼側 TBI11	発話番号	被依頼側 TYK11
明天早上，早上很早耶。 【明日の朝、朝かなり早いんだけど。】	43	
	44	ha2(“什麼”的意思)，早上的話我要上家教耶。 【なに?、朝だとプライベートレッスンがあるんだけど。】
ha2，你早上要上家教是不是?。 【あ、そう?、朝プライベートレッスンなの?。 】	45	

	46	嗯，我可能只有下午可以幫你。 【うん、午後しか手伝えないかも。】
ha2(“是喔”的意思)，那沒有辦法了耶。 【そっかー、じゃだめなんだね。】	47	

例 3 5 「代案提示」先行型（【資料 4 6】発話番号 1 6）

依頼側 TBI03	発話番号	被依頼側 TOK03
然後實驗內容大概是，就是要去中研院那邊，然後實驗內容大概就是跟不認識的男生講話，然後他會把那個錄音，然後他們要做研究，這樣子。 【それから実験の内容は大体、あの、中研院のほうに行って、それから実験の内容はたぶん知らない男の子と話して、話したものが録音されて、で彼らはそれを研究するの、こんな感じ。】	12	
	13	喔喔。 【そうなんだ。】
	14	很缺人嗎？ 【結構人が足りない感じ？。】
嗯…，也還好啦。 【うーん、まあまあかな。】	15	
	16	<u>你，要不要先找找看別人啊？<笑>。</u> 【あなたは、先に他の人を探してみない？<笑い>。】
喔，好，好那我等一下再打給你好了。 【うん、わかった、じゃあとでまた電話するね。】	17	
	18	喔，好。 【うん、分かった。】

例 3 6 「否定的な見解の表明」先行型（【資料 4 8】発話番号 9）

依頼側 TBI03	発話番号	被依頼側 TYK03
要去中研院那邊。 【中研院に行くけど。】	8	
	9	中研院好遠喔<笑>。 <u>[聲音超大，頗為激動]</u> 【中研院遠いよ<笑い>。[声が非常に大きい、興奮気味]】
喔…。 【ああ…。】	10	

		11	我不知道耶，有，可能有空吧。 【わからないんだ、ある、暇があるかもしれない。】
		12	<怎樣?><{>。 【<なにが?><{>。】
<9 點><{> 到，要 3 個小時。 【<9 時に><{> 着いて、3 時間かかる。】	13		
		14	喔喔，好久喔。 【おおー、長いね。】
		15	喔喔啊啊啊<笑>。[甚是激動] 【おおー、ああー<笑い>。[かなり興奮]】
		16	eil…，因為我明天早上有可能會被抓去打 球吧，對。 【えーと、明日の朝もしかしたら（バスケット） ボールの練習に呼ばれるかもしれないから、そ う。】
OK，好那我再找別人好了，<沒關係><{>。 【オッケー、いいよ、じゃまた他の人を探し てみよう、<大丈夫><{>。】	17		

例 3 7 「理由＋直接的な断り」先行型（【資料 6 4】発話番号）

依頼側 TBI09	発話番号	被依頼側 TSK09
喂，就是（嗯），我之前答應一個教授，說 要幫他去中研院做實驗，（嗯）就是明天早 上，可是（嗯）因為我臨時有事不能去，所 以我要找一個人拜託代我去。 【もしもし、あのね（うん）、私は前に教授 に約束したけど、中研院に行って実験に協力 すると、（うん）つまり明日の朝だけど、だ けど（うん）急用ができて行けなくなったか ら、誰か一人私の代わりに行ける人を探して るの。】	2	
	3	明明明天禮拜幾？。 【あ、あ、あしたは何曜日？。】
明天禮拜五，明天早上。 【明日は金曜日、明日の朝。】	4	
	5	明天我可能不行耶，因為我要去店裡幫忙。 【明日は私はたぶんだめなのよ、お店に手伝い に行くから。】
明天不行喔？。 【明日だめなの？。】	6	

	7	hei4(“對”的台語), 我要去我媽店裡幫忙。 『ええ(台湾語で)、うちのお母さんのお店に 行って手伝うの。』
喔, 好。 『そっか、わかった。』	8	

次は、台湾華語による「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」について、相手との「相対的力 (P)」関係によって三つのグループに分けて、各先行型が現れる頻度及び割合を表 18 にまとめる。

表 18 台湾華語における相手との「相対的力」関係別による「最初に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	TOK		TSK		TYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
直接的な断り	3	23.1	1	7.7	1	7.7
事情説明	8	61.5	7	53.8	8	61.5
代案提示	1	7.7	0	0.0	0	0.0
否定的な見解の表明	1	7.7	2	15.4	2	15.4
事情説明+直接的な断り	0	0.0	3	23.1	2	15.4
合計	13	100.0	13	100.0	13	100.0

※TOK：依頼側の先輩である被依頼側の台湾華語母語話者調査協力者；TSK：依頼側の同級生である被依頼側の台湾華語母語話者調査協力者；TYK：依頼側の後輩である被依頼側の台湾華語母語話者（以下同様）

表 18 からわかるように、「事情説明」先行型が一番多く使われており、三つのグループともに半分以上の割合を占めている。後輩からの依頼を断る場合は、「直接的な断り」先行型を用いる例（3 例）や、「代案提示」あるいは「否定的な見解の表明」（1 例ずつ）を最初の「断り」のストラテジーとして用いられた例も見られた。同級生からの依頼を断る場合は、「事情説明」先行型のほかに、「事情説明+直接的な断り」（3 例）や「否定的な見解の表明」（2 例）、さらに、1 例のみであるが「直接的な断り」先行型も見られた。また、先輩からの依頼を断る場合は、13 例のうち、「否定的な見解の表明」と「事情説明+直接的な断り」先行型が 2 例ずつ現れており、「直接的な断り」先行型は、同級生からの依頼を

断るグループと同様に1例が見られた。

次に、台湾華語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」について分析を行う。まず、台湾華語の全39の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合を表19にまとめる。

表19 台湾華語の全39の「断り談話」における
「最後に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	頻度	割合(%)
事情説明	7	17.9
代案提示	6	15.4
謝罪	18	46.2
否定的な見解の表明	3	7.7
事情説明+直接的な断り	2	5.1
その他の組み合わせ	3	7.7
合計	39	100.0

表19からわかるように、39の「断り談話」のうち18例(46.2%)が「謝罪」で終わっている。ほかには、「事情説明」(7例)や「代案提示」(6例)で終わっている談話、または「否定的な見解の表明」(3例)、「その他の組み合わせ」(3例)、「事情説明+直接的な断り」(2例)などを最後の「断り」のストラテジーとして用いた談話も観察された。「その他の組み合わせ」で終わっている3例は、「代案提示+理由説明」、「回避+理由説明」と「否定的な見解の表明+直接的な断り」である。以下に、「使用頻度」上位三位までの各タイプに該当する談話例を示す。

例 3 8 「謝罪」が最後の「断り」のストラテジーとして用いられた談話例

〔【資料 5 8】発話番号 7 8）

依頼側 TBI07	発話番号	被依頼側 TOK07
	72	那還是我幫你問問看，如果可以我再打給你。 『それじゃそれとも私が代わりに聞いてみて、もし行けるならまた電話する。』
喔，好。 『ああ、ええ。』	73	
	74	然後你順便也問問看別人這樣〈笑〉。 『それからあなたもついでに他の人に聞いてみて〈笑い〉。』
喔，好。 『ああ、ええ。』	75	
	76	我這樣去太遠了啦，〈要騎車〉{<}>。 『私がこれで行ったら遠すぎるのよ、〈バイクに乗らないと〉{<}>。』
〈嗯，>{>}OK，好，〈沒關係〉{<}>。 『〈うん、>{>}オッケー、うん、〈大丈夫〉{<}>。』	77	
	78	〈歹勢咧（“不好意思喔”的台語）>{>}。 『〈すまないね（台湾語で）>{>}。』
那我自己也再問問看好了。 『じゃ、私も自分でまた聞いてみよう。』	79	

例 3 9 「事情説明」が最後の「断り」のストラテジーとして用いられた談話例

〔【資料 4 5】発話番号 1 0 7）

依頼側 TBI02	発話番号	被依頼側 TYK02
	103	喔，好啦，叫「人名」去。 『そっか、じゃあ、「人名」に行かせよう。』
ha2（“什麼”的意思）？。 『なに？。』	104	
	105	叫「人名」去叫「人名」去。 『「人名」に、「人名」に行ってもらおう。』
喔，所以你不想去對不對？。 『ああ、それじゃあなたは行きたくないのね？。』	106	

		107	我想說， <u>嗯2，這樣我明天去可能會在那邊出糗了一下。</u> 【わたしは、えーと、こうして私明日行くと、たぶんあそこで恥をかくと思うから。】
OK，好吧。 【オッケー、いいよ。】	108		
		109	就這樣喔，我給你電話喔，掰掰。 【じゃあね、電話するよ、バイバイ。】

例40 「代案提示」が最後の「断り」のストラテジーとして用いられた談話例

(【資料73】発話番号)

依頼側 TBI12	発話番号	被依頼側 TSK12
<它是>{>}早上九點，而且不能遲到那種。 【<それは>{>}朝9時、しかも遅刻しちゃだめなの。】	31	
	32	/停頓 1.5 秒/那我看我可能還是不要去好了。 【/沈黙 1.5 秒/じゃ、私はやっぱりたぶん行かないほうがいい。】
	33	歹勢(“不好意思”的台語)，我<怕我明天起不來>{<}。 【すまない(台湾語で)、私は<明日起きられないじゃないか心配するから>{<}。】
<好，那沒關係>{>}。 【<うん、じゃ大丈夫>{>}。】	34	
	35	<u>嗯，那你問問看「人名」好了，你問他了嗎？。</u> 【うん、じゃ「人名」に聞いてみたら？、彼女に聞いた？。】
啊，還沒。 【ああ、まだ。】	36	
	37	好，那你問問看他好了，他應該有空吧，我想。 【うん、じゃ彼女に聞いてみてね、彼女はたぶん空いてるでしょう、と思うけど。】
好，好，沒關係，嗯，好，謝謝。 【わかった、わかった、大丈夫、うん、ええ、ありがとう。】	38	

続いて台湾華語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」について、相手との「相対的力 (P)」関係によって分けられた三つのグループにおけるそれぞれの頻度と割合を以下の表に提示する。

表 2 0 台湾華語における相手との「相対的力」関係別による「最後に用いられる断りのストラテジー」の頻度と割合

「断り」のストラテジー	TOK		TSK		TYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
事情説明	4	30.8	0	0.0	3	23.1
代案提示	1	7.7	4	30.8	1	7.7
謝罪	5	38.5	6	46.2	7	53.8
否定的な見解の表明	0	0.0	3	23.1	0	0.0
事情説明＋直接的な断り	0	0.0	0	0.0	2	15.4
その他の組み合わせ	3	23.1	0	0.0	0	0.0
合計	13	100.0	13	100.0	13	100.0

表 2 0 に示すように、「断り談話」に現われた最後の「断り」のストラテジーという観点からみると、「謝罪」のストラテジーが三つのグループのどれかにおいても一番多く使われていることがわかった。しかし、後輩からの依頼を断る場合は、「断り談話」が終わる前に「事情説明」(4 例)をしたり、「その他の組み合わせ」(3 例)や「代案提示」(1 例)を使ったりする例も見られた。同級生からの依頼を断る場合は、「謝罪」(6 例)のほかに、「代案提示」(4 例)や「否定的な見解の表明」(3 例)が用いられる例もあった。また、先輩からの依頼を断る場合は、「断り談話」の最後に「事情説明」(3 例)や「事情説明＋直接的な断り」(2 例)、1 例のみであるが「代案提示」が現われた例も見られた。

5. 2 断りのストラテジーの「使用頻度」について

ここでは、「断り」のストラテジーにおいて、まず日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士のそれぞれ 3 9 の「断り談話」における各「断り」のストラテジーの使用頻度を

提示し、さらに「断りが成立するまでの段階」と「断りが成立した後の段階」に分けて分析を行い、日本語と台湾華語の「断り談話」における「断り」のストラテジーの使用頻度の特徴を探る。

5. 2. 1 日本語母語話者調査協力者の場合

まず、日本語の「断り談話」において、4. 2. 2「分析項目の定義」で提示されている各「断り」のストラテジーの使用頻度に注目する。表22に日本語による全39の「断り談話」における「断り」のストラテジーの使用頻度及びその割合を示す。

表21 日本語の全39の「断り談話」における
「断り」のストラテジーの使用頻度と割合

「断り」のストラテジー	頻度	割合(%)
回避	6	3.8
直接的な断り	15	9.4
事情説明	31	19.5
代案提示	8	5.0
謝罪	75	47.2
否定的な見解の表明	5	3.1
条件提示	2	1.3
謝罪＋事情説明	10	6.3
謝罪＋直接的な断り	3	1.9
事情説明＋直接的な断り	3	1.9
その他の組み合わせ	1	0.6
合計	159	100.0

※各「断り」のストラテジーの割合は、

当該のストラテジーが現われた頻度を合計頻度（159）で割ったものである。

表21に示すように、日本語の「断り談話」において、「謝罪」が一番多く使われており、47.2%の割合を占めている。その次は19.5%の「事情説明」、9.4%の「直接的

な断り」である。「条件提示」や各「複合的ストラテジー」（「謝罪＋事情説明」、「謝罪＋直接的な断り」など）の使用頻度がかなり少ないが、本研究で提示した各構成要素に該当する例は、日本語の談話にはすべて見られた。

以下では、4. 2. 1 「分析の単位」で提示した認定の仕方によって一つのまとまった「断り談話」から分けられた「断りが成立するまで」と「断りが成立した後」という二つの段階における各「断り」のストラテジーの使用頻度とその割合を表2 3にまとめて示す。

表2 2 日本語の「断り成立までの段階」及び「断り成立後の段階」における
各「断り」のストラテジーの使用頻度と割合

「断り」のストラテジー	断り成立までの段階		断り成立後の段階	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	6	9.1	0	0.0
直接的な断り	12	18.2	3	3.2
事情説明	26	39.4	5	5.4
代案提示	1	1.5	7	7.5
謝罪	2	3.0	73	78.5
否定的な見解の表明	4	6.1	1	1.1
条件提示	2	3.0	0	0.0
謝罪＋事情説明	8	12.1	2	2.2
謝罪＋直接的な断り	1	1.5	2	2.2
事情説明＋直接的な断り	3	4.5	0	0.0
その他の組み合わせ	1	1.5	0	0.0
合計	66	100.0	93	100.0

※各段階の各「断り」のストラテジーの割合は、

その段階で見られた頻度をその段階の合計頻度で割ったものである。

表2 2からわかるように、「断り成立後の段階」で使用された「断り」のストラテジーの総数が、「断り成立までの段階」より若干多く現われている。また、「断り成立までの段階」においては、「事情説明」が一番多く見られており（39.4%）、その次は「直接的な断り」（18.2%）と「謝罪＋事情説明」（12.1%）である。一方、「断り成立後の段階」

においては、「謝罪」が一番頻繁に使われており（78.5%）、その他の要素はすべて10%に及ばなかった。そして、この段階では、「回避」、「条件提示」、「事情説明+直接的な断り」と「その他の組み合わせ」などの要素が見られなかった。

さらに、「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」における各「断り」の戦略の使用頻度を、談話全体（「断り成立までの段階」+「断り成立後の段階」、以下同様）における各「断り」の戦略の総使用頻度で割って得られた割合を以下の表に示す。

表23 日本語の「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における
各「断り」の戦略の使用頻度の談話全体に占める割合（%）

「断り」の戦略	断り成立までの段階	断り成立後の段階
回避	100.0	0.0
直接的な断り	80.0	20.0
事情説明	83.9	16.1
代案提示	12.5	87.5
謝罪	2.7	97.3
否定的な見解の表明	80.0	20.0
条件提示	100.0	0.0
謝罪+事情説明	80.0	20.0
謝罪+直接的な断り	33.3	66.7
事情説明+直接的な断り	100.0	0.0
その他の組み合わせ	100.0	0.0
合計	41.5	58.5

※各段階における各「断り」の戦略の割合は、

表22の談話全体における頻度で割ったものである。

註解 [SH1]: 番号確認

表23に示すように、「回避」、「条件提示」、「事情説明+直接的な断り」と「その他の組み合わせ」は、「断り成立までの段階」においてのみ現われており、「直接的な断り」、「事情説明」、「否定的な見解の表明」と「謝罪+事情説明」等の戦略も、8割以上とその大半が「断り成立までの段階」で使用される傾向が示されている。また、「謝罪」と「代案提示」は、「断り成立後の段階」において非常に多く使われており、「謝罪+直接的な断り

り」のストラテジーも、断りが成立する前よりは断りが成立した後の方が多く使われることがわかった。

次は、日本語の「断り談話」における「断りのストラテジー」の使用頻度について、相手との「相対的力 (P)」関係によって三つのグループに分けてそれぞれの頻度と割合を提示する。

表 2 4 日本語における相手との「相対的力」関係別による
各「断りのストラテジー」の使用頻度と割合

「断りのストラテジー」	JOK		JSK		JYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	3	5.6	2	3.6	1	2.0
直接的な断り	4	7.4	10	18.2	1	2.0
事情説明	11	20.4	10	18.2	10	20.0
代案提示	4	7.4	4	7.3	0	0.0
謝罪	25	46.3	20	36.4	30	60.0
否定的な見解の表明	2	3.7	2	3.6	1	2.0
条件提示	0	0.0	2	3.6	0	0.0
謝罪＋事情説明	2	3.7	3	5.5	5	10.0
謝罪＋直接的な断り	1	1.9	0	0.0	2	4.0
事情説明＋直接的な断り	1	1.9	2	3.6	0	0.0
その他の組み合わせ	1	1.9	0	0.0	0	0.0
合計	54	100.0	55	100.0	50	100.0

※各グループにおける各「断りのストラテジー」の割合は、各グループの総使用頻度で割ったものである。

表 2 4 からわかるように、日本語の「断り談話」において、三つのグループともに、「謝罪」が一番多く使われており、二番目に多く現われているのは「事情説明」である。また、同級生からの依頼を断る場合は、「直接的な断り」は「事情説明」と同じ位の頻度で使用されており、他の二つのグループより高い割合を占めている。そして、後輩からの依頼を断る場合と同級生からの依頼を断る場合には 4 例ずつ見られたが、先輩からの依頼を断る場

合においては、「代案提示」を断りのストラテジーとして使う例は見られなかった。

5. 2. 2 台湾華語母語話者調査協力者の場合

ここでは、台湾華語における「断り談話」の各「断りのストラテジー」の使用頻度について述べる。まず、表26に「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」を併せた「断り談話」全体における各「断りのストラテジー」の使用頻度及びその割合を提示する。

表25 台湾華語の全39の「断り談話」における
各「断りのストラテジー」の使用頻度と割合

「断りのストラテジー」	頻度	割合(%)
回避	2	1.2
直接的な断り	10	5.8
事情説明	63	36.6
代案提示	28	16.3
謝罪	23	13.4
否定的な見解の表明	24	14.0
条件提示	8	4.7
謝罪+事情説明	1	0.6
謝罪+直接的な断り	0	0.0
事情説明+直接的な断り	8	4.7
その他の組み合わせ	5	2.9
合計	172	100.0

※各「断りのストラテジー」の割合は、
当該の「断りのストラテジー」の頻度を総使用頻度で割ったものである。

表25からわかるように、台湾華語の「断り談話」において、「断りのストラテジー」の使用は特定のいくつかのストラテジーに集中せず、各ストラテジーがばらばらに使われており、使用頻度の全体に占める割合に関しては、どの「断りのストラテジー」も50%を超えていない。その中で36.6%の「事情説明」が一番よく使われているストラテジー

であり、その次は16.3%の「代案提示」である。他には、「謝罪」(23回)と「否定的な見解の表明」(24回)がほぼ同じ頻度で使われている。また、「謝罪+直接的な断り」というストラテジーの使用は見られなかった。「謝罪+事情説明」も僅かに1例しかなかった。

次に、台湾華語の「断り談話」における各「断りのストラテジー」の使用頻度を、「断り成立まで」と「断り成立後」の二つの段階に分けて提示する。

表26 台湾華語の「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」における
各「断りのストラテジー」の使用頻度と割合

「断りのストラテジー」	断り成立までの段階		断り成立後の段階	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
回避	2	1.8	0	0.0
直接的な断り	10	8.8	0	0.0
事情説明	57	50.0	6	10.3
代案提示	11	9.6	17	29.3
謝罪	1	0.9	22	37.9
否定的な見解の表明	18	15.8	6	10.3
条件提示	4	3.5	4	6.9
謝罪+事情説明	1	0.9	0	0.0
謝罪+直接的な断り	0	0.0	0	0.0
事情説明+直接的な断り	7	6.1	1	1.7
その他の組み合わせ	3	2.6	2	3.4
合計	114	100.0	58	100.0

※各段階の各「断りのストラテジー」の割合は、

その段階で見られた頻度をその段階の合計頻度で割ったものである。

表26に示すように、「断り成立までの段階」で使われた「断りのストラテジー」の数は、「断り成立後の段階」で現れた「断りのストラテジー」の数のほぼ2倍である。また、「断り成立までの段階」において、「事情説明」が一番多く使われており、その使用頻度はちょ

うど全体の半分を占めている。二番目に多いのは15.8%の「否定的な見解の表明」であり、その次は9.6%の「代案提示」である。一方、「断り成立後の段階」においては、「謝罪」が一番多く現われているが、この戦略は「断り成立までの段階」には1例しか見られなかった。また、「断り成立後の段階」において、「代案提示」の使用は約3割程度にみられ、「事情説明」と「否定的な見解の表明」はそれぞれ10.3%の割合を占めている。

さらに、以下では、「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」における各「断りの戦略」の使用頻度を、全談話における各「断りの戦略」の総使用頻度で割って、得られた割合を表28に示す。

表27 台湾華語の「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」における
各「断りの戦略」の使用頻度の談話全体に占める割合

「断りの戦略」	断り成立までの段階	断り成立後の段階
回避	100.0%	0.0%
直接的な断り	100.0%	0.0%
事情説明	90.5%	9.5%
代案提示	39.3%	60.7%
謝罪	4.3%	95.7%
否定的な見解の表明	75.0%	25.0%
条件提示	50.0%	50.0%
謝罪＋事情説明	100.0%	0.0%
謝罪＋直接的な断り	—	—
事情説明＋直接的な断り	87.5%	12.5%
その他の組み合わせ	60.0%	40.0%
合計	66.3%	33.7%

※各段階における各「断りの戦略」の割合は、
表25の談話全体における頻度で割ったものである。

表27からわかるように、「断り成立までの段階」でしか見られなかったのは、「回避」、

「直接的な断り」と「謝罪＋事情説明」などのストラテジーである。「事情説明」や「事情説明＋直接的な断り」、「否定的な見解の表明」等も、「断り成立後の段階」よりは、その前の「断り成立までの段階」で使われることが明らかに多い。また、「謝罪」の使用のほとんどが「断り成立後の段階」で行われている。そして、「条件提示」の使用は、この二つの段階においてちょうど50%ずつの割合を占めている。「断り成立後の段階」においては、「回避」「直接的な断り」「謝罪＋事情説明」「謝罪＋直接的な断り」の四種類のストラテジーの使用がみられなかったことから、この段階で使われた「断りのストラテジー」のバリエーションは、「断り成立までの段階」ほどではないことがいえるであろう。

最後に、台湾華語の「断り談話」における「断りのストラテジー」の使用頻度について、相手との「相対的力 (P)」関係によって三つのグループに分けてそれぞれの頻度と割合を提示する。

表 2 8 台湾華語における相手との「相対的力」関係別による
各「断りのストラテジー」の使用頻度と割合

「断りのストラテジー」	TOK		TSK		TYK	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	0	0.0	0	0.0	2	4.0
直接的な断り	6	13.0	3	3.9	1	2.0
事情説明	16	34.8	27	35.5	20	40.0
代案提示	5	10.9	19	25.0	4	8.0
謝罪	5	10.9	10	13.2	8	16.0
否定的な見解の表明	9	19.6	9	11.8	6	12.0
条件提示	0	0.0	4	5.3	4	8.0
謝罪＋事情説明	0	0.0	1	1.3	0	0.0
謝罪＋直接的な断り	0	0.0	0	0.0	0	0.0
事情説明＋直接的な断り	1	2.2	3	3.9	4	8.0
その他の組み合わせ	4	8.7	0	0.0	1	2.0
合計	46	100.0	76	100.0	50	100.0

※各グループにおける各「断りのストラテジー」の割合は、各グループの総使用頻度で割ったものである。

表 28 からわかるように、台湾華語の「断り談話」における「断りのストラテジー」の使用頻度に関しては、三つのグループともに「事情説明」の使用頻度がトップになっている。各グループの二番目に多いストラテジーは、依頼側の先輩にあたる被依頼側は「否定的な見解の表明」を、同級生にあたる被依頼側は「代案提示」を、後輩にあたる被依頼側は「謝罪」を使っている。また、「回避」というストラテジーは先輩からの依頼を断る場合のみ使われており、「直接的な断り」は後輩の依頼を断るときに一番多く使われている。他には、「代案提示」は同級生の依頼を断るときに、「条件提示」は同級生や後輩からの依頼を断るときに多く使用されることがわかった。

5. 3 断りのストラテジーの「具体的内容」について

5. 3. 1 語用論的ストラテジーの観点から

「依頼」に対して、それを受け入れる場合は、相手のフェイスを脅かす心配はないため、相手のフェイスを考慮したストラテジーを工夫する手間が省ける。一方、依頼を断る場合は、依頼側の依頼を受け入れてほしいという欲求に背くことになるため、依頼側のフェイスを傷つけたり、相手を戸惑わせる行為になるであろう。それと同時に、「断り」という言語行動は、自分が非協調的で、相手の助けにならないということを含意するため、被依頼側自身にも F T A である。つまり、「断り」という行動は依頼側と被依頼側両方にとって F T A である。したがって、双方のフェイスを傷つけることなく、相手との友好関係を保ちながら自分の意思を通すためには、様々なストラテジーの工夫が必要となる。そして、日本語に限らず、このような「依頼」と「断り」に関する語用論的マナーを身につけるためにはある程度の訓練が必要であるといえる。

しかし、日本語母語話者の間では暗黙の了解として守られているマナーでも、このような異文化の語用論的知識を知らない、もしくは身につけていない非日本語母語話者にとっては、相手のフェイスを傷つけることなく元来の人間関係を保ちながら「断り」の言語行動をとることは非常に難しい。しかも、断り方によって無礼だと誤解される場合も考えられる。これは異なる文化背景をもつ人同士の会話において起こりうることであり、ある文化においては「ポライトだ」と思われていることは、異なる文化においてそうではない

と思われる場合もあるからである。

Ueda (1974) は、日本語の直接的に“ノー (No)”とすることを避けるための断りのストラテジーを 16 種類挙げている。また、日本語の場合は、多くの場面において自分より目上や地位の高い人の依頼に対して、それを受け入れる他に選択の余地がないことを指摘している。つまり、日本の文化社会では、ある行為を求められた場合（例えば「依頼」など）、それに対して直接的に“ノー (No)”ときっぱりと断ることはあまり好まれず、間接的な言い回しを用いて断ることが語用論的なマナーとして一般的に行われていることであろう。一方、間接的な断りを好む日本の社会と異なって、アメリカ社会では、断る際に“ノー (No)”とはっきりと断った後に、聞き手のフェイスを脅かす度合いを軽減するために謝罪や事情説明などのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いられると言われており、よく日本社会と比較される。

このように文化の差を「依頼」に対する「断り」に関する語用論のマナーに反映させることは、第二言語習得の場面において学習者によるプラグマティック・トランスファー (Pragmatic Transfer ; 語用論的転移) の現象として現われる。つまり、それぞれの文化によって異なる社会言語学的な規則やある発話行為を行うための語用論的知識などを、他の文化社会にいるときにも、そのまま使用してしまうことである。例えば、日本語母語話者が英語で断るときに「考えておく」という日本語での断りの語用論的知識をそのまま持ち込んでしまうようなことである。しかし、アメリカ社会では、断る際に「考えておく」という表現は使用されず、文字通りに積極的な姿勢と捉えられるのである。このように、「ポライトネス」の概念はどの文化においても存在するという意味では普遍的なものであるが、何を「ポライト」と見なすかは文化によって異なるのである。

そこで、ここでは、特に文化によって異なる尺度をもつ「断り」について、語用論的ストラテジーの観点からもう少し詳しく考察することにする。

以下では、本研究で提示されている七つの単独的「断りのストラテジー」を、ポライトネス・ストラテジーの観点からまとめる。

1) 回避

これは、相手からの行為要求に対して断りの意向を直接的に表現せず、言葉を濁したり、

控えめな表現を用いたりして、伝達意図を明示的に表さないで間接的に断るというストラテジーであるため、オフ・レコードである。F T Aを間接的に行うために、会話の含意によってF T Aをほのめかしながら聞き手がその意味を察知してくれるように願うこのストラテジーは、会話の含意の解釈はその場の状況に左右されるため、ネガティブ・ポライトネスと区別することが難しい場合もある。また、回避の下位項目として挙げられている「冗談を言う」というストラテジーは、Brown and Levison (1987) の分類によると、ポジティブ・ポライトネス・オン・レコード（ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの8）になるが、ここでは、本題と関係のない話をするにより、直接に断りに触れず間接的に断りの行動を行っているとは判断したため、回避に分類した。

もう一つの下位項目、「言葉を濁す」は、最後まで言わず途中で発言を止めてしまうため、F T Aが誰に向けられたのかがあいまいになり、結果として相手のネガティブ・フェイスを保つ発言となる。必要とされるよりも、余分に話したり、控えめに話したりすると、相手は「最後まではっきり言わない」のはなぜかとその理由を推測するのである。これは、「断り」のような相手のフェイスを脅かす度合いが高い行為を行うときに、相手のフェイスをなるべく傷つけないためのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーだといえる。

2) 直接的な断り

相手のフェイスを侵害する度合い（以下に、「F T度」）を軽減する行為を行わず、直接的な言語行動をとるため、ボールド・オン・レコードである。このような発話によって、相手との関係がアンバランスになる恐れがあるため、その前後にF T度を軽減する「事情説明」や「謝罪」が現われることが多いと考えられる。

「お断りします」のように遂行動詞を用いて依頼されている行為を実行しない意思をはっきりと表わす場合がこれにあたるが、日本語と台湾華語両方の談話にはこういったストラテジーを用いて断る例は見当たらない。その代わりに、「いやだ」「行きたくない」などの依頼の協力で否定的な気持ちを表明するものや、「できない」「無理」などの言語形式を用いて、依頼されている行為を実行することが不可能であることを明言するものがほとんどだった。

先行研究には、「直接的な断り」の使用は事情説明や回避などのいわゆる「間接的な断り」を用いるものより少ない、また、「直接的な断り」を用いるとしても最初から「いやだ」「…

できない」などときっぱりと断るより最初は間接的に遠まわしに断るのが好ましいとされている。しかし本研究では、使用頻度は「事情説明」「謝罪」ほどないが、「回避」「否定的な見解の表明」などのストラテジーより多く使われることや、「最初に用いられる断りのストラテジー」として「直接的な断り」を使った例は日本語会話と台湾華語会話ともに全体の12.8%あることなどの結果が得られた。これは、話者同士が親しい関係にあるからだと考えられる。

3) 事情説明

ポジティブ・ポライトネス・オン・レコード。これはBrown and Levinson (1987) が提示したポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの13 (理由を与える、あるいは要求する) である。

「事情説明」は、相手の依頼に対してなぜ自分がその行為を実行しない、あるいはできないのかを相手に分からせるものである。例えば、「授業（／バイト）がある」などの明確な理由を与えることは、その行為を遂行しないのが「自分の意向のいかんに関わらず、不可能である」ことを含意するものである。したがって、これは聞き手の意向と話し手の意向が対立していないことを示すと思われ、「相手との意見の相違を最小限にせよ」という原則にある程度従っているものだと考えられる。

また、「断り」の理由としては、「用事（／先約）がある」などのように理由を具体的に述べないものがある。これは理由の具体的な内容は述べないで、行為を実行できない理由が存在することだけを伝えるもので、「依頼」に対する「断り」として一般的に広く使われ、様々な場面で用いられている。

さらに、断る理由として自分の能力を否定するものもある。これは、依頼側の「相手ならこの行為を実行する能力があると信じている」という依頼することに踏み切る「前提」となることを否定することによって断っているものである。つまり、断りのストラテジーとして、授業、バイトがあるなどと自分ではどうしようもない不可抗力の理由を述べたり、あいまいな理由を述べたりすることよりは、相手に自分には依頼された内容を遂行する能力がないことを述べることで、FT度を和らげている。

4) 代案提示

ポジティブ・ポライトネス・オン・レコード。被依頼側が代案を提示することは、依頼側の事情を理解し、関心を持っていることをポジティブに示すこと（ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの9）である。

「代案提示」は、依頼を断ることの代わりに、問題になっている事柄について自分なりの解決策を提示し、相手の反応を待つもの、あるいは、断りの意思を表明することによって不均衡になった相手との関係を修復・維持するために使われるものである。実際、本研究で扱った検証資料をみると、「断り成立までの段階」において断りたい旨を伝えるためにこのストラテジーを使う例が少なく、その大半は「断り成立後の段階」に現われ、相手の事情に配慮を示し、いい方法を提示することによって相手に協力しようという積極的な姿勢の表明になるものであり、すなわち後者にあたるものである。

また、熊井（1992）は「代案提示」について以下のように言っている。「代案提示」は、時間や内容の変更であればなんとか協力できる方法を模索することにもなるが、場合によっては自分の身に降りかかってきた火の粉を他人に押し付けようとするストラテジーと受けとられるおそれがある。そのような誤解を避けるためにはなぜ代案を提示するのかという必然性や根拠が明確でなければならない。よって、「代案提示」は「事情説明」と共起することが考えられる。

5) 謝罪や残念な気持ちの表明

ネガティブ・ポライトネス・オン・レコード。これはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの6である。Brown and Levinson（1987）は、「謝罪」によって、話し手は聞き手のネガティブ・フェイスを侵害することが不本意であることを示し、それによってF T度を部分的に軽減することができるという。本研究の結果によると、日本語母語話者に多用されているこのストラテジーは、台湾華語母語話者にはあまり使われておらず、その使用頻度は日本語会話の3割程度しかなかった。

また、「謝罪」は、その現われた位置によって異なる機能をもっている。邱（2002）は、「断りの意志表示」に先行する場合は断りの「予告」として機能し、後続する場合は「関係維持」として機能するという。実際に会話資料をみてみると、「断り成立までの段階」に

において、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともにあまり「謝罪」を使用せず、そのほとんどが「断り成立後の段階」で用いられている。すなわち、日本語と台湾華語における「謝罪」は、主に断ることによって相手に与えられるFT度を軽減するため、断ることによって崩された相手との人間関係を修復・維持するために使われるものだといえるであろう。

6) 否定的な見解の表明

これは、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの8、FTAを一般的な規則として述べるというストラテジーにあたるものであるため、ネガティブ・ポライトネス・オン・レコードである。問題になっている事柄について否定的な判断を述べるこのストラテジーは、断りのインパクトを和らげるために使用され、依頼側である相手に交渉の余地を与え、依頼側もこれを十分な断りとしては受け付けられない場合がある。日本語母語話者より台湾華語母語話者のほうが、これを断りのストラテジーとして使うことが多い。

7) 条件提示

こういう条件ならできると、自分から条件を提示することは、積極的に相手に働きかける姿勢の表われであると考えられる。これは、断りの意思表示によって崩された相手との関係を修復・維持しようとする点に「代案提示」と共通性が見られ、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つといえるであろう。

「条件提示」は積極的な条件提示と消極的な条件提示に分けられる。前者は具体的な条件を提示し、積極的に取り組もうとする姿勢を表わすものであり、後者は将来や過去になら承知したという旨を表明するものである。このストラテジーの使用に関しては、「代案提示」と同様に、「断り談話」において台湾華語母語話者のほうが若干多く使っている。

5. 3. 2 語用論的談話マーカ―の観点から

宇佐美（2001）は、敬語を有する言語とそうでない言語などの、各言語に固有の特性を超えた共通の枠組みでポライトネスを比較・検討するために、「ポライトネス」を、「言語形式の丁寧度」や「言語表現としての丁寧さ」に影響しやすい「一文、一発話行為レベル」

というような短い談話レベルで捉えるだけでは不十分であると指摘している。そして、実際の言語使用における「談話レベル」の語用論的ポライトネスという観点からポライトネスを捉える必要があるとし、「ディスコース・ポライトネス¹⁵⁾」という概念を導入している。

ここでは、「断りの戦略」において「ディスコース・ポライトネス」と関わる要素として「ちょっと」の使用、「スピーチレベル・シフト」、依頼側による「食い下がり」と「気配り発話」を取り上げ、これらがポライトネス・マーカースとして「断り談話」の中でいかに用いられているのかを考察する。

1) 「ちょっと」の使用

他人に快く思われたいという真の意味でのポライトネスと実際に会話の中で選択されるポライトネスの形は必ずしも一致しない。むしろ、異なる場合が多い。私たちは話し手が心の中で本当は何を考えているのかを知るすべもなく、ただ、話し手が何といい、聞き手がそれにどう応じたかということがわかるにすぎない。つまり、話し手がポライトかどうかを判断する唯一の手掛かりは、話し手が選択した言語形式やそれに伴うイントネーション、笑いなどの付随的なものになる。

例えば、断る際に「ちょっと」のような相手へのFT度を軽減する表現を発話の最初に用いることは、ポライトネスのマーカースになると考えられる。以下の例4-1は後輩からの依頼を断る場面である。この談話では、JOK09が、JBI09の依頼に対して、断る事情を述べる。その具体的な理由がくる前に「ちょっと」が用いられていることが見られた。

例4-1 「事情説明」に「ちょっと」が加わっている例（【資料2-6】発話番号10、12）

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JOK09
なんか明日って空いてますか？。	9	
	10	はあー、あ、ちょっとえっと、明日はバイトが、。
ああ、はあ、〈あ、なんか〉{<},,	11	
	12	〈入っちゃってるんだよね〉{>}。
明日、あの、言語調査の実験に参加する予定だったんだけど、行けなくなったん	13	

¹⁵⁾ 宇佐美（1998：152）は、「ディスコース・ポライトネス」を、「一文レベル、一発話レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である」と定義している。

ですよ。			
		14	あー。

また、例42のように、「ちょっとな」と言葉を濁すことによって、すでに直接的な断りを行う前に相手に断りたいという気持ちが伝わっている例も見られた。

例42 「直接的な断り」に「ちょっと」が加わっている例（【資料16】発話番号54）

依頼側 JBI06	発話番号	被依頼側 JOK06
	50	うんー、えっ、それは別にまさか「大学名」大でやるわけじゃないんだよね。
あの、赤羽、らへん。	51	
	52	あ、赤羽<笑う>。[“まいった”って感じ]
	53	おー。
	54	<u>うんーと、うんー、ちょっとな、む、無理かなー。</u>
あ、そうですか。	55	

このように、「断り」という相手へのFT度が高い場面においては、「断り」という行為が引き起こしうる摩擦を緩和するための工夫がなされる。例えば、事情説明や直接的な断りを述べる前に「ちょっと」のような言語形式を用いることによって、この時の理解主体である依頼側が相手の「断りたい」という気持ちを察することができるのである。よって、「ちょっと」を用いることは、人間関係を維持するための重要な役割を担っていると考えられる。

また、「ちょっと」と同様に、相手に配慮して「事情説明」の内容を和らげる効果のあるものとして、ラオハブラナキット（1997）は「～かな」「～な（あ）」などの文末形式を挙げている。自問的・独話的な働きをもつ「～かな」「～な（あ）」は、被依頼側が相手に対して直接的に断りを行うのではなく、自分に対して問いかけるような意味を示すことによって和らげの効果をもつという。本研究で扱った会話にはこれに該当する例があった。それは以下の例43である。

例 4 3 「直接的な断り」に「～な（あ）」の文末形式が加わっている例

（【資料 2 2】発話番号 3 5）

依頼側 JBI08	発話番号	被依頼側 JOK08
ちょっと明日突然行けなくなっちゃって、代わりに行ってもらえる人がいないかと思って探してまして。	30	
	31	<あ————>{<},,
<それで>{>},,	32	
	33	そっか。
なんですけど…。	34	
	35	<u>明日は行けないなー（<笑い>）。[大きな声で]</u>
そうですね、7時からじゃ無理ですくよね>{<}。	36	

例 4 4 「直接的な断り」に「ちょっと」と「かな」が付随する例

（【資料 1 6】発話番号 5 4）

依頼側 JBI06	発話番号	被依頼側 JOK06
	50	うんー、えっ、それは別にまさか「大学名」大でやるわけじゃないんだよね。
あの、赤羽、らへん。	51	
	52	あ、赤羽<笑う>。[“まいった”って感じ]
	53	おー。
	54	<u>うんーと、うんー、ちょっとなー、む、無理かなー。</u>
あ、そうですか。	55	

台湾華語母語話者同士の会話においては、「直接的な断り」にあたる「没有办法去（行けない）」「不行（だめ）」などの発話に「應該／可能（たぶん）」が付随することが何例かあった。本当に「協力できるかどうかわからない」場合も考えられるが、これらの例に関しては、「直接的な断り」に後続するやりとりを観察すると、そのほとんどが具体的な「事情説明」と共起することがわかった。直接的な断りをしているものの、あからさまな断りにならないように、断ることによって相手に与えてしまった不快感が少しでも減るように、上記のようなぼかし表現を同時に用いることで、断りの戦略にベールをかけ、断る意向がはっきりと伝わってしまうことを避けようとするのであろう。以下に、台湾華語会話においてこういった「直接的な断り」にぼかし表現が付随する例を提示する。

例 4 5 「直接的な断り」にぼかし表現「應該（たぶん）」が付随する例

（【資料 6 9】発話番号 4 2）

依頼側 TBI11	発話番号	被依頼側 TOK11
明天早上，因為很急，那。 【明日の朝、急いでるから、で。】	41	
	42	<u>我是我我我應該沒有辦法去啦。</u> 【わ、わ、わ、私はたぶん行けないんだよね。 】
嗯。 【うん。】	43	
	44	因為我們現在在忙公演啊。 【私たちは今公演で忙しいからね。】
嗯。 【うん。】	45	
	46	那我明天有明天我有我就是公演的事情 要做。 【で、わたしはあした、あした私は公演の仕 事があ、あるの。】
喔，好。 【そっか、わかった。】	47	

例 4 6 「直接的な断り」にぼかし表現「可能（たぶん）」が付随する例

（【資料 6 4】発話番号 5）

依頼側 TBI09	発話番号	被依頼側 TSK09
明天禮拜五，明天早上。 【明日は金曜日、明日の朝。】	4	
	5	<u>明天我可能不行耶，因為我要去店裡幫 忙。</u> 【明日は私はたぶんだめなのよ、お店に手伝 いに行くから。】
明天不行喔？。 【明日だめなの？。】	6	
	7	hei4(“對”的台語)，我要去我媽店裡幫 忙。 【ええ（台湾語で）、うちのお母さんのお店 に行って手伝うの。】

2) 「スピーチレベル・シフト」

従来のポライトネス研究では、日本語のような敬意表現が文法の中に組み込まれている言語において、敬語の使用法が敬語使用の原則に制約されているため、戦略的な言語使用の余地があまりないと主張されてきた (Ide 1989, Matsumoto 1988 など)。しかし、日本語においては、談話レベルの要素、すなわち、「スピーチレベル・シフト」や「話題導入の頻度」などに顕著に個人の戦略的な言語使用が反映されていると考えられる。

例えば、以下の例47と例48の会話において「スピーチレベル・シフト」が戦略的に用いられている。まず、例47の会話において JOK06 のスピーチレベルの基本状態は「常体」だと考えられるが、発話番号46、48で JOK06 が「常体」から「丁寧体」へとアップシフトしている。また、例48の会話では、同等の友人同士である JBI09 と JSK09 は、「常体」で話すのが普通だと思われるが、JSK09 が発話番号50、53、57「常体」から「丁寧体」へとアップシフトしている。そして、この会話では、依頼側の JBI09 からのアップシフトも見られた (発話番号35、49)。

例47 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例 (【資料16】発話番号46、48)

依頼側 JBI06	発話番号	被依頼側 JOK06
	42	それはなにをするものなの？。
なんか、私自し、体もちょっとよく分からないんですけど、<なんか>{<}&,,	43	
	44	<<笑う>>{>}、うん。[自分さえわからないことを他人に頼むのかよって感じ]
その国立国語研究所の人が、(うん) なんか言葉、わ、若者言葉かなんかそういう言葉についての調査をするんで、(えー)それに参加してくださいっていうやつなんですけど。	45	
	46	<u>えー、うんーと、明日ねゼミの発表が、</u>
あつ。	47	
	48	<u>ありまして。</u>
はい。	49	
	50	うんー、えっ、それは別にまさか「大学名」大でやるわけじゃないんだよね。
あの、赤羽、らへん。	51	

例48 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例

(【資料27】 発話番号50、53、57)

依頼側 JBI09	発話番号	被依頼側 JSK09
そう、でなんか急にいけれんくなってね なんか、(うん) そう、「JSK09 あだ名」 明日、ね、どうかねって思って。	34	
<u>どう、どうですかね。</u>	35	
	36	どこでやるの？。
あ、すごい遠くて、(うん) えっとね、 板、板橋。	37	
<板橋>{<}<。}	38	
	39	<板橋?>{>}<笑う>。
うん、板橋 <笑う>。	40	
	41	<笑いながら>いい、いい、板、板橋、板橋って <どこだ>{<}<。
<笑いながら><板、>{>}板、えっとね赤 羽のほう??。	42	
	43	あーあーあー<あー>{<}<。
<埼>{>}京線??、うん。	44	
	45	<あーあー>{<}<。[何かを考えているよう で、小さい声で]
<板橋遠い…>{>}<。}	46	
	47	<うーん>{<}<。
<うーん>{>}<。}	48	
<u>「JSK09 姓」さん(えっ) どうでしょう</u> <u><笑う>。</u>	49	
	50	<u><笑う>「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」さ ん眠い<u>です</u><JBI09 がずっと笑っている。 のち、2 人で笑う>。</u>
やー、9 時起きれないか<笑いながら>。	51	
<9 時は>{<}<笑いながら>。	52	
	53	<u><起きれ>{>}ない<u>ですよ</u>。</u>
<笑う>しかも 9 時から。	54	
	55	明日はね、,
うん。	56	
	57	<u>明日ね、あの一、マックを買いに行くん<u>で</u> <u>す</u>。</u>
<笑いながら>マック?。	58	
	59	明日パソコンを買いに行くので、無理

		>{<}。
--	--	-------

このように、基本状態からはみ出している「スピーチレベル・シフト」の使用は、ストラテジー的な言語使用と見なすことができる。例えば、例48のように、後輩からの依頼に対して、断る事情を述べる場面において、依頼側の先輩である JOK06 は基本状態である「常体」から「丁寧体」へとスピーチレベルをシフトさせている。これは、相手のフェイスを脅かす度合い、相手との対立を緩和するためのストラテジーとして「です」体がいわれていると考えられる。

このように、敬語使用の原則という語用論的制約がある日本語において、「スピーチレベル・シフト」などのような言語形式以外の言語的ストラテジーを用いて相手に近づきたいという個人の気持ちを表わしたり、相手のポジティブ・フェイスに訴えかけたりしているのである。

3) 依頼側による「食い下がり」と「気配り発話」

実際の会話資料による分析結果がDCTによる結果と根本的に異なることは、実際の会話ではDCTには見られなかった依頼側による「食い下がり」や「気配り発話¹⁶⁾」がいわれていることである。つまり、実際の会話では、例49のように、JYK08 が依頼に対して回避という間接的な断りを用いて断ったつもりであっても、JBI08 にそれが受け入れられず、依頼の場面がもう一度繰り返され、依頼の発話が続くことになる場合もあり、例50のように、JBI01 が「無理ならいいんだけど」などのような「気配り発話」をかけてくれたため、JOK01 が断りをしやすくなる場合もある。

例49 依頼側による「食い下がり」が含まれている例（【資料25】発話番号7、13）

依頼側 JBI08	発話番号	被依頼側 JYK08
「JYK08 あだ名」明日暇?。	7	
	8	明日ですか?。
うん。	9	
	10	うんー、ちょっと微妙です。

¹⁶⁾ ザトラウスキー (1993) によると、「断りを促す発話」には、「断り/断る理由に関する気配り発話」、「相づちによる気配り発話」、「接続表現による気配り発話」、「陳謝/感謝/残念な気持ちを表す発話」の4種類がある。「勧誘応答の話段」における「気配り発話」は、「断り」を促し、被勧誘者が断りやすくする発話であるという。

あ、微妙?。	11		
		12	はい。
<u>午前中も空いてない?。</u>	13		
		14	はい。
あ、そっか…。	15		
		16	はい。

例 5 0 依頼側による「気配り発話」が含まれている例（【資料 1】発話番号 1 5、1 8）

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JOK01
言語調査に関する実験に参加してはいただけないでしょうか?<軽く笑いながら>。	11	
	12	えー、へー、へ、えー=。[あまりに驚いた様子]
=しかも、韓国人と一緒に<笑いながら>。	13	
	14	えっ。
<u>無理ならいいんだけど。</u>	15	
	16	いやだ。
いやだ<笑いながら><二人で笑う>。	17	
<u>ちょっと急ですね。</u>	18	
	18	うん…、九時は多分遅刻するから,,
うん。	20	
	21	<微妙…>{<}>。

このように、両者の「コミュニケーション主体」はお互いに相手の表現に影響され、影響を与えながら、その相互作用の中である特定の言語行動を徐々に「作り上げていく」ことが実際の会話にはよくあることがわかった。

5. 4 まとめ 一日台比較を中心に—

ここでは、日本語と台湾華語における「断り談話」の「断りのストラテジー」の「出現順序」を比較し、共通点と相違点をまとめる。まず、表 2 9 に日本語と台湾華語における「最初に用いられる断りのストラテジー」の種類と割合を示す。

表 2 9 「最初に用いられる断りのストラテジー」の種類と割合の日台比較

種類	日本語 (%)	台湾華語 (%)
直接的な断り	12.8	12.8
事情説明	46.2	59.0
否定的な見解の表明	7.7	12.8
謝罪+事情説明	20.5	0.0
事情説明+直接的な断り	0.0	12.8
その他	12.9	2.6
合計	100.1	100.0

表 2 9 に示すように、日本語の「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」のうち、「直接的な断り」が 12.8%、「事情説明」が 46.2%、「否定的な見解の表明」が 7.7%、「謝罪+事情説明」が 20.5%、「事情説明+直接的な断り」が 0.0%、そして「その他」が 12.9% の割合を占めている。また、台湾華語の「断り談話」においては、「直接的な断り」が 12.8%、「事情説明」が 59.0%、「否定的な見解の表明」が 12.8%、「謝罪+事情説明」が 0.0%、「事情説明+直接的な断り」が 12.8%、「その他」が 2.6% の割合を表わしている。

以下の図 1 に、日本語と台湾華語の「断り談話」における「最初に用いられる断りのストラテジー」の傾向をまとめて示す。

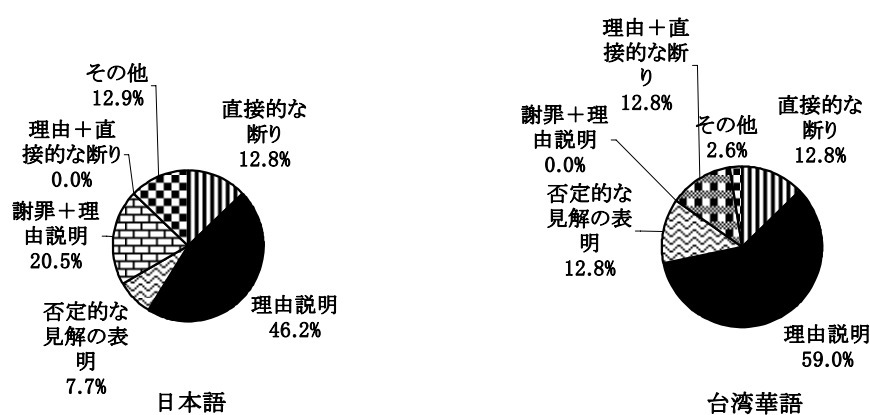


図 1 「最初に用いられる断りのストラテジー」の日台比較

図1からわかるように、「最初に用いられる断りのストラテジー」において、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともに「事情説明」をたくさん使用している。しかし、日本語の「断り談話」では、「謝罪＋事情説明」が2番目に多く使われているが、台湾華語の「断り談話」では1例も見られなかった。一方、台湾華語における「断り談話」では、「事情説明＋直接的な断り」というストラテジーが「直接的な断り」と「否定的な見解の表明」と同時に「事情説明」に次いで2番目に多く使われているが、日本語の「断り談話」には「事情説明＋直接的な断り」というストラテジーがなかった。

次に、日本語と台湾華語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」の種類と割合を示す。

表30 「最後に用いられる断りのストラテジー」の種類と割合の日台比較

種類	日本語(%)	台湾華語(%)
事情説明	5.1	17.9
代案提示	5.1	15.4
謝罪	79.5	46.2
否定的な見解の表明	0.0	7.7
謝罪＋事情説明	5.1	0.0
その他	5.2	12.8
合計	100.0	100.0

表30からわかるように、日本語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」のうち、「事情説明」が5.1%、「代案提示」が5.1%、「謝罪」が79.5%、「否定的な見解の表明」が0.0%、「謝罪＋事情説明」が5.1%、「その他」が5.2%の割合を表わしている。また、台湾華語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテジー」に関しては、「事情説明」が17.9%、「代案提示」が15.4%、「謝罪」が46.2%、「否定的な見解の表明」が7.7%、「謝罪＋事情説明」が0.0%、「その他」が12.8%の割合を占めている。

以下で、日本語と台湾華語の「断り談話」における「最後に用いられる断りのストラテ

ジー」の傾向を図2にまとめる。

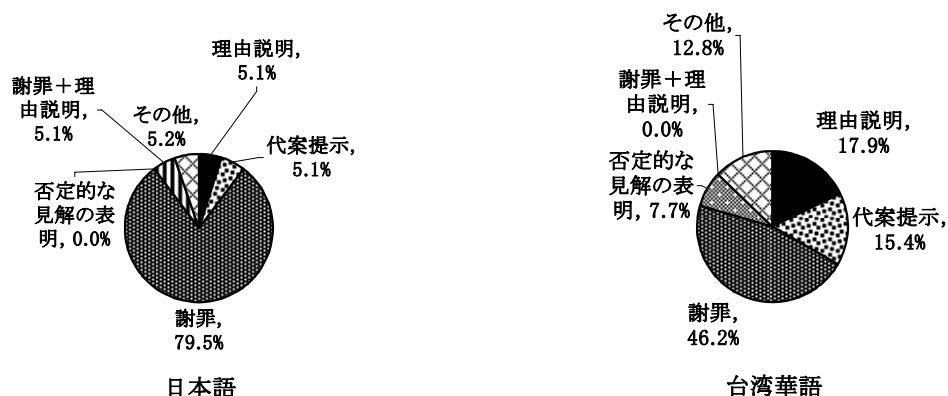


図2 「最後に用いられる断りのストラテジー」の日台比較

図2からわかるように、「最後に用いられる断りのストラテジー」に関しては、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともに「謝罪」をたくさん使用している。しかし、各ストラテジーが使用される割合を詳しく見ていくと、日本語母語話者のほうがより「謝罪」の使用に集中する傾向がある（全39の日本語の「断り談話」の約80%の割合を占める）。台湾華語の「断り談話」では、「謝罪」を使用する割合は日本語母語話者ほどない（46.2%）が、そのかわりに「代案提示」（15.4%）や「事情説明」（17.9%）などは日本語母語話者より多く使っている。また、日本語の「断り談話」に見られた「謝罪+事情説明」（5.1%）のストラテジーは台湾華語の「断り談話」にはなく、一方、台湾華語の「断り談話」に見られた「否定的な見解の表明」（7.7%）というストラテジーは、日本語の「断り談話」においてそれを最後のストラテジーとして使う例がなかった。

次に、日本語と台湾華語の「断り談話」における「断りのストラテジー」の「使用頻度」を比較し、共通点と相違点をまとめる。まず、日本語と台湾華語の「断り談話」における「断りのストラテジー」の種類と各ストラテジーの使用頻度の各言語の総使用頻度に占める割合を表31にまとめて提示する。

表 3 1 「断り談話」における「断りのストラテジー」の種類と使用割合の日台比較

「断りのストラテジー」	日本語 (%)	台湾華語 (%)
回避	3.8	1.2
直接的な断り	9.4	5.8
事情説明	19.5	36.6
代案提示	5.0	16.3
謝罪	47.2	13.4
否定的な見解の表明	3.1	14.0
条件提示	1.3	4.7
謝罪＋事情説明	6.3	0.6
謝罪＋直接的な断り	1.9	0.0
事情説明＋直接的な断り	1.9	4.7
その他の組み合わせ	0.6	2.9
合計	100.0	100.0

表 3 1 に示すように、台湾華語の「断り談話」においては、「事情説明」が一番多く使われており、その次は「代案提示」、「否定的な見解の表明」であるのに対し、日本語の「断り談話」においては、「謝罪」の使用は他のどの要素よりも多く見られ、二番目に多いのは「事情説明」であり、その次は「直接的な断り」である。「回避」、「直接的な断り」、「謝罪」、「謝罪＋事情説明」などのストラテジーに関しては、日本語母語話者は台湾華語母語話者より多用しているが、「事情説明」、「代案提示」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「事情説明＋直接的な断り」などのストラテジーに関しては、台湾華語母語話者のほうがより多く使っている。

また、4. 2. 2 「分析項目の定義」で提示されているように、この 1 1 の「断りのストラテジー」を「単独的」なものと「複合的」なものの二つのグループに分けてみると、その使用の割合は以下になる。

表 3 2 断りの「単独的」と「複合的」ストラテジーの使用割合の日台比較

ストラテジーの種類	日本語 (%)	台湾華語 (%)
単独的	89.3	91.9
複合的	10.7	8.1
合計	100.0	100.0

※表 3 1 の「回避」から「条件提示」までは「単独的」に、それ以外は「複合的」に分類されている。

以下の図 3 に、日本語と台湾華語の「断り談話」における「単独的/複合的」ストラテジーの使用傾向を示す。

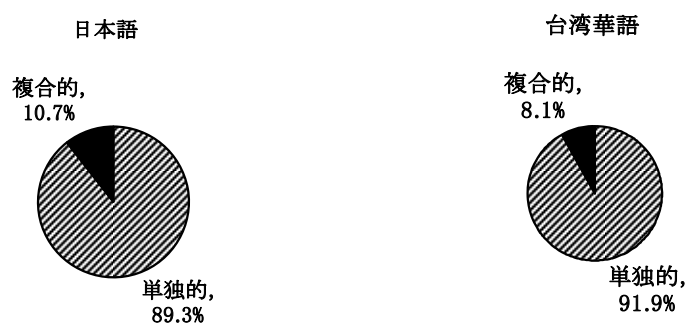


図 3 「単独的」「複合的」ストラテジーにおける使用割合の日台比較

図 3 に示すように、実際の会話での「断り談話」において、日本語と台湾華語ともに「単独的」ストラテジーの使用は「複合的」ストラテジーより圧倒的に多いことがわかる。この点に関しては、馬場・禹（1994）が提示した、「理由＋謝罪」「理由＋代案提示」などの組み合わせた形で現われたものが日中両言語において多用されている、という結果とは異なる傾向が示されている。これは、調査方法による違いだと考えられる。馬場・禹（1994）が用いたアンケート調査では、断る側は依頼側との交渉行為がなく、普段何回かに分けてとる断り行為を解答欄にいったん書くことになりやすいため、複合的な「断り談話」の構成要素が頻繁に使われる結果になると考えられる。それに対して、実際の会話における断りの言語行動は、一度の発話のやりとりで終わるのではなく、相手の反応を見ながら、相手との相互作用のなかで徐々に作り上げられていくのである。本研究で得られたこの結果は、このような実際の会話の特徴を反映しているといえるであろう。

次に、各「断り談話」における「断りのストラテジー」の使用割合を、「断り成立まで」と「断り成立後」の兩段階に分けて、表 3 3 にまとめて提示する。

表 3 3 「断り成立まで」と「断り成立後」の 2 段階における各「断りのストラテジー」の使用頻度の談話全体に占める割合の日台比較

「断りのストラテジー」	断り成立までの段階		断り成立後の段階	
	日本語 (%)	台湾華語 (%)	日本語 (%)	台湾華語 (%)
回避	100.0	100.0	0.0	0.0
直接的な断り	80.0	100.0	20.0	0.0
事情説明	83.9	90.5	16.1	9.5
代案提示	12.5	39.3	87.5	60.7
謝罪	2.7	4.3	97.3	95.7
否定的な見解の表明	80.0	75.0	20.0	25.0
条件提示	100.0	50.0	0.0	50.0
謝罪＋事情説明	80.0	100.0	20.0	0.0
謝罪＋直接的な断り	33.3	—	66.7	—
事情説明＋直接的な断り	100.0	87.5	0.0	12.5
その他の組み合わせ	100.0	60.0	0.0	40.0
合計	41.5	66.3	58.5	33.7

※台湾華語の「断り談話」には「謝罪＋直接的な断り」の使用が見られなかったため「-」に記しておく。

表 3 3 からわかるように、「【断り成立までの段階】」で使われた断りのストラテジーの割合」対「【断り成立後の段階】」で使われた断りのストラテジーの割合」について、日本語における「断り談話」の場合は約「4 割：6 割」であるのに対して、台湾華語における「断り談話」の場合は約「7 割弱：3 割強」で、使用された「断りのストラテジー」が「断り成立までの段階」に集中して現われる傾向が見られた。

このように二つの段階に分けてみると、「断り成立までの段階」において、日本語の「断り談話」の場合は、「回避」をはじめ、「直接的な断り」、「事情説明」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「事情説明＋直接的な断り」、「その他の組み合わせ」などのストラテジーは主にこの段階で使用されており、台湾華語の「断り談話」の場合も、上述したストラテジーの

うち、「条件提示」と「その他の組み合わせ」を除けば、日本語の「断り談話」に見られた使用状況とほぼ同じ特徴が見られている。また、「断り成立後の段階」において、日本語の「断り談話」と台湾華語の「断り談話」ともに「謝罪」の使用がこの段階に集中していることが目立っている。そして、「代案提示」も、「断り成立までの段階」より、「断り成立後の段階」で使われることが多いことがわかる。

以上の結果から、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともに、断りたい意思を伝える際に、主に「回避」、「直接的な断り」、「事情説明」、「否定的な見解の表明」、「謝罪＋事情説明」、「事情説明＋直接的な断り」などのストラテジーを用い、また、相手が自分の断りに了解を示してくれた後に、「謝罪」をしたり、「代案提示」をしたりすることが多いといえるであろう。

第6章 「行動展開パターン」の観点からの分析結果と考察

本章は、日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の電話会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析し、日台それぞれの「断り行動の展開パターン」を明らかにし、さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているかを考察する。

被依頼側にとって、「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」において、それぞれ異なる課題が課されている。つまり、「断り成立までの段階」においては、断りたいという意思をどのように伝えるかがポイントになり、一方、「断り成立後の段階」では、人間関係を維持するためにどのように対人配慮行動をとるかが重要な課題になると考える。

以下に、「断り談話」における「断り行動の展開パターン」の分析結果を述べる際に、「断り成立までの段階」と「断り成立後の段階」に分けて述べることにする。それぞれの段階において、まず日本語母語話者同士の全39会話と台湾華語母語話者同士の全39会話の結果を述べてから、相手との「相対的力」関係による影響をみることにする。

6. 1 「断り成立まで」の段階において

6. 1. 1 日本語母語話者調査協力者の場合

「断り成立まで」の段階における日本語母語話者である調査協力者の全39会話の結果について、事情を説明するのみで断りの成立に至った例が全体の35.9%を占めており、最も多く見られた。次に、「事情説明+謝罪」や「直接的な断り+事情説明」のパターンはそれぞれ15.4%と10.3%を占めている。その他、「直接的な断り+事情説明+謝罪」「謝罪のみ」「否定的な見解の表明のみ」などと、全部で14種類のパターンが見られた。

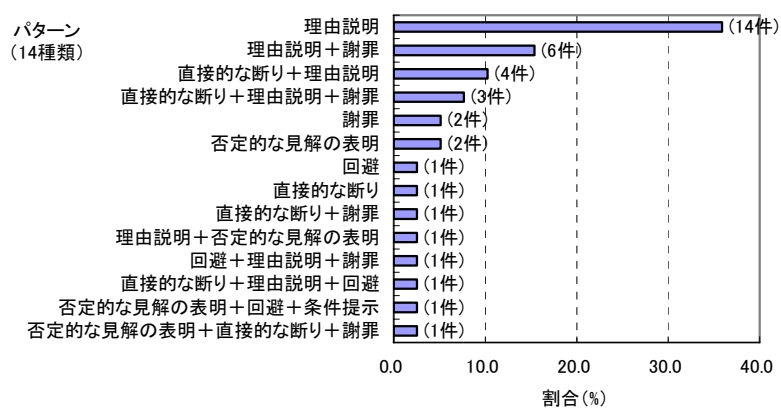


図4 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン

—日本語母語話者調査協力者の場合（全39会話）

以下に、日本語母語話者同士による「断り談話」において、「断り成立まで」の段階では使用頻度の上位三つの「断り行動のパターン」における談話例を提示する。

例5 1 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン—「事情説明」

（【資料10】発話番号20、22）

依頼側 JBI04	発話番号	被依頼側 JOK04
友達と行く予定だったんですけど,,	13	
	14	おーおーおー。
その日に急にテスト先生に入れられちゃって,,	15	
	16	おーおーおー<おー>{<}</td>
<行けなくな>{<}っちゃったんで,,	17	
	18	<あー—————>{<}</td>
<誰か代わりの人がいない>{<}かなと思って。	19	
	20	<u>金曜日ね、(はい) 私バイト入っちゃってるんだよね,,</u>
<あっ、そうですか>{<}</td>	21	
	22	<u><朝から晩まで>{<}</td> </u>
	23	うんー。

例５２ 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン―「事情説明＋謝罪」

（【資料８】発話番号１７）

依頼側 JBI03	発話番号	被依頼側 JSK03
あのね、今電話大丈夫？。	10	
	11	うん、大丈夫。
あのね、（うん）ちょっとお願いがあつて電話したんだけどね。	12	
	13	うん。
あの一、私さ「教官姓」ゼミじゃん。	14	
	15	うん。
「教官姓」ゼミの関係でね、（うん）明日ね、国立国語研究所に行く、行くはずだったんだけど、（うん）それにね、急に行けなくなっちゃってね、（うん）それでね、もし明日、の午前中に時間があったら、行っていただけませんかっという…。	16	
	17	<u>あ、ごめん、明日授業。</u>
あ、そっかー。	18	

例 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン―「直接的な断り＋事情説明」

（【資料１】発話番号１６、１８、２１、３０）

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JOK01
お願いがあつて、電話したんだけど、	1	
	2	うん。
今度の月曜日に、	3	
	4	うん。
朝の九時にね、	5	
	6	うん＝。
＝国立国語研究所に行ってね、	7	
	8	うん。
私の代わりに、	9	
	10	うん。
言語調査に関する実験に参加してはいただけないでしょうか？<軽く笑いながら>。	11	
	12	えー、へー、へ、えー＝。[あまりに驚いた様子]
＝しかも、韓国人と一緒に<笑いながら>。	13	
	14	えっ。

無理ならいいんだけど。	15		
		16	<u>いやだ。</u>
いやだ<笑いながら><二人で笑う>。	17		
ちょっと急ですよ。	18		
		18	<u>うん…、九時は多分遅刻するから、。</u>
うん。	20		
		21	<u><微妙…>{<}<。}</u>
<しかも>{<}<、ね、ボランティア、でね、	22		
		23	うん。
埼玉なんだけど電車賃も出ない、んだ。	24		
		25	埼玉なの?。
うん。	26		
電車賃も、出ないんですよ>{<}<。	27		
		28	<あ、そっか…>{<}<。}[小さい声で、何かを 考えている様子]
無理よね。	29		
		30	<u>まず間に合わない…。</u>
<笑いながら>すいません。	31		

「断り成立まで」の段階における日本語母語話者調査協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、まず、三つのグループともに、「事情説明のみ」のパターンが一番多く使われている。次に「直接的な断り」のストラテジーが含まれているパターンについて、後輩からの依頼を断る場合のグループと同級生からの依頼を断る場合のグループにはそれぞれ5例あったのに対して、「相対的力」が弱い後輩が先輩からの依頼を断る場合には、「直接的な断り+謝罪」の1例のみだった。依頼側の後輩である JYK は、「直接的な断り」を用いるよりは、相手の依頼に対してなぜ自分がその行為を実行しない、あるいはできないのかを相手にわからせる「事情説明」のパターンや「事情説明」に「謝罪」が付随するパターンの使用に集中する傾向があるようである。また、数は少ないが、比較的に間接度の高い「謝罪のみ」のパターンと「回避のみ」のパターンは、後輩からの依頼を断る場合にしか見られなかった。「謝罪」や「回避」だけで断りの成立に至ったのは、相対的力の強い先輩に対して、依頼側がねばらずに早めに依頼をやめたからだと考えられる。そして、同級生からの依頼を断る場合には、使われたパターンが多様で、特にどれかのパターンに集中する傾向は見られなかった。

表 3 4 「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—日本語母語話者調査協力者の場合（単位：件）

パターン（14 種類）	JOK	JSK	JYK	小計
事情説明	5	3	6	14
事情説明＋謝罪	0	2	4	6
直接的な断り＋事情説明	3	1	0	4
直接的な断り＋事情説明＋謝罪	1	2	0	3
否定的な見解の表明	0	2	0	2
謝罪	2	0	0	2
回避	1	0	0	1
直接的な断り	0	1	0	1
直接的な断り＋謝罪	0	0	1	1
事情説明＋否定的な見解	0	0	1	1
回避＋事情説明＋謝罪	0	0	1	1
直接的な断り＋事情説明＋回避	0	1	0	1
否定的な見解の表明＋直接的な断り＋謝罪	1	0	0	1
否定的な見解の表明＋回避＋条件提示	0	1	0	1
合計	13	13	13	39

※JOK：日本語母語話者、依頼側の学校の先輩；JSK：日本語母語話者、依頼側の同級生；

JYK：日本語母語話者、依頼側の学校の後輩

6. 1. 2 台湾華語母語話者調査協力者の場合

「断り成立まで」の段階における台湾華語母語話者調査協力者の全 39 会話の結果について、最も多い「事情説明」のみで断りが成立した会話と、二番目に多い「直接的な断り＋事情説明」で断りが成立した会話を合わせて、全会話の 48.7% を占めている。また、「事情説明＋代案提示」や「直接的な断り＋代案提示」などのような「代案提示」が含まれているパターンが 9 例もあり、「断り成立後」の段階に現れやすいと思われる「代案提示」が「断り成立まで」の段階で用いられていることは特徴的である。

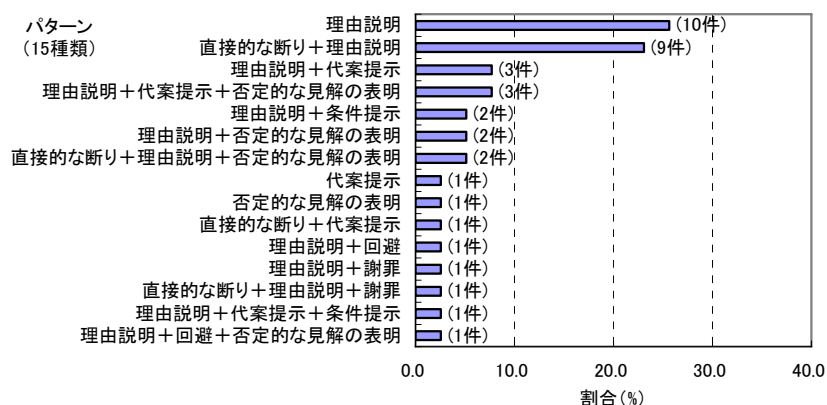


図5 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン
—台湾人調査協力者の場合（全39会話）

以下に、台湾華語母語話者同士による「断り談話」において、「断り成立まで」の段階に最も多く現われている「事情説明」と「直接的な断り+事情説明」の二つの「断り行動のパターン」の具体例を示す。

例53 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン—「事情説明」

（【資料55】発話番号12）

依頼側 TBI06	発話番号	被依頼側 TOK06
就是，我可不可以請你幫我一個忙啊，就是啊，我我明天啊，我答應我們老師明天要做一個有關語言學的實驗。 【あのね、1つお願いしてもいいかな、あのね、わ、私は明日ね、うちの先生に1つ言語学に関する実験をやるって約束してあるの。】	6	
	7	嗯。 【うん。】
嗯，然後就是明天早上9點要在中研院，可是我明天早上有事不能去。 【うーん、それからそれは明日の朝9時に中研院で、だけど私は明日の午前中用事があって行けないの。】	8	

<p><嗯，然後他是要做一個有關>{<}<。></p> <p>『<うん、それからそれは1つ〜に関する>{<}<。>』</p>	9		
	10		<p><喔，可是我，可是我明天，嗯>{>}<。></p> <p>『<ああ、でも私は、でも私は明日、うーん>{>}<。>』</p>
<p><你明天>{<}<。></p> <p>『<あなたは明日>{<}<。>』</p>	11		
	12		<p><u><我明天>{>}<早上已經有事了。></u></p> <p>『<私は明日>{>}<午前中はまだ予定が入ってるの。>』</p>
<p>喔，這樣子喔。</p> <p>『ああ、そうか。』</p>	13		

例5 4 「断り成立まで」の段階における断り行動のパターン—「直接的な断り+事情説明」

(【資料7 8】発話番号1 8)

依頼側 TBI14	発話番号	被依頼側 TSK14
<p>可不可以拜托你帮我一个忙?。</p> <p>『一つお願いしてもいい?。』</p>	9	
	10	<p>嗯，什麼什麼，什麼事?。</p> <p>『うん、なにになに、なんでしょう?。』</p>
<p>就是，嗯，我之前在課堂上的時候答應老師要去參加一個實驗，那個實驗是要跟一個男生，然後，嗯，是我的朋友然後要一起去中央研究院參加語言調查，然後要一起，男女生要一起對話。</p> <p>『あのね、うん、前に授業のときにある実験に参加するって先生に約束したけど、その実験は一人の男の子と、それから、うん、私の友達だけど、それから一緒に中央研究院に行って言語調査に参加して、それから一緒に、男女が一緒に会話するの。』</p>	11	
	12	<p>嗯。</p> <p>『うん。』</p>
<p>然後可是我明天有事所以不能去，那，你可不可以幫我去?。</p> <p>『それからでも私は明日用事があっていけなくなったから、で、あなたがわたしの代わりに行ってくれる?。』</p>	13	

		14	明天?。 【明日?。】
嗯。 【うん。】	15		
		16	喔喔喔喔。 【あああああああ。】
是早上9點開始，然後有3個小時，可是沒有沒有錢。 【朝9時から、それから3時間かかって、でも出ない、お金は出ない。】	17		
		18	<u>可是我明天有事情，可能不行耶。</u> 【でも私は明日用事があってたぶんだめなのよ。】
喔，嗯，好吧好吧。 【そっか、うん、いいよいいよ。】	19		

「断り成立まで」の段階における台湾華語母語話者調査協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、後輩からの依頼を断る場合には、「事情説明のみ」のパターンが一番多いのに対して、同級生からの依頼を断る場合と先輩からの依頼を断る場合には、「直接的な断り＋事情説明」が一番多く見られた。また、台湾華語母語話者調査協力者のどのグループも、現われたパターンのバリエーションが多い。「直接的な断り」や「代案提示」などの使用に目立った特徴は見られなかったが、以下の二点に注目してほしい。

1. 「直接的な断りのみ」のパターンは現われていないが、「直接的な断り」が含まれているパターンの使用には、特に「相対的力」関係による影響は見られず、ほぼ同じ頻度で使われている。
2. 一つの例しかないが、後輩からの依頼を断る場合の「代案提示のみ」のパターンは、断ることへの事情説明も依頼内容に対する否定的な見解の表明もなく、「先にほかの人を探してみたら？」と消極的な代案を提示して断った例があった。これは、学校の先輩だからとはいえ、親しい友人同士の会話にはめずらしいと思われる。

表 3 5 「断り成立まで」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン—台湾華語母語話者調査協力者の場合（単位：件）

パターン（15 種類）	TOK	TSK	TYK	小計
事情説明	6	2	2	10
直接的な断り＋事情説明	1	4	4	9
事情説明＋代案提示	1	1	1	3
事情説明＋代案提示＋否定的な見解の表明	1	2	0	3
事情説明＋否定的な見解の表明	0	0	2	2
事情説明＋条件提示	0	1	1	2
直接的な断り＋事情説明＋否定的な見解の表明	2	0	0	2
代案提示	1	0	0	1
否定的な見解の表明	0	1	0	1
直接的な断り＋代案提示	1	0	0	1
事情説明＋回避	0	0	1	1
事情説明＋謝罪	0	1	0	1
直接的な断り＋事情説明＋謝罪	0	1	0	1
事情説明＋回避＋否定的な見解の表明	0	0	1	1
事情説明＋代案提示＋条件提示	0	0	1	1
合計	13	13	13	39

※TOK：台湾華語母語話者、依頼側の学校の先輩；TSK：台湾華語母語話者、依頼側の同級生；

TYK：台湾華語母語話者、依頼側の学校の後輩

6. 2 「断り成立後」の段階において

6. 2. 1 日本語母語話者調査協力者の場合

「断り成立後」の段階における日本語母語話者調査協力者の全 39 会話における結果について、断った後に謝罪を 2 回以上した例が全体の 43.6%を占めており、他のどのパ

Age Group	Percentage
18-24	10%
25-34	20%
35-44	25%
45-54	20%
55-64	15%
65-74	10%
75-84	5%
85+	5%

	43	あ、いえ、 <u>くすいません、なんか</u> >{<}。
<無理な願いをして>{<}すいません。	44	
	45	え、大丈夫ですか？。
あ、大丈夫です。	46	
ごめんなさい。	47	
	48	いいえ、 <u>すいません</u> <笑いながら>。
<いきなり電話してごめんなさい>{<}。	49	
	50	<<笑い>>{<}。
	51	大丈夫です。
はい、じゃ、<じゃ、また>{<}。	52	
	53	<u><すいません、なんか>{<}。</u>
	54	はい。

「断り成立後」の段階における日本語母語話者調査協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、後輩からの依頼を断る場合、同級生からの依頼を断る場合、先輩からの依頼を断る場合の三つのグループともに、「謝罪2回以上」のパターンが最も多く見られた。それは、**例43**のようなやりとりがあるからと考えられる。頼まれたのに断ってしまった場合、謝罪表現で申し訳ない気持ちを表し、一方、依頼側も相手に困らせた、断らせてしまったことへの謝罪表現をたくさん使っている。

註解 [SH2]: 番号確認

「代案提示」の使用について、先輩からの依頼を断る場合では、「代案提示」「代案提示+謝罪」「代案提示+謝罪2回以上」のいずれも使われていないという結果が見られた。それは、後輩である自分が先輩に代案を提示する立場にない、余計な事をしかねないことを自覚しているからかもしれない。

表 3 6 「断り成立後」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた

断り行動のパターン—日本語母語話者調査協力者の場合

パターン	JOK	JSK	JYK	小計
謝罪 2 回以上	5	6	6	17
謝罪	1	2	4	7
事情説明＋謝罪 2 回以上	2	0	2	4
代案提示＋謝罪 2 回以上	1	2	0	3
代案提示	2	0	0	2
提示された戦略のどれも現われていない	1	1	0	2
その他	1	2	1	4
合計	13	13	13	39

「提示された戦略のどれも現われていない」パターンの 2 例（【資料 2 9】【資料 3 6】）は、「謝罪」や「代案提示」といった戦略ではなく「誰か代わりを探してるの?」「大丈夫?」「がんばって」などの「情報提供求め」やほかの好意を示す表現を用いて、相手の事情への理解・関心を示すことによって依頼側との人間関係を維持しようとしている。

例 5 6 「断り成立後」の段階における断り行動のパターン—「提示された戦略のどれも現われていない」（【資料 3 6】）

依頼側 JBI12	発話番号	被依頼側 JSK12
	15	=私明日さ、ジムのコーチで練習に行かなきゃいけない<んだよね、9時から>{<}
<あ、そうなんだ>{<}	16	
えっ?,,	17	
	18	うん…。
あ、9時から?。	19	
	20	そうそう、<午前中なんだ>{<}
<あそっかー>{<}	21	
わかったー。	22	
	23	<u>えっ、誰か代わりを探してるの?。</u>
そう、代わり探してるの。	24	
でも、うん、いいよ。	25	

	26	えっ?<笑い>。
<笑い><大丈夫><{}>。	27	
	28	<大丈夫なの?><{}>。
うん、何とかする。	29	
	30	あ、ほんとに?。
うん、<ごめんね><{}>。	31	
	32	<えー、がんばって><{}>。
<うん、ありがとう><{}>。	33	

例 5 7 【資料 4】

先輩である JOK02 が依頼を断ったあとに、何かいい方法はないかと悩んでいるところ…

依頼側 JBI02	発話番号	被依頼側 JOK02
	80	うん…、なんか、どうしよう?。
/沈黙 3 秒/あ、いえ、あの、でも、はい、そんな、大、大丈夫です<2 人で笑う>。	81	
	82	いやでも、うん…、 <u>ほんとにごめんね</u> 。
あ、いえ、 <u>ほんとこちらこそ突然すいません</u> <笑いながら>。	83	
	84	いやいやいや。
うん。	85	
	86	うん、 <u>なんか、あまり力になれなくて</u> 。
=あ、いえ、そんな、そんな気にしないでください。	87	
あ、はい、じゃ、 <u>ほんと突然すいませんでした</u> <{}>。	88	

6. 2. 2 台湾華語母語話者調査協力者の場合

「断り成立後」の段階における台湾華語母語話者調査協力者の全 39 会話における結果について、「謝罪 1 回」と「本研究で提示されたストラテジーのどれも現われていない」の二つのパターンが最も多く、それぞれ全体の 30.8% を占めている。そして、「代案提示のみ」のパターンも 5 例見られた。ほかには、「事情説明のみ」や「否定的な見解の表明のみ」など、全部で 13 種類のパターンが見られた。

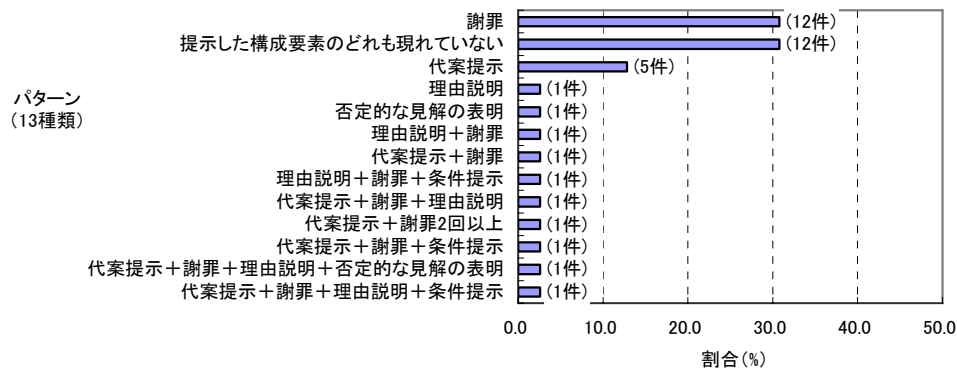


図7 「断り成立後」の段階における断り行動のパターン

—台湾華語母語話者調査協力者の全39会話

以下に、「断り成立後」の段階において、台湾華語母語話者が最もよく用いる「謝罪」と「提示されたストラテジーのどれも現われていない」の二つの断り行動のパターンに該当する談話例を提示する。

例58 「断り成立後」の段階における断り行動のパターン—「謝罪」

【資料64】発話番号9)

依頼側 TBI09	発話番号	被依頼側 TSK09
明天不行喔? 【明日だめなの?。】	6	
	7	hei4(“對”的台語), 我要去我媽店裡幫忙。 【ええ(台湾語で)、うちのお母さんのお店に行って手伝うの。】
喔, 好。 【そっか、わかった。】	8	
	9	<u>嗯, 好, 不好意思。</u> 【うん、ええ、すみません。】
好, 沒關係。 【うん、大丈夫。】	10	

例 5 9 「断り成立後」の段階における断り行動のパターン—「提示されたストラテジーのどれも現われていない」(【資料 5 5】)

依頼側 TBI06	発話番号	被依頼側 TOK06
	12	<我明天>{>} 早上已經有事了。 【<私は明日>{>} 午前中はもう予定が入ってるの。】
喔，這樣子喔。 【ああ、そうか。】	13	
	14	嗯嗯。 【うんうん。】
嗯嗯，喔，好，好，沒關係，那我再拜託別人，嗯。 【うんうん、ああ、うん、うん、大丈夫、じゃまた他の人をお願いするから、うん。】	15	
	16	喔，好，好。 【ああ、うん、うん。】
好，謝謝，掰掰。 【うん、ありがとう、バイバイ。】	17	
	18	好，不會，掰掰。 【うん、いいえ、バイバイ。】

例 6 0 「断り成立後」の段階における断り行動のパターン—「提示されたストラテジーのどれも現われていない」(【資料 6 0】)

依頼側 TBI08	発話番号	被依頼側 TOK08
	20	對，我明天，我明天坐早上的車回去。 【そう、わたしは明日、明日朝の列車で帰る。】
ei4，你要坐多早的車啊？。 【ええ、どのくらい早い列車に乗るの？。】	21	
	22	嗯，我我到也大概已經 11 點了吧。 【うーん、わ、わたしが着いたらたぶんもう 11 時でしょう。】
喔，<那>{<}。 【ああ、<じゃ>{<}。】	23	
	24	<我我>{>} 坐飛機回去的。 【<わ、わたしは>{>} 飛行機で帰るの。】

<p>喔，好，我了解，那就是 DAME(日文的“不行”)，好，就是不行。</p> <p>『ああ、うん、分かった、それじゃだめ(日本語で) ってことね、うん、だめってこと。』</p>	25	
	26	<p><嗯>{<}。</p> <p>『<うん>{<}。』</p>
<p><好，>{>} 沒關係，我再問別人，謝謝。</p> <p>『<うん、>{>}大丈夫、また他の人に聞いてみるね、ありがとう。』</p>	27	
	28	<p>怎麼了，怎麼了？。</p> <p>『どうしたの?、どうしたの?。』</p>
<p>沒有啊，因為，就是啊原本有一項，就是要去中研院做一項實驗，然後那項(嗯)實驗是說，他想要錄一男一女的對話內容。</p> <p>『いや、何故なら、あのね、もともと一つ、つまり中研院に行って一つの実験をやるけど、それからあの(うん)実験は、男女一人ずつの会話の内容を録音したいというやつ。』</p>	29	
	30	<p>喔喔喔。</p> <p>『ああ、ああ、ああ。』</p>
<p>對。</p> <p>『そう。』</p>	31	
	32	<p>嗯。</p> <p>『うん。』</p>
<p>然後結果我現在有事嘛，然後我本來想說，那他因為要一男一女，那我就想說如果我來得及我就找一個女生，去代替我。</p> <p>『それで、結局私は今用事があるのよ、それで元々、じゃそれは男女一人ずつ必要だから、じゃ私がもし間に合うなら一人の女の子を探して、私の代わりにだと思って。』</p>	33	
	34	<p>嗯，嗯。</p> <p>『うん、うん。』</p>
<p>對，對。</p> <p>『そう、そう。』</p>	35	
<p>嗯，可是<他是>{<}。</p> <p>『うーん、だけど、<それは>{<}。』</p>	36	
	37	<p><嗯>{>}。</p> <p>『<うん>{>}。』</p>
<p>對，明天早上，這樣子。</p> <p>『そう、明日の朝、ってわけ。』</p>	38	

	39	好，那，既然如此，我可以麻煩你一件事情嗎？ 『よし、じゃ、それなら、私から一つお願いしてもいい？。』
--	----	---

「断り成立後」の段階において「提示された戦略のどれも現われていない」行動パターンに該当する上記の二つの例を詳しく見ることにする。まず【資料55】では、被依頼側が「すでに用事が入っている」ことを依頼側に告げたら、依頼側が相手の断りへ了解を示し、食い下がって依頼してみることをせず、「大丈夫、またほかの人に頼んでみる」と自ら淡々と会話を終わらせようとする。その間に、被依頼側は相手の依頼を断ってしまったことに対して、特にフォローになるような行動はとらなかった。また【資料60】では、依頼側が「明日の朝空いてない？」と「依頼受諾の見込みの確認」から依頼の用件を切り出し、それに対して被依頼側は都合がつかないと断りを表明し、それを受けた依頼側は続けて依頼することをあきらめた。ただし、まだ依頼の用件を聞いていない被依頼側はいったいどういうことかと気になって、「どうしたの？どうしたの？」と依頼側に依頼の用件に関する「情報提供求め」をした。これは相手への関心を示す行動と考えられるが、その具体的な「情報」を知ったあとには特にフォローをせず、今までの流れとまったく関係のない話題に転換してしまった。

「断り成立後」の段階における台湾華語母語話者調査協力者の相手との「相対的力」関係別にみた結果について、後輩からの依頼を断る場合と先輩からの依頼を断る場合ともに、「謝罪1回」と「提示された構成要素のどれも現われていない」の二つのパターンの使用頻度を合わせて、全体の77%を占めており、圧倒的に多かった。それに対して、同級生からの依頼を断る場合では、「謝罪1回」と「代案提示のみ」の使用が他のパターンより若干多いが、全体的にパターンのバリエーションが非常に多い。しかも、後輩からの依頼を断る場合と先輩からの依頼を断る場合に比べて、本研究で提示された「断りの戦略」のどれも使わないよりは、「代案」や「条件」を提示して会話を終わらせる特徴が見られた。

表 3 7 「断り成立後」の段階における相手との「相対的力」関係別にみた断り行動のパターン

—台湾華語母語話者調査協力者の場合（単位：件）

パターン	TOK	TSK	TYK	小計
謝罪	4	3	5	12
提示されたストラテジーのどれも現われていない	6	1	5	12
代案提示	1	3	1	5
その他	2	6	2	10
合計	13	13	13	39

※TOK：台湾華語母語話者、依頼側の学校の先輩；TSK：台湾華語母語話者、依頼側の同級生；

TYK：台湾華語母語話者、依頼側の学校の後輩

6. 3 まとめ 一日台比較を中心に

使用頻度上位三つのパターンを表 3 8 にまとめてみると、日本語母語話者調査協力者も台湾華語母語話者調査協力者も、「事情説明」のパターンを最も多く使っていることがわかった。この結果から、日本語母語話者と台湾華語母語話者にとって、この「事情を説明する」パターンは「断りたい意思を伝える」のに効果的だといえる。

日本語母語話者同士の会話に二番目に多い「事情説明＋謝罪」のパターンに関しては、台湾華語母語話者同士の会話には 1 例しか見られなかった。また、この段階において「謝罪」が含まれている会話に関しては、日本語母語話者同士の会話には 1 4 例あったが、台湾華語母語話者同士の会話には 2 例しかなかった。

台湾華語母語話者同士の会話に三番目に多い「事情説明＋代案提示」「事情説明＋代案提示＋否定的な見解の表明」の二つのパターンは日本語母語話者同士の会話には見られなかった。そして台湾華語母語話者同士の会話にはこの二つのパターン以外にも「代案提示」が含まれているパターンがいくつかあったが、日本語母語話者同士の会話には、「断り成立まで」の段階における「代案提示」の使用は今回の調査ではまったく見られなかった。

表 3 8 「断り成立まで」の段階における全 39 会話の断り行動パターンの日台比較

順位	日本語母語話者調査協力者 (39 会話)	台湾華語母語話者調査協力者 (39 会話)
1	「事情説明」 (14 件 ; 35. 9%)	「事情説明」 (10 件 ; 25. 6%)
2	「事情説明＋謝罪」 (6 件 ; 15. 4%)	「直接的な断り＋事情説明」 (9 件 ; 23. 1%)
3	「直接的な断り＋事情説明」 (4 件 ; 10. 3%)	「事情説明＋代案提示」 「事情説明＋代案提示＋否定的な見解の表明」 (3 件 ; 7. 7%)

「断り成立後」の段階において使用頻度上位三つのパターンを表 3 8 にまとめてみると、日本語母語話者同士の会話では「謝罪 2 回以上」のパターンが最もよく使われているが、台湾華語母語話者同士の会話にはそれが 1 例も見られず、「謝罪 1 回」と「提示されたストラテジーのどれも現われていない」のパターンが圧倒的に多かった。一方、台湾華語母語話者同士の会話に多かった「提示されたストラテジーのどれも現われていない」のパターンは、日本語母語話者同士の会話には 2 例のみだった。また、「謝罪」について、断りの意思を表明したあとに、相手との人間関係を維持するためによく使われると言われており、日本語母語話者同士の会話には多く使われているが、台湾華語母語話者同士の会話にはこの段階において「謝罪」が一回も使われていない例が 19 もあり、全体の 48. 7% を占めている。そして、「代案提示」が含まれているパターンについて、台湾華語母語話者調査協力者による使用の頻度は日本語母語話者調査協力者のほぼ二倍であり、より積極的に相手の事情に配慮を示し、代案を提示しているようである。

表 3 9 「断り成立後」の段階における全 3 9 会話の断り行動パターンの日台比較

順位	日本語母語話者調査協力者 (39 会話)	台湾華語母語話者調査協力者 (39 会話)
1	「謝罪 2 回以上」 (17 件 ; 43. 6%)	「謝罪」 「提示されたストラテジーのどれも現われていない」 (12 件 ; 30. 8%)
2	「謝罪」 (7 件 ; 17. 9%)	—
3	「事情説明 + 謝罪 2 回以上」 (4 件 ; 10. 3%)	「代案提示」 (5 件 ; 12. 8%)

第7章 「コミュニケーションにおける相互行為」の観点からの

分析結果と考察

「依頼」は自分の利益になることを相手にしてもらう行為であり、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論によれば、相手の邪魔されたくないという欲求であるネガティブ・フェイスを脅かす行為であるとされている。一方、「断り」は相手の利益になることを否定する行為になるため、その行動自体が相手の心情を害し、人間関係の維持に支障をきたしてしまう危険性を伴う。したがって、依頼側と断る側ともに、自分の意図を表明しながら、相手に不快な思いをさせない配慮が必要である。

本章では、それぞれ日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士による、「依頼」とそれに対する「断り」とを含む実際の電話会話を資料に、依頼側と被依頼側とのやりとりを相互関係と捉え、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証する。

ここでは、「コミュニケーションにおける相互行為」の観点からの分析にあたり、「依頼行為成立」を分析の項目に加えて、以下のように定義する。

本研究でいう「依頼行為成立」とは、依頼側の表現意図が被依頼側に伝わったことを指す。すなわち、あることをしてほしいという依頼側の意図が被依頼側に伝わり、それに対する被依頼側の「反応発話」³が現れたら、その会話において依頼行為が成立したと見なす。

一方、4. 2. 2「分析項目の定義」にもあったように、「断り目的達成」とは、依頼側が被依頼側の断りたい意思を認め、もうこれ以上依頼を継続しないことを指す。すなわち、依頼側の「断りへの了解を示す発話」が現われたら、その会話において断りの目的が達成されたこととする。

本章では、「依頼・断り」のコミュニケーションにおける依頼側と被依頼側の相互関係を明らかにするにあたって、検証資料を、①会話開始から「依頼行為成立」まで、②「依頼行為成立」から「断り目的達成」まで、③「断り目的達成」から会話終了までの三段階に分けて分析を行う。

7. 1 会話開始から「依頼行為成立」までの段階において

この段階において、日本語母語話者同士の会話では、ほぼすべての会話において、依頼側による「今は大丈夫？」などの「依頼可能性の確認」（例えば例6 1の発話番号4、例6 2の発話番号4）か「ちょっとお願いがあつて電話したんだけど」などの「前置き」（例えば例6 1の発話番号6）、もしくはその両方が「事情説明」や「依頼発話」に先行して現われることが観察できた。

例6 1 【資料3 3】

①「依頼可能性の確認」→②[返答]→③「前置き」→④[事情説明求め]

依頼側 JBI11	発話番号	被依頼側 JSK11
	1	はい。
あ、もしもし。	2	
	3	うん。
①あ、今大丈夫？。	4	
	5	②うん、大丈夫だよ。
③あの、ちょっとお願いがあつて<軽い笑い>。	6	
	7	④うん、なにになに？。

例6 2 【資料1 4】

①「依頼可能性の確認」→②③<交渉>→④[返答]

依頼側 JBI05	発話番号	被依頼側 JSK05
	1	もしもし
あ、もしもし、「JSK05 名」？	2	
	3	うん、はいはい
①あの、今時間大丈夫？	4	
	5	②うんうん、なんか、うん、そんなに長くなければ
あ、ほんと？	6	
③うんうん、多分5分くらい<軽い笑い>なんだけど	7	
	8	④あー、うんうん、大丈夫大丈夫

しかしながら、台湾華語母語話者同士の会話では、「今時間大丈夫？」のような依頼側による依頼可能性を確認する発話はほとんど見られず、むしろ互いに名乗った後に、電話を受ける被依頼側から事情を聞くことにより、電話をかける依頼側の依頼の用件が自然と引き出される会話がたくさん見られた（例えば例63）。

例63 【資料53】

①「名乗る」→②「用件を聞く」→③「依頼受諾見込みの確認」→④「見込みあり」＋「事情説明求め」→⑤「事情説明」

依頼側 TBI05	発話番号	被依頼側 TSK05
	1	喂?。 【もしもし?。】
喂, 「TSK05 名」 喔。 【もしもし, 「TSK05 名」 ね。】	2	
	3	嗯。 【うん。】
①我是「TBI05 名」。 【「TBI05 名」 だけど。】	4	
	5	② <u>嗯, 怎麼了?。</u> 【うん, どうしたの?。】
③ <u>你明天早上有沒有空?。</u> 【明日の朝空いてる?。】	6	
	7	④ <u>明天早上可以啊, 怎麼了?。</u> 【明日の朝大丈夫よ, どうしたの?。】
⑤ <u>喔, 真的喔?、可是, 就是, 就是啊,</u> <u>我那個明天早上就是有答應就是要幫, 就</u> <u>是參加一堂課啊, 就是要到一個, 到中研</u> <u>院去做一個實驗。</u> 【ああ, 本当に?、でも, あの一、あのね、あの明日の朝参加するって約束したのね、授業の関係で、中研院に行って実験を受けるの。】	8	

7. 2 「依頼行為成立」から「断り目的達成」までの段階において

依頼側の表現意図が被依頼側に伝わった後のこの段階では、被依頼側が何を配慮して、そして断る意図をどのように伝えるか、依頼側がそれをどのように理解して断りを成立させるかが重要な課題である。

例64のように「反応発話」として「相手の依頼を断ることに対するお詫び+動かせない用事があることの説明」（発話番号23）や、例65のように「相手の依頼を断る事情の説明」（発話番号6）が現れたら、依頼側はすぐに了解を示してくれて、この段階のやりとりが短くなる場合が多い。

一方、依頼を断らなければならない決定的な事情がない場合、被依頼側は「情報要求」（例えば例66発話番号24、28）をし、相手の依頼に関心を示しつつ得られた情報を断る理由に使うことや、例67と例68のように情報を繰り返し確認したり、言いよんだり、依頼内容について否定的な判断や意見を述べたりするなどの行動を見せた。

その他、依頼側は被依頼側に「気配り発話」をかけたり、依頼内容に関するマイナスの情報提供をしたりし、相手が断ることができるように逃げ道を残しておく配慮行動も観察できた（例えば例69）。

例64 【資料6】

①[お詫び+事情説明]→②「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI02	発話番号		被依頼側 JYK02
明日の9時朝9時からなんだけど	20		
		21	はい
私の友達と「JYK02 あだ名」で…<行ってもらいたい…>{<}	22		
		23	①<ごめんなさい、私明日>{>}バイトなんですよ
②あ、そうなんだ	24		

例65 【資料47】

①「断る理由の説明」→②「断りへの了解を示す発話」

依頼側 TBI03	発話番号	被依頼側 TSK03
你可以幫我去中研院做一個類似像普心的那種實驗嗎?。 【わたしの代わりに中研院に行って普通心理学のような実験を受けてきてもらえない?。】	5	
	6	①我明天早上7點半就要去宜蘭了耶。 【わたしは明日朝7時半に宜蘭に行くんだけど。】
喔，是喔。 【ああ、そうか。】	7	
	8	對啊。 【そうよ。】
②喔，好吧，〈那我再找別人好了〉{<}。 【ああ、いいよ、〈じゃ、また他の人に聞いてみよう〉{<}。】	9	

例66 【資料13】

①「情報要求」→②「情報要求」→③「事情説明」→④「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI05	発話番号	被依頼側 JOK05
	21	<ほんと?>{>}。
	22	あ、ほんと?。
うん。	23	
	24	①何時なのかな?。
朝の、9時から,,	25	
	26	うん。
12時、まで。	27	
	28	②えっと、いつ、いつ?。
明日…。	29	
	30	明日?。
	31	③あ、あ、明日はね、バイトがあるんだー。
④あ、そっかそっか。	32	

例 6 7 【資料 2】

①②[情報確認]→③[言いよどみ]→④[否定的な見解表明]→⑤[言いよどみ]→⑥「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JSK01
	20	① <u>につ、9時に着いてなきゃいけないの?。</u>
9時から3時間ぐらい。	21	
しかもボランティアなんですけど。	22	
	23	② <u>交通費も?。</u>
出ません、くー。[申し訳ない様子]	24	
	25	<笑いがしばらく続く>。
無理ならよろしいのよ。<二人で笑う>	26	
	27	③ <u>うん…。</u>
うん…。[相手の発話の真似]	28	
	29	④ <u>ちょっときついなー。</u>
ちょっときついなー。[またまた相手の真似]	30	
	31	⑤ <u>うん…。</u>
⑤ <u>分かりました。</u>	32	

例 6 8 【資料 4 8】

①[否定的な見解の表明]→②[曖昧な返答]→③[情報要求]→④[否定的な見解の表明]→⑤[言いよどみ]→⑥[言い訳]→⑦「断りへの了解を示す発話」

依頼側 TBI03	発話番号	被依頼側 TYK03
要去中研院那邊。 【中研院に行くけど。】	8	
	9	① <u>中研院好遠喔<笑>。[聲音超大，頗為激動]</u> 【中研院遠いよ<笑い>。[声が非常に大きい、興奮気味]】
喔…。 【ああ…。】	10	
	11	② <u>我不知道耶，有，可能有空吧。</u> 【わからないんだ、ある、暇があるかもしれない。】
	12	③ <u><怎樣?><?>。</u> 【<なにが?><?>。】
<9點><?>到，要3個小時。 【<9時に><?>着いて、3時間かかる。】	13	

	14	④ <u>喔喔，好久喔。</u> 【おおー、長いね。】
	15	⑤ <u>喔喔啊啊啊<笑>。</u> 〔甚是激動〕 【おおー、ああー<笑い>。〔かなり興奮〕】
	16	⑥ <u>eil…，因為我明天早上有可能會被抓去打球吧，對。</u> 【えーと、明日の朝もしかしたら（バスケット）ボールの練習に呼ばれるかもしれないから、そう。】
⑦OK，好那我再找別人好了，<沒關係><{}>。 【オッケー、いいよ、じゃまた他の人を探してみよう、<大丈夫><{}>。】	17	

例 6 9 【資料 1】

①「気配り発話」→②[直接的な断り]→③「マイナス情報提供」→④[言い訳]

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JOK01
①無理ならいいんだけど。	15	
	16	② <u>いやだ。</u>
いやだ<笑いながら><二人で笑う>。	17	
③ <u>ちょっと急ですよ。</u>	18	
	18	④ <u>うん…、九時は多分遅刻するから、</u>
うん。	20	
	21	<微妙…><{}>。

7. 3 「断り目的達成」から会話終了までの段階において

依頼側が被依頼側の断りに了解を示したすぐあとのこの段階においては、人間関係維持のため、依頼側と被依頼側はどのような対人配慮行動をとるかが重要な課題となる。

頼まれたのに断らなければならないときには、「すみません、お役に立てなくて」などのお詫び表現で申し訳ない気持ちを表明することが最も多い（例えば例 6 0 の被依頼側である JOK02 がとった行動）。一方、頼んで断られた側も、相手に困らせた、断らせてしまったことへのお詫び表現をたくさん使っている（例えば例 6 0 の依頼側である JBI02 がとった行動）。こうして、日本語母語話者同士の会話には、断りによって生じた気まずさを緩和す

るために例70のような依頼側と被依頼側が詫び合っている例が非常に多かった。一方、台湾華語母語話者同士の会話では、依頼側が謝罪する例も、依頼側と被依頼側双方が詫び合っている例も見られず、例71のように、依頼側は相手が話を聞いてくれたことに対する感謝の意を述べたり、被依頼側は相手の依頼に応じてあげられなかったことに対してお詫びをしたりすることが多かった。

また、『語科名』科のメーリングリストに回そうか」や「そうだね…、なんか「JBI05名」の知り合いじゃなくて、私の知り合いみたいな人で、聞いてみようか」などと代案が可能な場合には、それを提案することがより心地良いコミュニケーションにつながると考えられる。実際にはこの段階において、「代案提示」は日本語と台湾華語の両方の会話で用いられているが、使用頻度に関しては台湾華語母語話者調査協力者は日本語母語話者調査協力者のほぼ二倍であり、台湾人の方がより積極的に相手の事情に配慮を示し、代案を提示しているようである。

例70 【資料4】

先輩である JOK02 が依頼を断った後、何か良い方法ないかと悩んでいるところ・・・

JOK02 うん…、なんか、どうしよう？。

JBI02 /沈黙 3秒/あ、いえ、あの、でも、はい、そんな、大、大丈夫です<2人で笑う>。

JOK02 いやでも、うん…、ほんとにごめんね。

JBI02 あ、いえ、ほんと こちらこそ突然すいません<笑いながら>。

JOK02 いやいやいや。

JBI02 うん。

JOK02 うん、なんか、あまり力になれなくて=。

JBI02 =あ、いえ、そんな、そんな気にしないでください。

JBI02 あ、はい、じゃ、ほんと突然すいませんでした。

例 7 1 【資料 7 4】

TBI12 が後輩 TYK12 の断りに理解を示すところからのやりとり

TBI12 對, 好, 沒有關係, 我再找別人, 噯。(うん、大丈夫。また他の人に頼んでみる、うん。)

TYK12 好, 好。(ええ、ええ。)

TBI12 噯, ~~謝謝~~ 噯。(うん、ありがとう、うん。)

TYK12 不好意思喔。(すみませんね。)

TBI12 噯, 不會。(うん、いいえ。)

7. 4 まとめ 一日台比較を中心に—

会話開始から「依頼行為成立」までの段階において、日本語母語話者同士の会話と台湾華語母語話者同士の会話ともに、一部の会話には、「事情説明」や「依頼表現」に先行して「(依頼受諾) 見込みの確認」が用いられている(日: 30.8%; 台: 25.6%)。「見込みの確認」とは、依頼に踏み切る前に相手が依頼を引き受けてくれる可能性や相手が依頼を実行する支障の有無を確認する発話である。本調査の依頼内容に合わせてみると、「明日の午前中って用事ある?」「言語調査とかって興味ある?」などの依頼側の発話がそれにあたるものである。

このような「見込みの確認」に対して、「見込みあり」(例えば例 7 2、例 7 3)「見込みなし」(例えば例 7 3)「保留」(例えば例 7 4)の3通りの返答が観察できた。例 7 2 と例 7 3 は、返答のすぐあとに被依頼側が自ら用件を聞くことにより依頼側に関心を示しているが、一方例 7 3 でも、被依頼側が用件を聞く姿勢を見せているが、依頼の成立に向けて積極的に働きかけるというよりは、相手に対する補償的な配慮行動であると考えられる。

例 7 2 【資料 9】

①「見込みの確認」→②[見込みあり]→③[用件を推測する]

依頼側 JBI03	発話番号	被依頼側 JYK03
①明日ってさ、午前中（はい）ってなにか、ある?。	24	
	25	②/沈黙 2 秒/ないですけど。[声が小さくなる]
	26	③明日バイトですか?。
バイトか…。	27	
	28	いや、バイトの、をく代わってほしいとか?><。[→]
<あっ、あっ><{}。	29	
うん。	30	

例 7 3 【資料 2 2】

①「見込みの確認」→②[見込みなし]→③[用件を聞く]→④「再度見込みの確認」→⑤[見込みなし]→⑥[再度用件を聞く]

依頼側 JBI08	発話番号	被依頼側 JOK08
①あの一、（あん）明日って先輩暇ですか?。	6	
	7	②明日はバイトー。[大きな声で]
あー。	8	
	9	③なんかあるの?。
④そう、あの一、あのですね、9 時からとかってもうもう、もうバイトですか?。	10	
	11	⑤バイト、7 時からバイト。
<笑いながら>7 時?。	12	
早い<ですね><{}。	13	
	14	<うん><{}、うん、<早いんだよ、朝><{}。
<あーあー><{}、<そうですか><{}。	15	
	16	<えっ、なに?><{}。

例 7 4 【資料 2 9】

①「見込みの確認」→②③<曖昧な返答が続き>→④[返答保留]

依頼側 JBI10	発話番号	被依頼側 JOK10
①「JOK10 名」さん明日の午前中暇ですか?。	12	
	13	②明日の午前中…は空いてるかも。
あ、ほんと?。	14	
	15	③明日の午前中?。
うん。	16	
	17	④うん、微妙だな。
あ、微妙。	18	

次に、依頼の中心部となる「事情説明」と「依頼発話」について述べる。分析の結果、「事情説明→依頼発話」（例えば例 7 5、例 7 8）「事情説明のみ」（例えば例 7 6）「依頼発話のみ」（例えば例 7 7）の 3 種類の現われ方が見られた。「事情説明→依頼発話」と「事情説明のみ」はほぼ同じ頻度で使われているが、詳しく見ると、「事情説明」の後ろにくる「依頼発話」には、「～してもらえますか／～してくれませんか」（台湾華語母語話者同士の会話の場合は、「能不能請你幫我～／能不能拜託你～」）のような、依頼を表す典型的な言語形式のみが含まれているものはほとんどなかった。その代わりに使われたのは、「お願いしたいな／行ってもらえないかなと思ったんだけど」（台湾華語母語話者同士の会話の場合は、「我想說問問看你能不能幫我去（代わりに行ってもらえないか聞こうと思って）／我想拜託你幫我去耶, 好不好?（わたしの代わりに行ってもらいたいんだけど、いいかな?）」）といった、「依頼を表す典型的な言語形式」プラス「～と思って／～たいんだけど」などの「意思・希望表明」の発話が多かった。また、「依頼発話のみ」の会話は日本語と台湾華語それぞれ 3 例と 1 例見られたが、どれも依頼発話のすぐあとに、被依頼側が突然の依頼に唐突感を覚え、驚いた反応が返ってきた。

そして、「依頼行為成立」のサインである被依頼側の「反応発話」について、日本語母語話者同士の会話と台湾華語母語話者同士の会話両方には、断りになりそうだという「断りのニュアンスを含めた発話」（例えば例 7 5 の発話番号 2 6）、依頼に関する「情報要求発話」（例えば例 7 6 の発話番号 4 1）、「疑問・驚き」（例えば例 7 7 の発話番号 5）、「繰り返し・確認」（例えば例 7 8 の発話番号 3 0）、「断りへの事情説明」（例えば、「ごめんなさい、私明日バイトなんですよ」）など、様々な「反応発話」が見られた。

例 7 5 【資料 2 9】

①②③「事情説明」→④「依頼発話」→⑤「反応(マイナスのニュアンスを含む)」

依頼側 JBI10	発話番号	被依頼側 JOK10
①あのねー、(うん) 実は、(うん) あの、明日、えっとー、なんか友達に頼まれてっていうか、あの頼まれ(あん) 事で、(うん) 国立国語研究所に行って、	19	
	20	うん。
②あの一なんか言語調査に関するね実験をすることになってたんだけど、<私が><{}>。	21	
	22	<うんうんうん><{}>。
③それがちょっと行けなくなってしまって、私が。	23	
	24	うん。
④それにもしよかったら代わりに行ってきてもらえないかなと思ったんだけど。	25	
	26	⑤あーーー、そっかー。

例 7 6 【資料 1 2】

①「事情説明」→②「反応(情報要求)」

依頼側 JBI04	発話番号	被依頼側 JYK04
①えっと、国立国語研究所っていうところで、(はい) えっと、かい、日本語の会話に関する実験があって、(はい) それでね、私が高校の時の友達と一緒にいるって予定だったんだけど、(はい) 私のほうで急にないはずのテストが浮上ってきて、(はい) やることになっちゃったんで、(はい) ちょっと都合が悪くなっちゃったので、(はい) 誰か代替りの人がいないかってことで探しているんですけど。	30	
	31	②はい、それはいつなんですか?。

例 7 7 【資料 2】

①「前置き」→②「依頼発話」→③[反応(疑問・驚き)]

依頼側 JBI01	発話番号	被依頼側 JSK01
①ちょっとお願いがあつて、(はい) 電話したん (はい) ですが。	2	
	3	はい。
②実は、月曜日の、(うん) 午前中 9 時ぐらいにね、(うん) 3 時間ぐらい、えっとね、国立国語研究所に行って、(うん) 言語調査に関する実験を私の代わりに、「人名」さんてひととうけてきてくれませんか? <少し笑いながら>。	4	
	5	③何なんですか?、それは<微かに笑いながら>。

例 7 8 【資料 7 4】

①「前置き」→②③「事情説明」→④[反応(繰り返し・確認)]→⑤「依頼発話」

依頼側 TBI12	発話番号	被依頼側 TYK12
①對啊，不過我想麻煩你(嗯)一件事情。 【そうよ、でも、一つお願いしたい (うん) ことがあるんだけど。】	26	
	27	好，請說。 【いいよ、どうぞ言つて。】
②就是，嗯，我之前有修一門課嘛，然後(嗯)教授就是拜託我們幫他一個忙，然後是(嗯)中研院(嗯)做一個研究。 【あの一、うん、私は前にある授業をとつて、そして (うん) 教授が私たちに協力するように頼んで、それは (うん) 中研院 (うん) の一つの研究。】	28	
③然後就是很早之前就答應了啦，(嗯)可是我因為明天早上就是臨時有事，， 【それからそれはずいぶん前に約束したことだけど、(うん) だけど明日の朝急に用事ができたから，，】	29	
	30	④明天早上?。 【明日の朝?。】

⑤對，就是臨時有事(嗯，嗯)，所以想問你看可不可以。 【そう、で急に用事ができたから（うん、うん）、あなたが行けるかどうかを聞こうと思って。】	31		
--	----	--	--

以上の結果をまとめてみると、日本語母語話者同士の会話において、依頼側による「依頼可能性の確認」や「前置き」が依頼の中心部である「事情説明」と「依頼発話」に先行することに関しては、高木（2003）が指摘しているように、依頼側の「今は大丈夫？」の発話により、被依頼側が置かれている状況に対する配慮が現れており、それに対して被依頼側が「うん、大丈夫だよ」（例えば例66の発話番号5、例67の発話番号8）と答えることにより、会話の成立が保証され、会話を次の働きかけに展開させる効果を持つと考えられる。他には例66のように、「なにになに？」（発話番号7）などの発話で、被依頼側は依頼側が自分に働きかけた意図を積極的に理解しようとし、次の展開、すなわち「事情説明」を促している会話も見られた。それらに対して、台湾華語母語話者同士の会話では、依頼の用件が被依頼側によって引き出されることは、電話の受け手である被依頼側は、電話の掛け手である依頼側がこれから自分に働きかける意図を積極的に理解しようとする一つの現われであろう。

また、依頼の中心部において、日本語母語話者同士の会話にも台湾華語母語話者同士の会話にも見られた、「依頼を表す典型的な言語形式」に「意思・希望表明」の発話が同時に用いられるのは、依頼側が相手に依頼する「当然性」が低いと認識したため、なぜあなたに依頼をするのかといった事情説明をより明確にしたり、依頼したいという意図の明示度が比較的に低い依頼発話を用いたりし、依頼することによって相手のフェイスを脅かす度合いをやわらげる工夫をしていると考えられる。一方、例73、41番の発話のように、被依頼側が自分は頼まれているのだということを先に汲み取って、相手に依頼発話を言わせる前に反応してあげることも一つの配慮と言える。

検証資料には日本語母語話者同士の会話と台湾華語母語話者同士の会話とも、依頼の中心部において依頼側が「事情説明」なしで依頼の意図を伝えている会話はほとんどなかった。無論、依頼する「当然性」の高い内容であれば依頼発話だけで依頼行為の成立に導く可能性は考えられるが、本調査の依頼内容には不十分だったことであろう。このような場合、「事情説明」を取り入れることによってワンクッションがおかれ、被依頼側にかかる負

担を実質的または心理的に軽減できると考える。

「依頼・断り」のコミュニケーションの中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の表現意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証してきた。

実際の会話における「依頼」でも「断り」でも一度の発話のやりとりで終わるのではなく、相手の反応を見ながら、相手との相互作用のなかで徐々に作り上げられていくことがわかった。異なる文化を背景にする日本語母語話者と日本語学習者がコミュニケーションを行うとき、言葉が通じるとしても、そのコミュニケーション行動の違いにより相手の誤解を招くおそれがある。人間関係の維持に支障を来たさないためには、コミュニケーション主体として適切に「表現行為」「理解行為」をし、コミュニケーションを展開させていく必要があるであろう。

第8章 日本語教育への提案

—実際の会話に見られたやりとりの特徴をどのように教室活動に取り入れるか

外国語をある程度学習した者にとって突き当たる一番大きな問題は、目標言語の語用論的言語マナーを身に付け、より良いコミュニケーションを行うことである。これは特に、相手との間に深刻な摩擦を生み、その方法いかんによって今までの人間関係を維持できなくなる危険性がある「断り」という言語行動においてはなおさらのことであろう。したがって、これらの言語行動をいかに適切に学習者にわかりやすく指導するかは、日本語教育上、非常に重要なポイントとなる。そのためにも「断り」の基本構造を導き出し、学習者に提示することは学習者が断りのストラテジーを行う際の安全策と呼べるものである。

本章では、日本語母語話者同士による会話と台湾華語母語話者同士による会話の比較結果を受けて、実際の会話に見られたやりとりの特徴をどのように教室活動に取り入れるか、学習の目的と段階を踏まえて、「依頼」に対する「断り」の談話における依頼側と被依頼側の二つの観点から考える。

8. 1 依頼側に立った学習者に対する指導

実際の会話の「断り談話」における「依頼行為成立」までの談話展開には、依頼側による依頼を表わす典型的な言語形式を含む発話が見られた。しかし、依頼を表わす典型的な言語形式が伴う発話が含まれている談話であっても、依頼の機能はその典型的な言語形式のみによって達せられるわけではない。「依頼行為成立」までの依頼側の行動展開を分析した結果、依頼発話がなされるまでに、「依頼可能性の確認」や「依頼受諾可能性の確認」があるものがほとんどだった。依頼発話それ自体を発するのみでは不十分だということがわかった。

また、依頼は本質的に相手に負担を掛ける行為であるため、相手を配慮しつつ被依頼側に依頼内容を遂行してもらうためにも、「依頼行為成立」までの談話展開において、被依頼側に不快感を与えないように、相手を配慮した行動をとる必要があることを強調して提示する必要があるだろう。柏崎（1995）も、依頼をされる際に受ける印象は、その談話展開

の仕方によって変わってくるという実験結果を報告している。本研究で抽出された「【依頼可能性の確認】→【前置き】→【事情説明】→【依頼発話】→【感謝／謝罪】」などの一連の働きかけ行動も、「依頼談話」のパターンの一つとして提示することが考えられる。学習者がそのような談話レベルのつながりに気づくよう、教室活動の設計に工夫することが重要である。

また、実際の会話の「依頼談話」においては、依頼側による依頼を表わす典型的な言語形式を含む発話が伴わない談話もかなり見られた。そういった依頼発話は発せられていないが、「明日の午前中って暇ですか」「言語調査とかって興味ありますか」のような「依頼受諾見込みの確認」や「言語調査に関する実験をすることになってたんだけど、ちょっと行けなくなってしまって・・・」のような「事情説明」によって、依頼という意図が相手に伝えられていた。

このように、日本語教育の現場においても、典型的な形式による機能の実現に加えて、典型的な形式を用いずに、談話の流れや相手との相互作用の中で実現されるということを学習者に認識させる必要があるだろう。

依頼の典型的な形式をまだ学習していなかったり忘れていたりする場合、このようなパターンをサバイバル的に用いて依頼を成立させることができる。例えば、依頼発話の「プリントを貸してもらえますか」を産出することができなくとも、「依頼受諾見込みの確認」としての「プリントを持っていますか」や「事情説明」としての「プリントをなくしました」等といった発話を連続して用いることにより、「プリントを借りたい」という依頼の意図を相手に伝達できることを、指導に取り入れることが可能である。

さらに、依頼発話を使用しない「依頼行為成立」の働きかけ行動のパターンは、対人配慮行動としても重要なストラテジーである。学習者の語学力が向上するにつれ、文法レベルや一文レベルの発話の正しさに加え、置かれている場面に適したコミュニケーションを可能にする談話展開の能力が期待されるようになるからである。

そこで、中・上級学習者に対しては、依頼の内容や相手との関係に応じて、依頼を表わす典型的な言語形式を含む「依頼発話」を用いた働きかけ行動のパターンと、あえて「依頼発話」を用いないパターンとの使いわけを指導することが考えられる。

すなわち、依頼側に立った学習者に対する指導にあたっては、談話レベルという観点を取り入れることが重要である。「依頼行為成立」は、それまでの働きかけや依頼が受諾された（もしくは拒絶された）あとの談話展開など、一文レベルではなく、「依頼談話」の全体

の流れを見ることによってこそ十分に理解されることであった。だからこそ、「依頼発話」を用いずに、「【前置き】（あのね）→【事情説明】（〇〇の授業のプリントをなくしちゃって）→【依頼受諾見込みの確認】（「人名」さん持ってる？）」という談話の流れによって依頼の意図を相手に伝えることが可能なのである。

8. 2 被依頼側に立った学習者に対する指導

従来、「依頼」や「誘い」などの「行動展開表現」のストラテジーが取り上げられることが多かったものの、「受諾」「断り」などのような、相手の働きかけを理解してはじめて自分の表現意図が生まれる行動に視点を置いた会話教育への提言は少なかった。本研究の分析では、「依頼談話」のはじめから「依頼行為成立」までの相互作用において、依頼側が「依頼発話」を発する前に、被依頼側が依頼側の意図を汲み取り、依頼側に協力し始めるか、断りのニュアンスを出したり断りの予告をしたりする行動が確認された。また、「依頼行為成立」から「会話終了」までにおいて、受諾された依頼内容をその場で遂行しない場合には、「依頼内容の遂行の約束の成立」に向けて被依頼側から「じゃあとで、だいたいいつ頃電話してくれるの？」と働きかける発話も確認された。

このように、「依頼談話」における被依頼側の役割は、依頼側の働きかけを一方的に受けるのではなく、「依頼行為成立」に欠かせない役割を果たしている。本節では、「依頼談話」における被依頼側の役割を、いかに教室活動へ取り入れていたらよいかについて述べる。

例えば、実際の「依頼談話」において、「依頼発話」は発せられていなくとも、「プリントを持っていますか」「プリントをなくしてしまっ」などの発話を聞いたとき、相手がプリントを借りたいという依頼の意図を理解し、「いいですよ」などと先取りの応答をすることで、協調的なコミュニケーションとなるであろう。

そして、いったん受諾した依頼内容をその場で遂行しない場合は、「明日プリントを持ってくるけど、大学に来る？」といった発話をするなど、依頼内容を遂行するための約束をすることによって、依頼側の「プリントを借りる」という遂行課題の達成に協力的であることを示すことができる。すなわち、依頼側が依頼意図の伝達や依頼内容を遂行するための具体的な約束をしようとする前に、被依頼側が依頼側の意図を予測し、積極的に反応す

ることで、依頼側への配慮が表わせる。実際の会話における「依頼談話」に見られる被依頼側による働きかけ行動は、対人コミュニケーション上、非常に重要な要素であるため、被依頼側としての学習者が実際のコミュニケーション場面でよりよい対人関係を築くことを可能にするためには、このような応用的な指導を行うことが有効だといえるであろう。

また、「依頼談話」において、相手の依頼を断るときの行動に関しては、以下の例に示されたような展開が考えられる。

クラスメート（「相手」レベル・0）から論文の翻訳チェックを依頼される

（A:それほど親しくないクラスメート、J:自分）

A:あの、〇〇さん、すみません。ちょっとお願いしたいことがあるんですが・・・。

J: **「あ、何ですか。」** **「内容を確認する」**

A: 私、今、国際結婚について調べていて、今度学校の年報に論文を投稿してみようと思ってるんですよ。

J: **「へえ、すごいですね。」** **「関心を示す」**

A: それで、論文の中に〇〇語（〇〇さんの母語）で書かれた文献を引用しているんですが、それを正しく翻訳できているかどうか、ちょっと不安なんです。

J: **「あ、そうなんですか。」** **「断りのニュアンスを出す」**（イントネーションに注意）

A: それで、忙しいところ、本当に申し訳ないんですが、その翻訳に問題がないかどうか確認してもらえると大変ありがたいんですが、お願いできませんでしょうか。

J: **「そうですね。」** **「断りの予告」**（イントネーションに注意）

「実は、今私もちょうど書かなければならないレポートをかかえてて、ちょっと時間がな

いんですよ。」 **「事情説明」「断り」**

「ほかの時期だったらお手伝いできたと思うんですが。」 **「代案」**

A: そうですか。お互い、忙しいですからね。

J: **「本当にごめんなさい。」** **「依頼に応えられなかったおわび」**

また、以下のことについて、被依頼側に立って練習する際に、学習者に目を向けさせる必要があると思われる。

- ・「検討させてください」「考えさせてください」は、その場での結論を保留する表現である。この言葉は実際に検討してくれる場合もあるのだが、相手が首を傾げて言ったり、顔をしかめて言ったとすれば、十中八九、それは断りを表わしている。これは、日本語母語話者は面と向かって「ノー」というのは相手を傷つけると思い、このように言いにくいことは言葉で言わず表情から察してほしいと思っていたのである。
- ・親しい友人との会話であっても、やはり断る事情をはっきり述べ、「ごめんなさい」の気持ちが伝わる断り方が必要であろう。
- ・「お役に立てなくて、すみません」は、事情があつてそうしたいができない気持ちを伝える言葉である。頼まれたのに断らなければならないときには、この一言があるかないかで、相手に与える印象はずいぶん変わるものである。
- ・相手の依頼を断るといった場合には、相手の気分を損ねないよう、ことばを適切に選択し、表現をやわらげる必要がある。例えば、断りと言う場合には、その戦略として、断る事情を述べる、声や表情で気が進まないことを示す、はっきり答えるのを回避して相手に察してもらう、といった様々なものが考えられる。コミュニケーション主体が、相手との関係や事柄の性質、その場の状況などをどのように捉え、どのような配慮を持って自分の意思を表しているのかに目を向けることによって、日本語でよりよいコミュニケーションを行うための訓練に役立てることができる。
「はい」などの返事、相手の発言を受ける「そうですか」、質問の答えを述べる前にクッションとして言う「うーん」「そうですねえ」などのことばは相手の存在や発言を認識したことを表す機能を持っていて、やりとりの流れをスムーズにし、雰囲気をやわらげる働きを持っている。
- ・相手を傷つけずに依頼を断るのは難しい場合も多い。学習者に今までどんな経験をしたか話させてみるとよい。

- ・断る場合は事情を述べて相手を納得させるというストラテジーをよく使う。学習者の使う断り方のストラテジーについて、また日本と自国との違いについても話させてみるとよい。アメリカ人などはあまり理由を言わずに断ることが普通のようなのであるし、rain-check（いつか）というような断り方もあるが、いずれにしろ、相手の気を悪くさせない配慮が必要である。

日常生活の中で人と人がコミュニケーションをするときには、表現の内容が効果的に伝わり実現するだけでなく、お互いに気持ちの良いやりとりとなることが大切でしょう。そのためには、自分の述べたことが相手にどのように受け取られるのかということへの配慮や、表現内容とともに相手の感情や意思をきちんと受け止めようとする意識を持つことなどが重要になります。

第9章 結論

9. 1 研究成果の総まとめ

本研究では、それぞれ日本語母語話者と台湾華語母語話者による、依頼とそれに対する断りとを含む実際の会話を検証資料に、依頼側と被依頼側とのやりとりを相互関係と捉え、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証してきた。

以下に、2. 4に提示された研究課題に従い、本研究によって得られた結果をまとめる。

1. 日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の実際の会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析した際、日本語母語話者と台湾華語母語話者はそれぞれどのように断りをしているか。そして、いかなる点が共通しており、いかなる点が異なるか。

検証資料を談話レベルから分析し、日本語母語話者と台湾華語母語話者がどのように断りをしているのかを探り、その共通点と相違点を明らかにし、さらに、それらをポライトネスや文化と関連付け、考察した結果、以下のような結果が得られた。

(1) 「断り談話」の構成要素における出現順序について、日本語と台湾華語ともに、また、両言語の目上・同等・目下のどのグループにおいても、「最初に用いられる断りのストラテジー」として「事情説明」を、「最後に用いられる断りのストラテジー」として「謝罪」を多く使用している。

(2) 構成要素の使用頻度について、台湾華語母語話者同士の会話においては、「事情説明」が一番多く使われているのに対し、日本語母語話者同士の会話においては、「謝罪」の使用が他のどの要素よりも多くみられた。

(3) 「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階に分けてみた結果、日本語母語話者と台湾華語母語話者ともに、断りたい意思を伝える際に、主に「回避」、「直接的な断り」、「事情説明」、「否定的な見解の表明」、「謝罪＋事情説明」、「事情説明＋直接的な断り」などのストラテジーを用い、また、相手が自分の断りに了解を示してくれた後に、「謝罪」をした

り、「代案提示」をしたりすることが多いことがわかった。

(4) 相手との「相対的力 (P)」関係による影響を考察してみたところ、両言語にはこれによる相違はあまり見られなかった。以下ではわずかな傾向を示す：日本語母語話者同士の会話では、「直接的な断り」の使用は、同級生からの依頼を断る場合において高い割合を占めている。そして、先輩からの依頼を断る場合は、「代案提示」が使われていないことがわかった。台湾華語母語話者同士の会話では、「回避」というストラテジーは先輩からの依頼を断る場合のみ使われており、「直接的な断り」は後輩からの依頼を断るときに一番多く使われている。

(5) 実際の会話資料の分析結果が DCT によるものとの根本的な違いは、DCT には見られなかった依頼側による「食い下がり」や「気配り発話」が用いられていることである。つまり、実際の会話では、依頼に対して事情説明、回避などのいわゆる間接的な断りを用いて断ったつもりであっても、依頼側にそれが受け入れられず、依頼の場面がもう一度繰り返され、依頼の発話が続く場合もあり、また、依頼側から「無理ならいいのよ」などの相手に対する「気配り発話」をかけられたため、断りをしやすくする場合もある。このように、話し手は聞き手との相互作用の中である特定の発話行為を徐々に作り上げていくことが、談話レベルからの分析によってわかった。

(6) 語用論的な観点から「断り」を考察し、ネガティブ・ボライトネスと言われている日本語においても談話レベルからみれば言語形式以外の言語的ストラテジー(「スピーチレベル・シフト」など)を用いて相手のポジティブ・フェイスに積極的に訴えているということがわかった。

2. 日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の電話会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析した際、日本語母語話者と台湾華語母語話者それぞれの断り行動の展開パターンはどうなっているか。さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているか。

日本語母語話者同士と台湾華語母語話者同士の電話会話における「依頼」に対する「断り」を談話レベルから分析し、日本語と台湾華語それぞれの断り行動の展開パターンを明らかにし、さらに、それらの使用特徴がいかに人間関係維持に機能しているかを考察した。以下に得られた結果をまとめる。

「断り成立まで」の段階において、日本語母語話者調査協力者も台湾華語母語話者調査協力者も「事情説明のみ」のパターンを多く使用している。このことから、日本語と台湾華語ともに、「事情説明」は断りたい意志を伝えるのに効果的と言えるであろう。また、台湾華語母語話者同士の会話39例のうち、「事情説明」が使われているのは37例あったことや、依頼側の調査協力者の「那你要給我一個確切的理由（じゃ明確な理由を教えてくれ）」などの発話から、台湾華語母語話者は断る際に理由を説明したか否かを重要視する傾向があることがわかった。

また、「断り成立後」の段階において、台湾華語母語話者調査協力者は、一度だけ詫げるか、本研究で提示されたどの断りのストラテジーも使わなかったというパターンがそれぞれ3割程度占めているのに対して、日本語母語話者調査協力者は、「謝罪2回以上」のパターンが圧倒的に多いことが明らかになった。それは、この段階において、断りによって生じた気まずさを緩和するために、依頼側と断る側が詫び合っている例が多かったからだと考えられる。

本調査から、相手との「相対的力」関係による影響はあまりみられなかったが、「謝罪」や「回避」のみで断りの成立に導いた会話は日本語母語話者が後輩からの依頼を断る場合にしかなかったことや、日本語母語話者が先輩からの依頼を断る場合は先輩に代案提示をしないこと、台湾華語母語話者調査協力者は同級生からの依頼を断った後、より積極的に「代案提示」をしたり「条件提示」をしたりするなどの興味深い結果がみられた。

3. 日本語母語話者と台湾華語母語話者による、「依頼」とそれに対する「断り」とを含む実際の会話を検証資料に、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するか。

「依頼・断り」のコミュニケーションの中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の表現意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証してきた。

その結果、実際の電話会話の「依頼・断り」のコミュニケーションにおいては、依頼行為は、依頼側が発した1文レベルの「依頼発話」だけによって成立するものではなく、「依頼発話」に先行する「依頼可能性の確認」「前置き」「依頼受諾見込みの確認」「事情説明」などを含むより長い発話の連鎖によって、被依頼側との相互作用の中で動的に成立していくということが明らかになった。また、依頼行為が成立してから断りの目的が達成されるまでの段階においては、依頼を断らなければならない決定的な事情がある場合、被依頼側による「理由説明」を中心に展開し、依頼側による「断りへの了解を示す発話」までのやりとりが短い場合が多い。一方、依頼を断る決定的な事情がない場合、被依頼側は情報要求をしたり、情報を繰り返し確認したり、言いよどんだり、依頼内容について否定的な意見を述べたりする行動が見られた。そして、断り目的達成から会話終了までの段階においては、依頼側による「お詫び」や「感謝」、被依頼側による「お詫び」や「代案」の配慮行動が観察された。

さらに、「依頼・断り」のコミュニケーション全体において、被依頼側は、依頼側からの働きかけに一方的に反応するのではなく、コミュニケーションがよりスムーズに展開するように、本来依頼側が中心に行う働きかけを先取りするといった、被依頼側による働きかけがあることもわかった。

以上述べたように、「依頼・断り」のコミュニケーションにおいて、日本語母語話者同士の会話と台湾華語母語話者同士の会話には共通点が多かったが、依頼の切り出し方や断りによって気まずさを増した会話の終わらせ方には違いが見られた。具体的に提示すると、日本語母語話者同士の会話では、依頼側による「依頼可能性の確認」や「前置き」から始まり、依頼側と被依頼側が詫び合っているやりとりで終わる場合が多いが、台湾華語母語話者同士の会話においては、依頼の用件が被依頼側によって引き出され、最後に依頼側が

感謝し被依頼側が謝罪する例が多かった。

9. 2 日本語教育への示唆

本研究で得られた実際の言語使用に関する結果は、第二言語教育にも応用できるであろう。すなわち、日本語と台湾華語において、いかなる断りの行動が可能、あるいは適切で、いかに解釈されうるかということを学習者に理解してもらい、適切に学習言語を使用するため応用できると考えられる。また、言語そのものだけではなく、言語使用に反映されている文化価値も理解できるといえる。

異なる文化を背景にする日本語母語話者と台湾華語母語話者がコミュニケーションを行うとき、言葉が通じるとしても、その言語使用の違いにより相手の誤解を招くおそれがある。日本語母語話者と台湾華語母語話者がより良いコミュニケーションを行うためには、実際の言語使用とともに、そこに反映されている文化の価値を理解しなければならない。それゆえ、本研究は、日本語と台湾華語のコミュニケーションの相互理解の一助になると考えられる。

また、「依頼」と「断り」は、Brown and Levinson(1987)が指摘しているように、相手に負担をかける、相手のフェイスを脅かす可能性のある行為であり、それらを行う際に配慮を要する。その配慮の仕方は言語文化によって異なるため、異文化間ミス・コミュニケーションを引き起こす原因となる恐れがある。それを防ぐために、今後の会話教育においては、コミュニケーション主体として適切に「表現行為」「理解行為」をすることの大切さを強調し、コミュニケーションの展開パターンを積極的に指導する必要があると考える。

9. 3 今後の課題

本研究では、主に日本語母語話者と台湾華語母語話者の女子大学生を被験者としたが、男性被験者を取り入れることで、男女差による言語使用の特徴を探りたい。

また、本研究では、主に言語使用の特徴に重点をおいたため、イントネーション、ポーズなどの音声的な側面は考慮に入れなかった。しかし、ためらいやポーズなどは、そのみで依頼側はこれから被依頼側が断ろうとしていることが察知できる場合がある。それゆえ、今後、このような音声的な側面が「依頼」に対する「断り」の場面においてどのように機能しているかについて分析を行いたい。

なお、今後は、本稿では取り上げなかった、スピーチレベルのシフト操作や、相手の反応や相づちを待ちながら会話をすすめるなどの「依頼・断り」のコミュニケーションに見られる特徴を、本稿の分析から明らかになった被依頼側による積極的な働きかけ行動なども併せてより総合的に分析することによって、そこから得られた知見がいかに会話教育に生かせるかということについて、さらに考察を深めていきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご協力とご指導をいただきました。この場をお借りして感謝の言葉を申し上げます。

まず、博士論文執筆中、数々の励ましのお言葉と綿密なご指導をくださった指導教官の蒲谷宏教授に最も深い謝意を表します。先生は、私が自信を失くしたときに勇気づけてくださったり、戸惑いを感じたときに相談に乗ってくださったり、目標を見失ったときに指導をしてくださったりしていました。先生のサポートと啓発がなければ、この研究を完成するのは不可能だったように思います。

次に、本博士論文の副査になっていただいた、小宮千鶴子教授と鈴木義昭教授に心より感謝いたします。貴重なコメントと有益な助言を誠にありがとうございました。

また、会話の録音に協力してくださった日本と台湾の大勢の調査協力者の方々に感謝の意を表します。そして、同研究科の有志である頼美麗氏と黄鈺涵氏にも感謝します。台湾華語母語話者として多くのアドバイスをくれたり温かく応援してくれて、心強かったです。

最後に、いつも激励・サポートしてくれた親愛な台湾の家族と友人の皆に感謝したいと思います。特に私を精神的、経済的に支えてくれて、好きなように研究を続けさせてくれている家族に感謝いたします。彼らの愛とパワーをもらえたからこそ、博士後期課程在籍の三年間半の間、頑張って研究を続けてこられたと思います。

この研究成果をお世話になったすべての方々に捧げます。本当にありがとうございました。これからも、よろしくお願いします。

参考文献

[日本語]

- 池田理恵子 (1993) 「謝罪の対照研究—日米対照研究——face という視点からの一考察—」
『日本語学』第 12 号, 明治書院, 13-21.
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79 号, 41-52.
- 石井敏・久米昭元編 (2005) 『異文化コミュニケーション研究法』, 有斐閣.
- 今井芳昭 (2005) 「依頼・要請時に用いられる影響手段の種類と規定因」『心理学評論』第 48 巻第 1 号, 心理学評論刊行会, 114-133.
- 任炫樹 (2003) 「日韓両言語における断りのストラテジー—言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に」『ことば』24 号, 現代日本語研究会, 60-77.
- 任炫樹 (2004) 「語用論の観点から見た承諾・断り表現」『ことば』25 号, 現代日本語研究会, 50-66.
- 任炫樹 (2004) 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』第 6 巻第 2 号, 社会言語科学会, 27-43.
- 宇佐美まゆみ (1993) 「談話レベルから見た “Politeness” — “Politeness Theory” の普遍理論確立のために」『ことば』第 14 号, 現代日本語研究会, 20-29.
- 宇佐美まゆみ (1998) 「ポライトネス理論の展開: ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本語研究・教育年報 1997 年度版』, 東京外国語大学日本課程編, 145-159.
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』第 18 巻 10 号, 明治書院, 40-56.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』 第 7 回国際シンポジウム報告書, 国立国語研究所編, 凡人社, 9-58.
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書, 4-21.
- 宇佐美まゆみ (2003) 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』第 54 巻 3 号, 国語学会, 117-132.

- 岡田安代・杉本和子 (2001) 「外国人の断り行動と日本人の評価」『愛知教育大学研究報告』50 (教育科学編), 愛知教育大学, 153-160.
- 尾崎学 (2004) 「外国人に対する待遇表現教育の理論—表現に至る過程の重要性について—」『日本語教育研究』第 46 号, 財団法人言語文化研究所, 47-57.
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動から見た日韓の異同」『日本語学』第 24 号, 明治書院, 42-51.
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の〈関係〉に関する日韓対照」『社会言語科学』第 8 巻第 1 号, 社会言語科学会, 106-119.
- 巖庭美 (2004) 「日本語と朝鮮語における依頼の仕方の対照研究—発話機能の観点から—」『言語と文化』第 7 号, 関西学院大学言語教育研究センター, 1-11.
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に—」『日本語教育』79 号, 日本語教育学会, 53-63.
- 柏崎秀子 (1995) 「談話レベルで捉える丁寧さ—談話展開が丁寧度評定に与える影響—」『亜細亜大学日本文化研究所紀要』第 1 号, 亜細亜大学日本文化研究所, 61-73.
- 加藤恵 (1999) 「断りの表現について—高校生の英語表現と学力に注目して—」『東京女子大学言語文化研究』第 8 号, 東京女子大学言語文化研究会, 1-12.
- 加納陸人・梅曉蓮 (2002) 「日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察—断り表現を中心に—」『言語と文化』第 15 号, 文教大学大学院言語文化研究科附属言語文化研究所, 19-41.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』, 大修館書店.
- 蒲谷宏 (2003a) 「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座 日本語教育』第 39 分冊, 早稲田大学日本語研究教育センター, 1-28.
- 蒲谷宏・待遇表現研究室 (2003b) 「「待遇コミュニケーション」とは何か」『早稲田大学日本語教育研究』第 2 号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 55-76.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子 (2006) 『敬語表現教育の方法』大修館書店.
- 蒲谷宏 (2005) 「〈行動に展開する表現〉におけるコミュニケーション上の工夫」『新「ことば」シリーズ 18 伝え合いの言葉』国立国語研究所, 40-48.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子 (2006) 『敬語表現教育の方法』大修館書店

- 邱利華（2000）「日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の対照研究」『比較社会文化研究』第8号，九州大学大学院比較社会文化学府，57-76.
- 邱利華（2002）「発話行為「断り」に見られるストラテジー—「意味公式」の新しい枠組の創造—」『比較社会文化研究』第11号，九州大学大学院比較社会文化学府，23-28.
- 金秀英（1998）『日本語の話しことばにおける依頼に対する断り表現：韓国語との比較から』，平成10年度東京外国語大学大学院修士論文.
- 金潤淑（2005）「「依頼」に対する「断り」の理由の述べ方—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の場合—」『国際教育評論』第2号，東京学芸大学国際教育センター，37-48.
- 梶本総子・宮谷敦美（2004）『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお
- 熊井浩子（1992）「留学生に見られる談話構造上の問題点とその背景」『日本語学』12月号，明治書院，72-80.
- 熊井浩子（1993）「外国人の待遇行動の分析(2)—断り行動を中心に—」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』第28巻第2号，266-227.
- 熊谷智子（1993）「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」『日本語学』第12号，明治書院，4-12.
- 熊谷智子（2003）「日米の依頼行動における「詫び」と「説明」のストラテジー—在米日本人と在日米国人に対する言語行動意識調査から—」『松田徳一郎教授追悼論文集』，研究社，138-149.
- 熊取谷哲夫（1995）「発話行為理論から見た依頼表現—発話行為から談話行動へ—」『日本語学』第14巻第10号，明治書院，12-21.
- 国立国語研究所（1994）『伝えあう言葉4 機能一覧表』日本語教育映像教材 中級編 関連教材.
- 国立国語研究所（2006）『国立国語研究所報告123 言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版.
- アーヴィング・ゴッフマン著・浅野敏夫訳（2002）『儀礼としての相互行為』，法政大学出版局.
- ポリリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.
- 施信余（2004）「談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人大学生同士と台湾人大学生同士との比較—」平成15年度東京外国語大学大学院地域文化

研究科修士論文.

施信余 (2005)「談話レベルからみた依頼に対する断りの日台対照—親しい友人同士の会話データをもとにして—」社会言語科学会第 15 回大会発表論文集, 16-19.

施信余 (2005)「依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人と台湾人の大学生の比較」『早稲田大学日本語教育研究』第 6 号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 45-61.

施信余 (2006)「日本語における「依頼・断り」のコミュニケーションについて—日本人女子大学生同士の電話会話を分析対象に—」『早稲田大学日本語教育研究』第 8 号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 51-62.

施信余 (2006)「依頼に対する断りの行動展開パターンに関する日台対照研究—女性友人同士の電話会話データの分析から—」『国語学 研究と資料』第 29 号, 国語学研究と資料の会, 43-54.

施信余 (2006)「「依頼・断り」のコミュニケーションについて—日本人同士と台湾人同士による電話会話の分析から—」『待遇コミュニケーション研究』第4号, 早稲田大学待遇コミュニケーション研究会, 17-32.

鮫島重喜 (1998)「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の依頼・断り・謝罪の場合」『日本語教育』98 号, 日本語教育学会, 73-84.

謝オン (2001)「談話レベルからみた「依頼発話」の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から」『東京外国語大学日本研究教育年報 5』, 東京外国語大学日本課程.

謝韞・木山幸子・李恩美・施信余・木林理恵・宇佐美まゆみ (2004)「Tufs 会話モジュールの日本語スキットと『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』における依頼行動の対照研究—会話教育への示唆」『言語情報学Ⅲ』, 323-341.

ヘレン・スペンサー＝オーティー編著・浅羽亮一監修・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子 (2004)『異文化理解の語用論』, 研究社.

高木美嘉 (2003)「依頼に対する「受諾」と「断り」の方法」『早稲田大学日本語教育研究』第 2 号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 137-149.

高原脩・林宅男・林礼子 (2002)『プラグマティックスの展開』, 勁草書房.

滝浦真人 (2005)『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』, 大修館書店.

武田加奈子 (1998)「接触場面の断り行動についてのケース・スタディ」『語文論叢』26,

- 千葉大学, 13-28.
- 蔡胤柱 (2005) 「日本語母語話者の E メールにおける「断り」—「待遇コミュニケーション」の観点から—」『早稲田大学日本語教育研究』第 7 号, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 95-108.
- 津田早苗 (1994) 『談話分析とコミュニケーション』, リーベル出版.
- 津田早苗 (1999) 『談話分析と文化比較』, リーベル出版.
- 槌田和美 (2003) 「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析—語用論的ポライトネスの側面から—」『小出記念日本語教育研究会論文集』第 11 号, 小出記念日本語教育研究会, 41-57.
- ジェニー・トマス著 (1995)・浅羽亮一著・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 (1998) 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』, 研究社出版.
- 中道真木男・土井真美 (1993) 「日本語教育における謝罪の扱い」『日本語学』第 12 号, 明治書院, 66-74.
- 中道真木男・土井真美 (1995) 「日本語教育における依頼の扱い」『日本語学』第 14 号, 明治書院, 84-93.
- J.V. ネウストブニー・宮崎里司 (2002) 『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』, くろしお出版.
- 野村美穂子 (1992) 「断りの表現—コミュニケーションと含意—」『言語学論叢』第 10・11 号, 筑波大学, 15-28.
- 羽井佐昭彦 (2002) 「断りに見られるポライトネスの意識とコミュニケーション能力」『千葉工業大学研究報告 人文編』第 39 号, 千葉工業大学, 115-122.
- 浜田麻里 (1995) 「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略—」『日本語学』第 14 号, 明治書院, 69-75.
- 林明子 (2000) 「会話展開の構造と修復のストラテジー—日独語対照の視点からみた「依頼」と「断り」におけるインタラクション—」『東京学芸大学紀要 第 2 部門』第 51 集, 81-94.
- 馬場俊臣・禹永愛 (1994) 「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要』第 45 巻第 1 号, 北海道教育大学, 43-54.
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—「断り」行為の場合—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』第 1 号, 名古屋学院

- 大学, 1-19.
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者に見られる「弁解」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合」『日本語教育』87号, 79-89.
- 文鐘蓮 (2004) 「断り表現における中日両言語の対照研究—意味公式の発現頻度を中心に—」『人間文化論叢』第7巻, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 123-133.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」藤原与一先生古希記念論集『方言学論叢』I, 三省堂, 87-112.
- 宮寄由美 (2005) 「対人配慮からみた携帯メールにおける依頼表現」『専修国文』第76号, 専修大学日本語日本文学会, 1-14.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- 泉子・K・メイナード (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』, くろしお出版.
- 村中淑子 (2001) 「一連の会話における「意思告知」「断り」「依頼」の表現—東大阪市における会話作成調査より②—」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第14号, 姫路獨協大学外国語学部, 271-294.
- 目黒秋子 (1994) 「「謙遜型」断りのストラテジー」『東北大学文学部日本語学科論集』第4号, 東北大学文学部日本語学科, 99-110.
- 目黒秋子 (1996) 「日本語の談話における間接的断り理解の過程—母語話者の認知の視点から—」『東北大学文学部日本語学科論集』第6号, 東北大学文学部日本語学科, 105-116.
- 目黒真実・勝間祐美子・濱川祐紀代・栗原毅 (2001) 『コミュニケーションに強くなる日本語会話』アルク
- 森山卓郎 (1990) 「「断り」の方略—対人関係調整とコミュニケーション」『月刊言語』8月号, 大修館書店, 59-66.
- 山口和代 (1997) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因—中国人および台湾人留学生を対象として」『日本語教育』93号, 日本語教育学会, 38-48.
- 山下みゆき (2002) 「日本語母語話者と学習者による前置き表現の印象の相違」『日本語教育論集』第18号, 国立国語研究所日本語教育部門, 45-57.
- 横山杉子 (1993) 「日本語における, 「日本人の日本人に対する断り」と「日本人のアメリカ人に対する断り」の比較—社会言語学のレベルでのフォリナートーク—」『日本語教育』81号, 日本語教育学会, 141-151.

- カノックワン・ラオハブラナキット (1995) 「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較」『日本語教育』87号, 25-39.
- カノックワン・ラオハブラナキット (1997) 「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7, 97-112.
- リーチ, G. . N. 著 (1983) 池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』, 紀伊国屋書店.
- 李善子 (2002) 「中国語と日本語における談話の構造分析—依頼を中心に—」『比較社会文化研究』第12号, 九州大学大学院比較社会文化学府, 101-107.
- 劉玉琴・小野由美子 (1996) 「中日母語話者の「断り」発話行為に見られる相違について」『中国四国教育学会教育学研究紀要』第42巻第2部, 中国四国教育学会, 540-545.
- ジョージ・ユール著・高司正夫訳 (2000) 『ことばと発話状況—語用論への招待—』, リーベル出版.

[英語]

- Andrew Cohen (1996) Investigating the production of speech act sets. *Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language*. Mouton de Gruyter, 21-43.
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986) *Observing Interaction: an Introduction to Sequential Analysis* Ch.4. Assessing Observer Agreement. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beebe, L. M., Cummings, M. C. (1996). Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In S. M. Gass, & J. Neu(Eds.), *Speech acts across cultures: Challenges to communication in a second language*. New York: Mouton de Gruyter, 65-86.
- Beebe, L. M., T. Takahashi. & R. Uliss-Weltz (1990) “Pragmatic Transfer in ESL Refusals” in R. C. Scarcella, E. S. Andersen & S. D. Krashen, eds. *Developing Communicative Competence in a Second Language*, Newbury House, New York.
- Bergman, M. L., & Kasper, G. (1993). Perception and performance in native and nonnative apology. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics*. New York: Oxford University Press, 82-107.
- Blum-Kulka, S. (1987). Indirectness and politeness in requests: Same or different?

- Journal of Pragmatics*, 11(2), 131-146.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge :Cambridge University Press.
- Chen Ching-Yi (2006) An Interlanguage Pragmatic Study of Refusals by Chinese Learners of English in Taiwan. A Master Thesis Presented to Institute of TESOL, National Chiao Tung University.
- Dan Sperber and Deirdre Wilson (1988) *Relevance: Communication and Cognition*. Harvard University Press.
- Fukushima, S. (1996) Request strategies in British English and Japanese. *Language Sciences*, 18, 671-688.
- Gass, S. M., & Houck, N. (1999) *Interlanguage refusals: A cross-cultural study of Japanese-English*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual Essays in Face-to-face Behavior* Chicago: ALDINE Publishing Company.
- Goffman Erving. (1967) *On face-work: An analysis of ritual elements in social interaction*. In E. Goffman, New York: Anchor Books.
- Hong, W. (1996). An empirical study of Chinese request strategies. *International Journal of the Sociology of Language*, 122, 127-138.
- Kasper, G. (1992) Pragmatic transfer. *Second Language Research*, 8, 203-231.
- Kasper, G. & Dahl, M. (1991) Research methods in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 215-247.
- Leslie M. Beebe – Martha Clark Cummings (1996) Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. *Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language*. Mouton de Gruyter, 65-86.
- Liao Chao-chih (1994) *A Study on the Strategies, Maxims, and Development of Refusal in Mandarin Chinese*. Taipei: The Crane Publishing.
- Liao, C. C., & Bresnahan, M. I. (1996) A contrastive pragmatic study on American English and Mandarin refusal strategies. *Language Sciences*, 18, 703-727.
- Noel Houck – Susan M. Gass (1996) Non-native refusals: A methodological perspective.

- Speech Acts Across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language.*
Mouton de Gruyter, 45-64.
- Olshaitain, E. (1983) Socioculture competence and language transfer: The case of apology. In S. Gass, & L. Selinker (Eds.), *Language transfer in language learning*. Rowley, MA: Newbury House, 232-249.
- Pan Yuling (2000) Politeness in Chinese Face-to-face Interaction. Ablex Publishing Corporation.
- Patricia J. Wetzel (2004) Keigo in Modern Japan: Polite Language From Meiji to the Present. University of Hawaii Press.
- Richard J. Watts. (2003) Politeness. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ron Scollon and Suzanne Wong Scollon (1994) *Intercultural Communication: A Discourse Approach*. Blackwell.
- Rose, K. R. (1996) Japanese, American English, and directness: More than stereotypes. *JALT Journal*, 18, 67-80.
- Rose, K. R., & Ono, R. (1995) Eliciting speech act data in Japanese: The effect of questionnaire type. *Language Learning*, 45, 191-223.
- Schegloff, Emanuel A. (1968) *Sequencing in conversational openings*. *American anthropologist* 70.6:1075-95.
- Schegloff and H. Sacks (1973) *Opening up closing*. *Semiotica*, 7.4:289-327.
- Shih, Yu-hewi (1999) *Conversational politeness and foreign language teaching*. Taipei: The Crane Publishing Co. Ltd.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman.
- Trosborg, A. (1995) *Interlanguage pragmatics: Requests, complaints and apologies*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Turnbull, W., & Saxton, K. L. (1997) Modal expressions as facework in refusals to comply with requests: I think I should say 'no' right now. *Journal of Pragmatics*, 27, 145-181.
- Ueda, Keiko (1974) Sixteen Ways to Avoid Saying 'No' in Japan. In Condon, J. and M. Saito (eds.) *Intercultural Encounters With Japan*, Tokyo: Simul Press 185-192.

- USAMI Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.
- Wang, Yu-Fang(1999) The Art of Chinese Refusals: What is meant is more than what can be said. Paper presented at the 8th IACL (International Association of Chinese Linguistics) Annual Conference, Melbourne University, Australia.
- Wierzbicka, A. (1991) *Cross-cultural Pragmatics: the Semantics of Human Interaction*. Berlin: Mouton de Gruyter.

[中国語]

- 張清源主編(1990)：現代漢語知識詞典，四川：四川人民出版社。
- 顧曰國(1992)：禮貌、語用與文化。收於束定芳主編，中國語用學研究論文精選，539-554。上海：上海外語教育出版社。
- 謝佳玲、陳靜怡、胡家榮(2004)：華語拒絕行為探討-如何說”不”。第二屆台灣華語教學年會論文集，73-86。
- 李婉妤(2006)：跨文化華語拒絕策略研究-以美加籍學生為例。國立高雄師範大學華語文教學研究所碩士論文。
- 廖招治(1995)：拒絕方式探討中美文化差異。英語教學，第19卷，第4期，79-87。
- 林淑慧(2003)：現代漢語口語交際語法之初探。國立台灣師範大學華語文教學研究所碩士論文。
- 王愛華(2001)：英漢拒絕言語行為表達模式調查。外語教學與研究，第33卷，第3期，178-185。
- 吳建設(2003)：拒絕語的表達方法。四川外語學院學報，第19卷，第4期，106-109。
- 葉德明(1999)：華語文教學規範與理論基礎-華語文為第二語言教學理論芻議。台北市：師大書苑。